

別れの日々00. 9

(脆くはあるが暗くない①-⑤3より)

- | | | |
|-----|--------------------|--------------|
| 第1章 | 在宅時代 | 1 1 |
| | 知らぬ間に始まって6-7年介護した | |
| 第2章 | 泰子自身 | 5 1 |
| | 若くして始まり職員も驚く早さで進行 | |
| 第3章 | 特養風景 | 1 6 5 |
| | 信頼と尊敬のもとに理想のサービス授受 | |
| 第4章 | 一人暮らし | 2 2 9 |
| | 「男は三年」と言われても遅く生きる | |
| 第5章 | 生き方 | 3 4 9 |
| | ボランティアしてるつもりがされており | |
| 第6章 | 積極発信 | 4 3 5 |
| | 偏見を無くすには体験者が裸になって | |
| 第7章 | その他 | 4 8 3 |
| | 身の回りの出来事を見る痴呆家族の思い | |

2000年9月30日発行

別れの日々〇〇・九

— 脆くはあるが暗くない —

(「別れの日々」

①

—

⑤③

より)

はじめに

妻、泰子は一九三二年二月七日生まれ、一九九〇年頃(?)から徐々に痴呆症が発症したものと思われ、一九九七年春、痴呆疾患センターに緊急入院、ほどなく、新設された特別養護老人ホーム(注)に入所することができました。

現在は、同ホームで手厚い介護を受けていますが、年若くして発病したためか、進行が早く、厳かな時が近付いていることを覚悟せざるを得ません。妻はいま聞くことも話す事もできず、過去も現在も未来もなく、朝もなく夜もなく、生もなく死もありません。夫も分かりません。すべての感覚は低下し、意識レベルも下がってウツラウツラと半分眠っていることが多い状況です。

彼女は、北九州市立保育所(複数)長として十数年を過ごし、定年より二・三年早く退職し、ほどなく発病したことになります。在職中の一九五一年頃から(キリスト)教会の奉仕に当たり、のちに主任オーガニストを勤めました。

結婚し、戸畑に遣わされてからは牧師補助者として私を助け、奏楽奉仕のほか教会の一切を処理し、有能なワープロオペレーターとして、大小三十余冊の

教会文書の発刊に大いに貢献しました。

私（太郎）は、妻の緊急入院の日から、つゝの思いを詩に託して来ましたが、それが現在までに千篇を大きく越えるに至りました。そこで今回、介護に関係の深いものを選び、七章に分けて整理出版することとしました。複数章にまたがる性格のものもありましたが、どちらか一つに収めてあります。個々の詩は、作成年月日の順序に並んでおり、各年のはじめには「年」を記しました。従って、同一の動作が、時と共にできなくなつて行く有様を見ることが出来ます。

妻を見て、心乱れショックを受け、あるいは昔を思い出して泣いたりしますが、すぐ立ち直るので、暗く落ち込んだままということはありません。結婚式のとき誓約の中で、「病めるときも健やかなるときもこれを守り、その命の限りほかの者によらず、この女のみにそうことを願うか」と問われて、「はい」と大声で誓った身ですから、それを守っている訳です。

このことから分かるように、私の生涯は、「誓約」に基づいています。つまり、神からの誓約に対して、わたしも誓約する、その中に結婚生活も、痴呆体験も、高齢社会の先駆けとしての使命も、命さえもある訳です。

二〇〇〇年九月

伊規須 太郎

（注）日本赤十字社福岡県支部、特別養護老人ホーム「豊寿園」

別れの日々〇〇・九

目次

はじめに

4

第一章 在宅時代

(九六年) 一歳児保育² / (九八年) 迷子¹ / お尻拭き¹⁶ /
くせ¹⁸ / 失禁²⁰ / 乱暴²² / 入浴準備²⁴ / 就寝時間²⁶ / カユ釜²⁸ / 炊事³⁰ /
散歩³² / アイスクリーム³⁴ / くるま³⁶ / 秋風³⁸ / 追憶⁴⁰ / 電話ほか⁴² /
(九九年) 標識⁴⁴ / 投票⁴⁶ / (二〇〇〇年) 四月一九日⁴⁸

111

第二章 赤子白自身

(九七年) カラオケ練習² / (九八年) 片付け魔⁵⁴ / ADHD?⁵⁶ /
コミュニケーション⁵⁸ / 降段⁶⁰ / 片目生活⁶² / 人違い⁶⁴ / たなばた⁶⁶ /
降段⁶⁸ / 対話障害⁷⁰ / 失禁⁷² / ヒマワリ⁷⁴ / オムツ⁷⁶ / 足指⁷⁸ /
おあずけ⁸⁰ / クスリ⁸² / 後ろ姿⁸⁴ / 五秒⁸⁶ / 濡れ色⁸⁸ / 歯磨き⁹⁰ /
降段⁹² / 徘徊⁹⁴ / 夕景⁹⁶ / 降段⁹⁸ / ぱっかり食¹⁰⁰ /
はだか¹⁰² / 冷気¹⁰⁴ / 始末¹⁰⁶ / (九九年) 夕景¹⁰⁸

51

沈澱¹¹⁰ / 痴相¹¹⁶ / 死別演習¹¹⁸ / 命の座¹²⁰ /
 食事介助¹²² / レク見学¹²⁴ / 濃霧¹²⁶ / 摂食¹²⁸ /
 扉前の別れ¹³⁰ / いよいよ¹³² / 箸¹³⁴ / 新展開¹³⁶ /
 覚悟¹³⁸ / 式と祭り¹⁴⁰ / ある午後¹⁴² / 銀髪¹⁴⁴ / 降段X¹⁴⁶ /
 (二〇〇〇年) 異食¹⁴⁸ / カナリヤ¹⁵⁰ / 降段Y¹⁵² /
 降段〇六¹⁵⁴ / 覚悟②¹⁵⁶ / 近況¹⁵⁸ / 無¹⁶⁰ / 延命¹⁶²

第二章 特養風景

165

(九七年) お世話になります¹⁶⁶ / (九八年) 敵前の宴¹⁶⁸ / 執念¹⁷⁰ /
 おもと¹⁷² / 春は甘辛¹⁷⁴ / GH願望¹⁷⁶ / こはん時¹⁷⁸ /
 すずらん¹⁸⁰ / 選挙¹⁸² / けむり¹⁸⁴ / 面会力¹⁸⁶ / 便塊¹⁸⁸ /
 園風¹⁹⁰ / 忘夫¹⁹² / 寝きり¹⁹⁴ / 島の規則¹⁹⁶ / (九九年) 洗尻¹⁹⁸ /
 特別席²⁰⁰ / 通園力²⁰² / 出会い²⁰⁴ / ぶち²⁰⁶ / 入院²⁰⁸ /
 外出支援²¹⁰ / (二〇〇〇年) カラオケ²¹² / 要介護四²¹⁴ /
 茜色²¹⁶ / 痴界の恋²¹⁸ / マジックグラス²²⁰ / 夏祭り²²²

第四章 一人暮らし

229

(九七年) わかれ²³⁰ / めくもり²³² / (九八年) 片付け²³⁴ /
 裂く²³⁶ / パワー²³⁸ / ユキエ²⁴⁰ / 衰え²⁴² / カーテン²⁴⁴ /
 雷鳴²⁴⁶ / 物音²⁴⁸ / 愛情アクセル²⁵⁰ / うなぎ²⁵² / 轟音²⁵⁴ /
 死亡通知²⁵⁶ / 勝負²⁵⁸ / ゆめ²⁶⁰ / 夏カゼ? ²⁶² / 工作²⁶⁴ /

廢用性失語²⁶⁶ / おくれゼミ²⁶⁸ / うたたね²⁷⁰ / 志灰子²⁷² /
 シャッター²⁷⁴ / しぶとさ²⁷⁶ / 盈虚²⁷⁸ / ひとり口²⁸⁰ / 鏡台²⁸² /
 ワックス²⁸⁴ / 秒針²⁸⁶ / ペットロス²⁸⁸ / すもう²⁹⁰ / 麻痺?²⁹² /
 セイ²⁹⁴ / 限界²⁹⁶ / (九九年) 疲労破壊²⁹⁸ / ゆめ³⁰⁰ /
 片思い³⁰² / 慎重³⁰⁴ / 空耳³⁰⁶ / 淡夢³⁰⁸ / 復活³¹⁰ / 情報耐力³¹² /
 忽然³¹⁴ / 処分³¹⁶ / 寒暖³¹⁸ / 夢の国³²⁰ / 二二年³²² /
 名入れ³²⁴ / たくましさ³²⁶ / (二〇〇〇年) 泣き踊り³²⁸ /
 やめて!³³⁰ / 視力³³² / 片惚れ³³⁴ / 減速³³⁶ /
 いつまで? ³³⁸ / 残像³⁴⁰ / ゆめX³⁴² / 単独航海³⁴⁴ / 差し入れ³⁴⁶

第五五章 生きかた

349

(九四年) 障壁口を持ったら³⁵⁰ / (九八年) すぐそこ³⁵² /
 分かり合³⁵⁴ / 恋の歌³⁵⁶ / ヤワじやない³⁵⁸ / センサー³⁶⁰ /
 ロープ³⁶² / 航海ハンドブック³⁶⁴ / トナカイ³⁶⁶ / 見当識³⁶⁸ /
 相撲解説³⁷⁰ / 夫³⁷² / 安楽死³⁷⁴ / 知痛力³⁷⁶ / 絶筆³⁷⁸ / 水³⁸⁰ /
 偏見³⁸² / 芽³⁸⁴ / 花盛り³⁸⁶ / (九九年) どうする³⁸⁸ /
 プロ³⁹⁰ / 生存競争³⁹² / 下目³⁹⁴ / 悔い改め³⁹⁶ / メッセージ³⁹⁸ /
 オーラ⁴⁰⁰ / 圧迫⁴⁰² / 愛触⁴⁰⁴ / 連れ合い⁴⁰⁶ / 緇泣⁴⁰⁸ /
 ついの住みか⁴¹⁰ / 反省⁴¹² / 青春⁴¹⁴ / 散乱⁴¹⁶ / 悲しみボケ⁴¹⁸ /
 (二〇〇〇年) 奉仕⁴²⁰ / 振り子⁴²² / お勧め⁴²⁴ / 大婦⁴²⁶ /
 視点⁴²⁸ / 鏡⁴³⁰ / GN⁴³²

第十六章 積極発信

435

(九八年) 介護体験記 436 / アララギ 468 / 海峡 470 /

夢現 472 / 老富豪 474 / 希少価値 476 / 不用心 478 /

(九九九年) 感受力 480

第十七章 その他

483

(九八年) 猫 484 / 聖餐式 486 / 夢世界 488 / どくに? 490 /

失語症例 492 / コトバ 494 / 磁気共鳴 496 / 矛盾 498 /

ALS 500 / 名言 502 / 電気料 504 / 要領 506 / 余裕 508 / 知源 510 /

汎用 512 / 奥山放獣 514 / 幽明 516 / 通潤橋 518 / 臨終 520 / 天使 522 /

(九九九年) いいよ 524 / 悔い 526 / でたらめ 528 / いのり 530 /

安楽楽病棟 532 / ミュージック 534 / 受信力 536 / 将来 538 /

(二〇〇〇年) 恋歌 540 / 反論 542 / 親方 544 / 課税課 546 /

あとがき

548

第一章

在宅時代

一 一歳児保育

(1-6)

泣く子と地頭には勝たれぬ という
イラだつまい

やられる心配より

やられない工夫をしよう

忘れさせるには 隠すのが一番
時にはスリのように！

否定と制止が一番いけない

「そうやね」と言って いつの間にかハグラカス!

もうぐれ爺さんに「それはそれはご苦労さま」と言う嫁

でも 同じ手は使えない

そこが演技者の頭と腕

相手は プライドも感情もある元大物だ

退屈する事を知らない二歳児

おとなしく遊んでいたら最高

バックギアで前進させようとしたら 事故をおこす

(一九九六年ごろ?)

迷子

(8-224)

「田舎から来た野菜をあげるから来て」と電話

泰子は自転車ですぐに出かけた……が

なかなか帰らない

往復四十分もかからない筈なのに

二三ヶ月後(同じ家に)今度はなかなか行き着かなかった
先方の家人は 態度がおかしいと思っただが 品物を渡した
すると家に帰り着かなかった

友人は心配してタクシーでうちまで来たが

どうしようもない 搜索依頼まではしなかった

ずいぶん長い時間がたって

汗ビッシヨリになって帰って来た

「○○まで行った」と言うが とんでもない方角だ

本当かウソか分からない

数年前 小倉南区の友人宅に行けず

大笑いになった・・・・・・とあとから聞いた

・・・・・・・・・・・・・・・・知らなかった

マダラとはある時期の頭の中の状態の事もあれば

時間軸上のマダラのこともある

(一九九八年五月四日)

お尻ふき

(8-226)

ほとんど破れるまで

キュッキュツと拭きあげていた

もう少し工夫したら と思うが

そこまでは確かめられないし 言えない

トイレットペーパーもたくさんいる

温水洗淨（便器）になってからは

それが解消した

しかし 紙は使っていたようだ

いままた特養ホームでは 温水洗浄でなくなった
どうしているだろうか？

寮母さんの悩みの種は

トイレットペーパーが

すぐ無くなること………という

(注) 懐紙として巻き取る人が多いようです

(一九九八年五月四日)

く　せ

(8-228)

泰子がトイレに入っている

カラララッ　ララララッ　四拍子　二小節

トイレットロールのまわる音である

十五センチかける九　イコール一三五センチ

これが基本単位・・・・・・・・

四回引き出せば

五メートル四〇センチ！

むかしある人は

キャラメルの包み紙で

お尻を拭いたと言った！

それは極端だが

面積にしたら二四〇分の一

一生それをやったら ものすごい事だ

必要なものを惜しむ訳ではないが

クセとは恐ろしいものだ

(注) これが多いのか少ないのかは分かりません

(一九九八年五月四日)

失人 林示

(8-262)

よる散歩に出る前

オシッコ・ウンチが無いかどうか確かめる

巡回基本コースは 一周一・五キロ

二周すれば三キロ 約四十分である

オシッコがたまると 踊るように足踏みする

ウンチが迫ると 顔色が変わって

うなりながら 足ばやになる

さあ大変と 最短コースで帰宅して

危機一髪トイレに走り込んだ事もあれば

最後の二・三秒が間に合わず

漏らしてしまった事もある

途中で限界が来て 公園の植え込みに

しゃがみこんだ事もある

あとから私がスコップを持って 土を被せに行き

あくる朝 もう一度確認した

老人ホームではオムツをした人が多い

(一九九八年五月四日)

乱 暴

(8-264)

勝手口の扉はアルミサッシだから

ポンと勢いよく閉めると。パタンと大きな音がする

外で洗濯機を回しながら 何度も出入りするたびに

パタン。パタンといわせるので

「こうして静かに閉めて・・・」と言うと

「ウン」と言うが 次にはまた。パターン！

わきまえというか 慎みがなくなっていた

注意しても　すぐ忘れるらしい

時々となり近所に聞こえるような大声で
私を叱る・・・恥も外聞もなくなっていた

よく分からない理由で　がぜん怒り出す

最初はまともに反抗していたが

あとで次第に　分かって来た

これは病気だ・・・と

もっと早く　理解してやればよかった

(一九九八年五月四日)

入浴準備

(8-266)

(在宅時代のこと)

シャワーを浴びようとして

服を脱ぎ 着替えを揃えていた

衣服箱は一か所しかないのに

片手にシャツをかかえて

アレーツアレーツと 十五分もウロウロしている

しかしちよっと声を掛ければ まだ何とかなっていた

(一年以上たって) 今でも 運動機能は

ほぼ保たれているが 司令部は徐々に弱っているようだ

ある夜 パジャマの着替えを見ていると

いま着ているものを脱ぐのに だいぶ考えていた

廊下に出てから お尻まる出しで

ズボンを まえうしろに 履きかえた

ホームの入浴に立ち会った事はないが

寮母さんたちに

相当ご迷惑をおかけしているに違いない

(一九九八年五月四日)

就寝時間

(8-268)

午後一〇時五二分ドラマが終つて コマーシャルが始まる
彼女はスツと立ち上がって着替え 一一時には寝る・・・
これがお定まりのパターンだった

次第に具合が悪くなると

いつの間にか寝ている事が多くなった

ドラマの筋を追って見る事に疲れるらしい
見ても理解しにくくなったのかも知れない

そのうち もっと早く寝るようになった

何度も何度も目さまし時計をセットし直していたが
しまいにはそれも出来なくなった

(それから一年以上たって) 今ホームでは

テレビを見る事はほとんどない

物語を追うことが出来ないからだ

夕食が片付いて間もなく

六時過ぎに もう寝ていることもある

痴呆者に 寝過ぎはないようだ

じっとしていても 退屈する事がないように

(一九九八年五月四日)

カユ釜

(8-270)

カユ炊き専用釜に 焼き付き防止被膜が付いている
「この中で米を研がないように」と書いてある

私は 毎晩それを注意しつづけた

泰子は毎晩おどろき続けた

「エッ そんな事？ 知らなかった！」と

いつも付き添っている訳ではないので

私が見ていない時は 釜の中でザクザク研いでいた

とうとうコゲ付くようになって 釜を買い替えた

しかし また同じこと………

介護費用とは 病院代やクスリ代ばかりではないと
しみじみ思った

同じ事を繰り返そうとするのは

それが一番安心するだからだ

一々叱っても意味がない 前の事は忘れているから
別の方法を考えられなければ あきらめるしかない

(一九九八年五月四日)

炊 事

(8-272)

まともな炊事が出来たのは、いつごろまでだったろうか？

次第に献立が固定して行ったように思う

出来合いの品物が多くなった

彼女の嗜好に偏って行った

買い物が怪しくなった、重複が多くなった

話し合いが無意味になった、忘れるからだ

まとめ買いする必要もないのに

ドカンと五千円以上買って来る事もあった

新しく出来たお寿司やさんは、近いのに行けなかった

お金の計算ができなくなった 使った筈なのに

お金が増えていた事もあった！

小銭が一杯になった 計算ができず札ばかり出すからだ
買物に出られるのが一番困った

どうして支払いしているのか不思議だった

同じ事を繰り返すようになり

変化には 激しく抵抗した

責任感だけはあった

徐々にいろいろな変化が起こっていたと思うが

そのときは痴呆と置いていなかったから

思い出す事がむづかしい

(一九九八年五月四日)

散 歩

(8-274)

散歩は好きだった

夏場は明るいので「もう少し待って……」

と言う事が しばしばあった

出がけに何度も戸締まりを確かめた

いま行ったのにすぐまた見に行った

お祈りして 鍵をかけて

車庫のフェンスをしめて

サッサッサと歩き出す

泰子の治療（介護）のために必要と考えて

事情の許すかぎり回数を増やした

途中に数箇所 きまってネコがいる場所があった

そこでしばらく遊んだ

しかしすぐ飽きるらしく 私がネコと長話していると

「はよ行こう」と催促された

月を見ると「ホラ」と指さす

月齢の話をしたり星座の話をしたりした

私が考え事をしている時は 無視する事もあったが

あくまで彼女の対応を第一にすべきだった

(一九九八年五月四日)

アイスクリーム

(8-276)

彼女はアイスクリームが好きだった
食べるのが早かった

同じものを一緒に食べ始めても

彼女はずっと早く食べ終った

私は急ぐと ミケンがシーンと痛くなるので
休み休み食べなければならぬ

昔は カロリーのことなんか考えなかった

口においしければ それでよかった

しかし食物の勉強をしてみると

どうかしたものは 砂糖と同じ

二〇グラムで 八〇キロカロリーある

いまはカロリー枠が勿体ないので

食べる気がしない

ホームでは時にクリームが出るようだ

(一九九八年五月四日)

くるま

(8-278)

一九七〇年に 死亡事故を起こすまで
四台乗りかえた

彼女も免許を持っていたが
少し病気が進んだころ 自分から更新をしなくなった
これは正解だった おりに適っていた

泰子が蒲生病院に入院して 長期戦を覚悟した
長期療養棟が増築される筈だった

散髪その他で外出するために

助手席を改造した特殊車両を注文した

私は二七年ぶりに (運転の) 現役復帰した

ペーパードライバー補習講座に 数時間かよった

何十年も前にかよった K自動車学校だった

しかし車が出来上がる直前 彼女は豊寿園に入り

外出は必要なくなつて この座席に座る事はなかった

今は 女性の会の大きな弁当籠?が座っている

(注) 高齢社会をよくする北九州女性の会でお弁当配達中

(一九九八年五月五日)

秋 風

(15-576)

ほんの数日前までの暑さがウソのように

秋風が立ちはじめた

すると考える事が二つある

一つは 季節の移り変わりである

黄道が天球の赤道から二三度二七分傾いて

四季が生ずる・・・というような事ではない

聖書の真実と憐れみである 創世記ノアの大洪水のあと

約束された四季のうつろい・・・虹の誓い！

もう一つは 在宅時代の泰子の思い出である
彼女は少しの変化にも対応できなくなっていた

夏のあいだ 窓を少しすかして寝ていた

涼しくなっても 寒くなっても

同じように続けるから 窓ぎわの私はたまらない

泰子とコンくらべとなった

同じ事を繰り返していると安心するらしい

変化を要求すると 激しく抵抗した

(一九九八年九月二八日)

追　　憶

(20-826)

広くはないが新しい家だった

泰子は窓から顔を出して

「これがわが家か！」と目を輝かして見回していた
つい昨日のようで　もう四十年前になる

振り返ると　彼女との対話・ふれあいには

大いに悔いが残った・・・・・・・・それが

結局　彼女を追い込み　逃避させたのかも知れない
私はある線までは当然だと思っていた・・・・しかし

その下から 二人で作り上げなければならなかったのだ

人間は孤独を予測すると 感じない状態に逃避すると言う

それが つまり「痴呆」ではないか

意識して 逃げられる訳ではないが

登校拒否する子供は 本当にお腹が痛くなるし

嫌いな先生(学科)の黒板は 本当に見えなくなる

個体としての適応も 種としての適応もあるらしい

プラスの適応もあれば マイナスの適応もある

人間(生物)とは本当に弱いものだと思う

(一九九八年一月三〇日)

在宅で泰子と共に生活していたとき

彼女が電話を取ってトラブルが起こるのには閉口した

彼女の所でベルが鳴らないようにしようか？ とか

常に留守番受信して あとから私が聞こうとか試みたが

.....彼女が聞いてしまう事もあった

現在の回線を廃止して 新しく引こうかとも考えた

ついに 私個人あてのチャンネルを作ろうと

パソコン通信のできるPHSを導入した

しかし間もなく泰子が緊急入院して

電話取次の問題は無くなった………そのほか

玄関の録音システムを考案したが 暫くでやめになった

買い物に出られると大変困ったが それも暫くだった

回転シートを特装した車を準備したが 出来上がった頃には

豊寿園に入ったため 要らなくなった

介護にお手上げになりそうな方に お勧めしたいのです

痴呆の進行はやむを得ませんが 症状や行動は変化します

もう暫くの辛抱です諦めないで下さい 逃れる道があります

これは私の体験から 確信をもって言えます！

(一九九八年二月七日)

標 識

(37-1522)

一人になってから食卓に使っているキャスター付きの机には
ちよっとした物入れが付いている そのトビラに

「箸」と大書した紙が貼ってある 下には「お茶」とある
あれからもう二年以上もたってしまった 泰子が物の

置き場所を忘れるので あちこちに紙を貼ったものである

私が「絵を描きましょうか」と言う

N先生は「漢字がいいですよ・・・表意文字ですから」

「絵は 意味が分らずに戸惑いますよ」と教えて下さった

だから トイレには大きく「便所」とだけ書いた

当時は教会の行事（集会）が毎週十回以上もあったので
卓上掲示板のようなものを作って

「きょうは○曜日 何時から○○会 場所は○○室
机の向きは○○方向 歌は何々集………」と掲げ
ハグル時には声を出して復唱させるようにした

シャワーの時は下着を探して二十分ぐらいウロウロした
小さく薄い物はよく見失った こちらも知恵ができたが
再発行して貰ったものも少くない

（一九九九年六月五日）

扱投 西宗

(50-2086)

一九九六年に一度国政選挙があったのは確かである
蒲生病院のN医師と 泰子の投票行動について
話し合った事があった と記録されている

それから四年 最近になって婦人会の役員と話していると
「九六年の選挙の際 受付をしていたが 奥さん(泰子)は
自分の名前を言えなかった(生年月日は勿論言えない)
しかし顔見知りなのでそのまま通しました
これはおかしいと思いました 間もなく入院を知りました

その前と前の選挙でも おかしいと感じていました」
と言われた 初耳だった すると九三・四年ごろには
すでに痴呆がそうとう進んでいた訳である

初診の時に「恐らく五・六年前から始まっていたでしょう」
と言われたのは当たっていた するともう一〇年になる！

痴呆の始まりを そのとき気付くのはそうとう難しい
数年遡って思い当たるのではないだろうか？ だから

自分の家族については もはやあとの祭りだが
他人の状態はよく見える 市場のあの奥さんは怪しいと
この目を社会資源として大いに活用してほしい

(二〇〇〇年三月六日)

四月一九日

(51-2124)

ラジオが「四月一九日」と言ったのでピクツとした

日蘭交流四百年 リーフデ号が臼杵に漂着した日らしい

一六〇〇年といえば慶長五年関ヶ原の戦いの数か月前である

しかしこの日は私にとっても忘れられない日となった

一九九七年四月一九日に 泰子は蒲生病院老人性痴呆疾患

センターに緊急入院した ちょうど三年前のことであった

一週間ばかり私が寝たり起きたりして食べられなくなった

かねて「緊急の時は連絡して下さい一床は空けておきます」と言われていたので 早速お願いして昼ごろ家を出た

「病院に行こう」「エッ」それだけだった 理由も行く先も分かって貰えなかった 何一つ準備はしなかった

普段着ふだん履きで 手に手を取って玄関を出たきり

彼女は再び帰らぬ身となった 私が病院を出ようとした時彼女は必死で私にしがみついた かわいそうだが私も必死 それをやっとの思いで振り切って帰った私は

閉店まぎわの衣料品店に駆け込み 婦人ものの衣料を二万円ほど買って差し入れの準備をした

(二〇〇〇年四月一七日)

第二章

泰子自身

について

カラオケ練習②

(1-20)

寮母さんが心を鬼にして マイクを押し付けている
家内はやっとマイクを握った

画面に歌詞が流れて 字の色が違って行く
私は彼女のくちびるを見つめる
息を殺し マバタキもしないで

パクパクやっているが 八割はウソだった
あとはムニャムニャ???

まったく字が読めないらしい

彼女は言葉を失うと共に 字も失った

言語野の（脳）梗塞か 海馬傍回のトラブルか

でも 寮母さん有り難うございます

おかげさまで マイクを持つまでになりました

Oさん あなたは看護婦さんなのに

寮母さんをしてくれるんですね

いろんな意味のリハビリの時でもあり

貴重な観察の時でもある

（一九九八年一月）

片付け魔

(3-100)

花祭りの演芸会が終って
舞台だけが残っている

泰子はどうも落ち着かない
ソワソワと立って舞台に近付き
幔幕のハシを引っ張ったり
パイプ鉄骨の継ぎ目を揺すったり

とうとう継ぎ目の一つが外れてカタンと落ちてしまった

コリヤイカンと思ったのか 一旦離れてウロウロ
しかしまた近付いては引っ張ったり揺すったり

通り掛りの係長が「片付けに来ますから」と言う

私もやめさせるのに一生懸命

そのうちに本職が来て壊し始めた

これで泰子も安心したらしい

トイレ入り口のものれんは ちよっと引っ張る

テーブル回りの椅子は ちよっと押し込む

ゴミを見れば ちよっと指で拭きとる

(一九九八年三月二六日)

A D H D ?

(5-154)

お花見のバスハイクが終わって

入所者がぞくぞくと帰ってくる

落ち着かない泰子と手をつないで

満員のエレベーターの一番奥に乗った

二階について 扉がゆっくり開く

ソワソワしている泰子は

前の男の人の腰をポンと押した

「何を！」と向き直ったその人は

「このーオボエテイロ！」（パチッ！自分の掌をたたく）

「ムニヤムニヤムニヤ・・・」（パチッ！）

泰子は薄笑いを浮かべて無言

体はたえず落ち着かず動いている

自分で自分の心をコントロールできないようだ

逆行二歳児のADHD（注）？

（注）子どもに見られる多動症候群／神経障害

（一九九八年四月二一日）

コミュニケーション

(7-218)

失語症の家内と どうしてコミュニケーションをとるか
彼女はブローカー失語症だから 発語ができない

話し言葉は ある程度のもものが しばらくは頭に入っている
ようだが 話せないから確かめようがない

書くこともおぼつかない 手が動かないのではなく
脳(のコトバの元)が壊れているから 出てこないのだ

読む事もできない 文字パターンを認識できないからだ

それなら 絵文字はどうだろう

「ニコニコ顔」を見せれば

ニコツと笑って 小声でアツと言う

雰囲気はわかるらしい

しかし 表音的な使い方はダメだ！

音を綴り合わせて 言葉を造る機能が失われているからだ
では手話はどうかだろうか？ 殆どイメージで作られている
指文字というのがあるが これはダメだ

(一九九八年四月二三日)

降 段

(9-292)

痴呆のレベルが一段さがった
食事の準備に加わっているが
ほとんど指示を理解できない

これを注いで下さい と土瓶と湯のみを渡されても
カラの湯のみを二三コ配ったかと思うと
スッと逃げ行ってウロウロ・・・

「ここで全部の湯のみに注いでから配って・・・」

と言われても モジモジするばかり

ああ これはだいぶ悪くなつたな と思つていると
はたして 係長からお話があつた

もとより覚悟をして長い別れをしているつもりだったが
マザマザと見せつけられれば グツと来る

でも グループホームだからこそ見えやすかつた

ケアは全く個人ごと・・・何と大変な仕事だろう

たくさんのケアマネジャーが出来ようとしている

みなさん よろしくよろしく願ひしますよ

(一九九八年五月二三日)

片目生活

(10-332)

白内障手術の前　泰子はほとんど片目だった
しかし視力の衰えが　緩やかだったから
慣れて　ほとんど生活に支障はなかった
そんな目で　奏楽もなんとかこなしていた
間違いがだいぶ目だっではいたが……

手術によって　白濁した水晶体を取り除き
人工レンズを入れてもらった

度数が無段階に変化する特殊なメガネを作って

視力は驚くほど向上した……約二年前のことだった

最近ときどきメガネを掛けていないことがある

置き場所を忘れたのか？ 掛けるのが煩わしいのか？

それとも不自由の感覚が鈍れてきたのか？

せっかく手術をしたのに

また片目生活に帰ろうとしている？！

しかし 左右の視力が不均衡でも

それなりのバランスをとって生活が出来る……

創造のすばらしさ！

(一九九八年六月一三日)

人ちがい

(10-336)

女性は 仲のよい人どうしが集まるが
男性は孤高？の人が多いようだ

ホームに面会に来る家族どうしも 顔見知りになり
○○さんの家族はあの方だ と分かるようになる
私も 相手から見られている訳である

ある時 一階の寮母さんに会った

「あっ たしか○下さんのご家族でしたね」と言われた

○下さんは 泰子のペアの人である

介護係長は「ヤッパリ」・・・と笑われた

泰子はテレているのか 私にあまり近づく風はない

一方 ○下さんは 私を待っていて

喜んで 私にベッタリで 話し込む

時には 一緒に歌を歌う・・・・・・・・

同室（グループホーム）の人の中にも

「あなたはこの人の旦那さんでしょ」と言う人がある

あの寮母さんは 私たちの姿をどこ見たんだろうか？

（一九九八年六月一三日）

たなばた

(11-376)

七月六日 午前に面会に行くと

たなばた飾りを作っていた

いちご会のボランティアさんが指導をしている

寮母さんは別の所で 歌の譜面を並べて

何か計画をされていた

「願いごとを書いてね」と言われても

サッサと書く人はいない……

なんとか短冊を付け終わって

「さあ名前を書きましようね」と言う

ほとんどの人が 考え考え書きはじめた

泰子を見ていると モジモジしては立ち上がった

ウロウロしたり またペンを取ったりしていたが

何か書きはじめた アツ ニンベンだ

伊規須かなと思っていると

性 と書いて

アハハと笑いながら 逃げて行った

また座ってだいぶ考え また  と書いたが

ふたたびペンを取らなかった

(一九九八年七月一〇日)

降 凡 ②

(12-422)

家内は失語症で 数語しかコトバを発しないが
ヒトの言うことは ほぼ理解していると思われる
しかし 確かめる方法がない

ある夫人は夫に向かって

「あなたはどなたですか」と言ったそうだが

泰子は そう質問することもできない

いま果たして 私を夫と認識しているかどうか？

部屋に入るとき 物カゲからうかがっていると

誰に対してもアイソがよい

ものを言えないぶん 表情でニツとする

そして 手を伸ばして何かを指さす？

私の顔を見ると オツというような表情で

ニツとするが 他の人にするのとあまり変らない？

以前 大きなバッグをワザと離れた所へ置いたら

彼女が 近い所に持ってくる事があった

しかし この頃は知らん顔をしている???

(一九九八年七月二七日)

対話障害

(12-452)

ある人は「物言わぬは腹ふくるるわざ」と言った
一人ぐらしの最大の問題は 対話の減少ではないか

愛情接触は 脳の健全成長に欠かせないというが
言語による愛情対話は

成長期ばかりでなく 老年期においても
精神生活に欠かせないと思う

失語症の泰子の場合

違った形の無話世界に入っている

周囲の環境は変らなくても

みずからの脳が

対話能力を失って（対話を拒否して？）しまった

最近 顕著になった行動障害（失禁など）は

対話障害と深く結び付いているように思えてならない

米国の某書（注）の説によるなら

孤独を回避しようと 逃れた先に

また孤独が待ち構えていた ということか？

（注）“Love and Survival”

（一九九八年七月三一日）

失火 林示

(13-460)

オシッコやウンチをするときに
考える人はないと思うでしょう

しかし①一杯になったと感

②排泄しようとする

③括約筋をゆるめる

④腹圧をかける

これだけの事をしているのです

ところが痴呆の人はまず

- ①の感覚が鈍くなります 感じた時は間に合いません
②今してよいのか いけないのか
場所はここでよいのかどうか・・・判断ができません
③④は何十年もやってきたこと・・・と思いますが
要領があります それを忘れているのです

だからオシッコもウンチも

自然にオーバーフローすることになります

オシメの中が濡れても 異物がモコモコしていても
ほとんど感じなくなります それが痴呆の失禁です

(一九九八年八月三日)

ヒマワリ

(13-472)

八月二日 午後四時前に園に着くと

泰子が目の覚めるようなヒマワリを着ている！

一瞬 間違いではないかと思った

たまに他人の服を着ている例があるからである

しかしすぐ思い出した……

あれはそろそろ暖かくなる頃だった

どこかへ外出する機会があるらしく

「今からの季節に気軽く着られるものはありませんか」

と尋ねられた

「在宅末期にどんどん肥満して いま家にあるものはほとんど着られませんか」とお答えした

「じゃ何か見繕って買っておきましようか」

「お願いします」……そのまま忘れていた

すぐN寮母さんにお礼を言った

「伊規須さんは色が白いから……」と言った

これだけかと思っていたら セーラーブラウス？もあった
柄はやはりヒマワリだが 生地はサラリとしている
もう一つ……特殊パンツも買ってもらった

(一九九八年八月一八日)

オムツ

(13-476)

三年前 泰子は八日間入院して白内障の手術を受けた
手術当夜はオムツをした 私はベッドの下で寝た

彼女は翌朝までガマンして 一度も排尿しなかった
入院前 練習を勧めたが 絶対しなかった

その泰子が いま 排泄をコントロールできない
尿・便意の感度がどれくらいか分からないが
便器に座っても 出しかたが分からないし

(便所外で) アツと思つても 止めかたが分からない

オムツが湿つても 重くなつても

ほとんど感じないようである

人間は二度オムツをする

生まれてしばらくと 死ぬまでしばらくである

赤子について 人間の尊厳が失われたとは言わない

老人も 自分の責任でそうなのではない

尊厳には別の物さしがあつてもよいのではないだろうか？

(一九九八年八月二〇日)

足 指

(14-524)

日曜日の夕方 ホームに着くと 受付けで

「いま前庭に出ています」と告げられた

一階グループホーム前の芝生は もう日がかげっていて

涼風の通る場所に 敷物が敷かれていた

ある人は談笑し ある人は民謡を歌っている

泰子は話の輪に加われないので 孤立して抜け出す

寮母さんが私のことを気にして

室内から泰子を連れ出して下さった サアと言われて
敷物のハシに座ったが つまらなそうにしていた

と一瞬 目が輝いた！ 前に座っている人の足の指が
歌を歌うたびに クネクネと動いている！

例の調子で指差して アッハハアッハハと笑いころげる

二・三十秒するとまた アッハハハ ケツケツケケケ

二・三十秒ごとに 新しく発見して喜んでいる

幼児がガラガラを見て キャツキャツと喜ぶのと同じだ
また振ると またキャツキャツ 最も幸いなひとときだ

(一九九八年九月一三日)

おあずけ

(14-534)

夕食準備のころホームに着くと 心掛けることがある

一つは 泰子の仕事ぶりを観察すること

もう一つは 食事のおあずけを守らせることである

ある日 見ていると「これをこのお皿につき分けて」と

現物を指しながら ご指示をいただいた

泰子はやりにくそうに 幾つかついでいたが

アッと思う間もなく パクリと食べてしまった

寮母さんは黙って泰子の手から箸を取り

残りを分ける・・・シマッタという顔もしていない

寮母さんが「頂きましょう」と声を掛けて食事が始まるが

泰子は「おあずけ」ができない　すぐ忘れるからだ

向かいの九〇歳から「マダマダッ！」と叱られても

二〇秒ともてない　すぐ手を出して食べ始める

横にしゃがんだ私はいっときも油断ができない

食事が始まると　すぐ離れる

私がいると気が散ったり　話かけられたりするからだ

最近ことにレベルが下がったように思われる

(一九九八年九月一五日)

ク ス リ

(14-548)

食事のたびに多くの入所者がクスリをもらう

小箱に整理されたクスリが 看護婦さんによって配られる
もちろん個人ごとに異なるものである

開園当初は 一人一人ゴクンと嚙下するのを
確認していたから大変だった

泰子は白い錠剤を一つもらう

軽いウツのクスリかも知れない

九月一六日の夕食には 私が付き添っていた

紙袋を切って 「ハイ ヤッコ」とクスリを掌にのせ

「ゴクンしてお茶を飲みなさい」とコップを差し出す

しかし泰子はガリガリとクスリを噛み始めた

「ホラお茶」と言う と 逆に御飯を頬張ってグチャグチャ

シブーイ顔をしていたが ゴクンと飲み込んでしまった

摂食行動の要領は最優位に置かれている筈である

クスリは食事のものではないが

どうも このあたりも怪しくなってきた

排泄行動の要領が分からなくなったのも当然かも知れない

(一九九八年九月一六日)

後ろ 次女

(14-552)

泰子はもともと撫で肩だった・・・それが

最近はいよいよ丸くなったように感じる

上体は 腰から少し前屈みになり

肩のあたりは ネコ背である

後ろから見ると肩が丸く 横から見ると背中が丸い

まるでオマンジュウ（の上半分）を見るようだ

入所者の中には 自分の意思で

ダイエットしている人もあるが

泰子は在宅末期　すでに適量という感覚がなくなって
肥満しはじめたのだった

ずいぶん前　何かの手違いで

彼女の給食の一部が　欠けたとき

ひどく怒りだして　大変だったことがあった

いま　当時ほど認識できているかどうか疑わしいが

ゴハンの量を減らすことは　難しいのではないか？

オムツの位置と濡れぐあいにも気をつける　失礼！

ごく僅かビッコを引いている　水虫？履物？それとも？

(一九九八年九月一八日)

五 秒

(16-626)

十月に入ったのに その日はまだ暑かった
夕食のお茶は冷茶だった

泰子はユノミにお茶をついで配る役だった

給茶機の下にユノミを置いて レバーを押さえる

一杯になったユノミを横にのけて

次のユノミを置く・・・その間 約五秒

もうレバーの押し方を忘れ どうしてよいか分からない

ずっと付き添って介助されている係長が

「ハイここを押さえて」と手を持って行ってやると

押すが……次はもう忘れている

何回 注意・指導を受けただろうか？

やっと十杯つき終わった

お盆に載せて食卓まで運ぶ……これも難しい

一度に二つ以上の指示をしても理解できない

次々ユノミを置くのも スムーズには行かない

放置しておくとな・二・三コ置いてどこかへ行ってしまう

たえず目配りと指導が要る……大変である

(一九九八年一〇月二日)

濡れ色

(17-686)

辞書をひくと 水に濡れたような色……

「濡れ色に咲くやまぶきの花」などと書いてある

「お漏らし」と「失禁」は違うと言われる

前者は「間に合わなかった」「しまった」と少し漏らす

後者は 感覚が無くコントロールも出来ないから

気持ちよくなるまでシャーとやってしまう

泰子は残念ながら後者である

何度も現場を見たが

服地によって水のしみ易いものとそうでないものがある

ある入浴日の午後 後ろ姿を見てアッと驚いた

ズボンの裾まで ジッポリと濡れている

最も目立ちやすい生地だった

寮母さんに告げると アッという顔をした

フロから上がってすぐだったからである

またある日は 椅子から立ったあとが濡れていた

「アッ今日は三度目」と言った

それは非難ではなく 私に知らせてくれる言葉だった

(一九九八年一〇月一三日)

歯 みがき

(17-698)

歯ブラシの柄には各自の名前が書いてある

寮母さんは それぞれにクリームを付けておく

「さあ歯磨きしてください！」と言っただけで

順調にすむ人は少ない 一人一人観察しながら繰り返す

「すみましたか」「ハイ」と返事が来ても

信用はできない クリームの残っている人はまだである

ある日の夕食後 泰子は係長と一緒に歯磨きをしていた

ゴシゴシやっているが 下歯の噛み合わせ(上)一面ばかり

せめて上歯の前(面) とも思うが ひとりでは出来ない
介護者が歯ブラシを取って 上歯をコサグと
少し出血した・・・ハハー痛いからしなかったのかな？
それまで すんだような顔(や返事) にだまされて
長いこと不十分だった 口臭に気付いて歯槽膿漏を疑い
歯科に連れて行こうとしたこともあった

ハイ グチュグチュ ペツして・・・と言うが
ジーツと考えているうちに・・・飲み込んでしまった！
ある時はホッペタをふくらませたまま ウロウロした
クリームはなるべく少し付けるようにしていますと言われた

(一九九八年一〇月一六日)

降 段 ④

(17-702)

泰子は夕食後テレビの前に座っているが 落ち着かない
しきりに手をこすり合わせている 濡れているようだ？
手を匂うと ウーム煮魚をつかんだような匂い？？
ハテ何だろう？？？・・・考えても分からない

立ち上がったあとを見ると 坐面が少し濡れている
アッとお尻を見ると三角形のシミ・・・下には流れていない
トイレ徘徊しているので ついて行くと便器を指差す
蓋をあけて見ると 下痢便が少しあった

寮母さんがオムツを見ると 下痢便を漏らしていた
すっかり拭き上げて パジャマに着替えさせて下さった
緩下剤は半量にしましょうと言われた

(推測) 便秘になると大変だから緩下剤を飲ませる↓利き過
ぎて軟便となる↓漏らしたのに気付かない間に皮膚炎を起こ
す↓座って少し排泄した↓パンツを履いたが気持ちが悪いの
で手を入れた↓手の洗い方が分からずコスリ合わせていた？

横になりかけていたので 毛布を掛けようとする
片足は (室内) 靴をはいたままだった

(一九九八年一〇月二〇日)

徘徊

(17-704)

徘徊といっても いろいろあるようだ

(施設内の) 日常生活空間であれば それほど問題はない
回り廊下であるから 無限に歩くことができるし

どこにいても ガラス越しに大体見ることができる
問題は非日常の場合である たとえば(園の)前庭・・・
高い塀で囲まれた中ではあるが 手に負えなくなる

先日 ソーメン流しがあった 職員たちが忙しくして
ちよっと目を離れたスキに どこかへ行ってしまった

慌てて探し回ると 高塚の行き止まりまで行っていた
連れ戻したが 職員が付き切りという訳には行かない
アツという間に またいなくなってしまう

また探して連れ戻す 結局職員一人を独占したらしい
彼女は 体は元気だから足は早い 少し前屈みになって
キョロキョロしながら トトトトトと行ってしまふ
グループに馴染めないということもあるのではないか？

十一月十八日は (バスで) 園外に出る行事があるらしい
「付き添いできますか?」「いえ」「それじゃ留守番して貰
わないといけないかも知れませんか」と言われた当然である

(一九九八年一〇月二〇日)

夕

早京

(21-842)

夕食が終ったころ園に着いた 散歩をしている人もいるが
泰子はいない 最近はいつも一人でいる 友人はできない？

部屋に行くともう横になっていた 昼間の衣服のままだ

しかし姿勢がおかしい？・・・そばによって見ると

枕をしていない！ 頭の横には賛美歌と造花の小鉢

反対側には人形が置いてあるが もはやそれらに関心はない

薄笑いを浮かべながら 苦しそうに首を曲げている

涙を堪えながら「枕はどうしたのかな？」と独り言

泰子は小声で呻くように「ドースル」と言う……これは日本語ではない 彼女の「生きている」という答えである
脳中のコトバの元はすでに崩壊している

寮母さんに聞くと 枕を集める人がいるとのこと

容疑者の部屋に行つて「マクラ余つてませんか」と言つと

「ハイ」と出してくれる 着替えさせて貰つて一安心

フトンを掛けとうとすると 片足は靴をはいている

まだ午後六時二〇分！ 就寝前のお祈りをして帰途につく

今夜 何回オムツを替えて貰うのだろうか？

申し訳ありません よろしくお願いいたします

(一九九八年二月六日)

降 段 ⑤

(22-906)

夕食が終わるころ園に着いたが もう寝ていた

(寮母さんによる) 着替えはまだなので ジャッチのまま
フトンをかぶっている 片足は靴をはいていた

替美を歌っていると スーッととびらが開いて

寮母さんに手を引かれたFさんとNさんが入ってきた

一人は車椅子で 小さな体から大きな声を出してワメク

寮母さんはものも言わずに テキパキと着替えさせる

泰子はジャッチの上から パジャマをはこうとゴソゴソ
私が「それを脱いでからこれをはきなさい」と言っても
全く分らない 少し強く言うと「ウォーッ」と叫びそう！

寮母さんが手真似をして ジャッチを引っ張ると

ようやく脱ぎはじめた 下半身ハダカになったところで
パッと走り寄って うしろから手早くオムツを差し込む
ようやく寝られる恰好が出来たと思ったら

フラフラと出て行って徘徊を始めた！

「大変ですね 何人受け持っておられるんですか？」

「決まっています 出来る限りです」「ワーッ！」

(一九九八年二月二七日)

ばっ かり食 (降段⑥)

(22-916)

夕食のお膳の上には

※ゴハン ※すりみのカニあんかけ

※じゃがいもとお肉の煮物 ※みそ汁

※お茶・・・がのっていた

まずゴハンを引き寄せて 食べ始める五箸六箸七箸・・・

アレッ ゴハンばかり?!

「これもおいしいよ」と指差すが 「ん」と言いながら

モグモグ 他の物に全く手を付けずにゴハンを食べ終った

次はじゃがいもばかり 味が濃いのではと思うが

平気な顔　それを食べ尽くしてお皿を片寄せると

次はあんかけ・・・最後に器を傾けてアンを掻き込む

「アツなめるかな?」・・・しかしそれはしなかった

次は味噌汁　最後にお茶を持ってクークーと飲み干す

「ご馳走さま　あそこへ持って行くんでしょ」と指差すと

ニコツと笑ったが　ちょっと膳を指差しながら立ち上がり

ウロウロと逃げて行って徘徊　歯磨きは全く忘れている

S 寮母さん「お食事は楽しくないと・・・気をつけます」

私「結局全部からだに入っていますからご心配なく・・・」

(一九九八年二月二五日)

は だ か

(23-946)

「私は裸で母の胎を出た　また裸でかしこに帰ろう」・・・
旧約聖書に登場する預言者のコトバである

・・・泰子はいま裸で帰ろうとしている

ベッドの横にはかなり大きな物入れ（棚？箱？）がある

先頃までは　僅かだが着替えや私物がそこに置いてあった
しかし　今はキレイさっぱり　何も置いてない

全く管理ができず　戸惑いや異常行動のもとになるからだ

味わう事もできないまま食物を口に入れ (注)

着せられ 脱がされ 拭かれ 洗われ……

戸惑いのうちに徘徊しては ベッドに上がり降りするのみ!

しかも終日無言 ひとのコトバもなかなか理解できない!

枕元の人形にも 賛美歌にもまったく無関心

「赤裸」では言葉が足りない 何色の裸と言えようか?

過去も現在も未来も 有形無形の持ち物も

人間関係も 夫も 一切を失ったこのハダカの凄まじさ!

しかし遠からず状況は変わるだろう 主の憐れみを祈る

(注) 九一六「ばかり食」をご参照ください

(一九九八年二月三〇日)

今年も 正月休みのあいだ外泊はしなかった

帰宅しても会う家族がいる訳ではない

家はすっかり改造されて 彼女は戸惑うばかりだろう

だいたい 彼女の頭から自宅も家族もスッカリ消えている

そのかわり「こちらから面会に行こう」と毎日通った

急に寒くなった大晦日 八幡での用事が長引いて

園に着いたのは(午後) 七時だった 泰子の姿は無かった

大食堂ではテーブルを寄せて 紅白の観覧席が作られていた

泰子は正月が来る事を知らない 紅白も知らない

暗い寝室に入ると フトンをかぶって天井を見ていた
チラッとこちらを見るが 反応は無い コトバも無い

アレッ今日はピンクの靴が二つキレイに揃っている

珍しいこと靴を脱いだんだろうか？ と足を探ってみると
両足とも白い靴を履いていた！

「最近は昼間も寝ておられる事が多いです 進行が早いと
思います ハダシ（靴下）で歩いていることがあります」
と寮母さん ある時は片方だけ靴を履いてピタパタと歩く
ホームの室内は温かいが 私の心には冷気が吹き込む

（一九九八年二月三一日）

始末 ②

(23-956)

一九九八年大晦日の夜 事情があつて遅くなった

外はかなり冷え込んでいるが ホームの中は温かい

早く寝ている泰子は 私の顔を不思議そうに見上げる

小声で賛美を歌い 「主の祈り」をした

なじみの [What a friend] と [Jesus loves me] である

泰子の口はほとんど動かない 言語野が壊れているからだ

アッどうもおかしい 上半身を少し起こしたら

シーツの胸(乳)のあたりに 直径五・六センチのシミ?

お尻よりずいぶん高い位置？　しかし身をくねらせたら？
色もウンチより濃く　むしろ赤褐色に近い……
しかし食物の色で変る事もある……ヒヨットしたら？
触って見るが　あまり濡れていない　匂いも強くない
が……ずーっと下まで広がっている　やっぱりそうだ！

寮母さんは「まずカラダの始末をしましょう」とテキパキ
何となくキマリ悪そうに　ニコニコしながら股を広げる
フトン・シート・防水布からマットまで交換して頂いた
看護婦さんは「少しクスリを考えて見ましょう」と言われた
当直職員の方々には大変な年越し！　ご苦労さまです

(一九九八年一月三十一日)

夕景 ②

(24-994)

ちようど夕食が来るころだった「座っているな」と一安心
・・・・・・・・が靴をはいていない！ 寝室に取りに走る

食事が来るとすぐ食べ始める お祈りの素振りもない
オカズに手を付けずに ご飯だけを食べ尽くす

隣の皿に気付かないから これオイシイよと皿を寄せると

「納豆オムレツにトマトとブロッコリー」に手を付ける

ご飯はもう無いからそればかり 味なんか感じない？

終るとお膳を下げようとする あと二皿残っているのに！

お皿を並べ替えて押し付けると また食べ始める

酔のもの味噌汁もやっとすんだ　とにかく全部入った
お茶は飲まない　終始無言　呼び掛けてもンというだけ

片付けなさいと言っても分からない

クリームを付けた歯ブラシを貰っても

下歯の上面だけチョコチョコ　ゆすいだ水は飲みこむ

グチュグチュペツしなさいと強く言ううと頬を膨らませたまま

グルグル徘徊して・・・アツと思う間もなく

大きな窓枠（レール）にペーッと吐き出してしまった

私が出来ない日は　大迷惑をおかけしていることだろう

緩下剤を一つ貰っていた　今晚は大丈夫かな？

（一九九九年一月一三日）

沈 澱

(25-1038)

はじめのうち「痴呆者はハッピーだ」と思っていた

「世の煩いから解放されて何も心配することはない」

「介護者も優しさを与えられる これこそ神様の賜物だ」と

そう簡単には言えなかった 泰子の表情には「憂い」がある

ものの言えないぶんニコツとするが 目は沈んでいる

人の心の奥をのぞきこむような鋭さがある

新しい記憶はできない・・・というより認識ができない

認識しないものが (脳の) 中に入ることはない
入っていないものが出てくることはない

したがって 痴呆者の記憶は全体が欠落する

ふつうの物忘れは 入ってはいるがキツカケがなくて
出てこないというもの だから部分的欠落である

薄暮の底で トマドイの渦がいくつも巻いている

見えてはいるがボンヤリしている 聞こえてはいるが遠い

考えようと思うが頭が働かない どうしてよいか分からない

足が痺れたとき くすぐりたい感じで力が入らない

あんなようなものだ

下半身が濡れて重いが 何が起こったのか分からない

いま目の前にいる人（夫）は誰だろう？ 敵ではないらしい？

よく見る顔のようだが はっきり分からない

夫とか妻とかいう言葉も どこかに行ってしまった

（結婚生活???）一切は過ぎ去ってしまった

ここはどこだろう？こっちに行ったらどこへ行くんだらう？

いまは明るいのか暗いのか？時間ってなんだったっけ？

朝とか昼とか そんな言葉も忘れてしまった

空腹という感じもあまりない 満腹感もよく分からない

だから食事が出てきても むさぼることはない

だいたいゴハンを食べるとき 隣にあるお皿が分からない

おなかが張ってきたようだが ハッキリ便意は感じない
トイレに座ってもズボンの脱ぎ方が分からない

脱いでも括約筋の緩め方が分からない

腹圧のかけ方が分からない 出ないままズボンを上げて
徘徊していると オムツの中にオーバーフローする

何か(テレビ画面)が動いているが 何か分からない
同じフロアに 顔見知りも何人かいるが

話せないから友達にはなれない 知らん顔をしてすれ違い
どこに行っても深い霧の中.....

ただ一か所 落ち着くのはこのベッドの中

この部屋は忘れない これだけは忘れない (立派！)

ここにもぐりこんでいる間が 私の人生 私の時間

「昼間あまり寝ると夜が寝られないよ」と言われるが
すぐ忘れてしまう トマドイながら寝たり起きたり

ベッド回りの鉄棒は一か所切れているから

そこから上がれば楽なんだが それは分らない

ワザワザ高い部分を超えてよじ登る (身体的能力は十分)

靴を脱いでいないが平気だ (私が気付けば脱がせる)

フutonは綺麗に伸ばして 縁をキチッと折り返す

しかしこうして寝てばかりでいいのかな？ 起きてみよう

(またまた徘徊) 片足クツをはいていないが気付かない

ピタパタピタパタと歩く 時には両足とも靴下のまま

靴の感触・靴下の感触・はだしの感触

左右のアンバランス・・・そんなことはあまり感じない

壊れているのは脳だけで 体は比較的元気だから

サッサッサッと歩く・・・何を思い付いたか

急に走り出すことがある その早いこと！

徘徊に全部お付き合いは とてもできない

ことに荷物でも持っていたら大変だ 苦い経験がある

(一九九九年一月二一日)

痴相

(26-1066)

朝日新聞の密着取材は年を越して半月に及んだ

写真部員は「少し付きまとい過ぎたかな」と心配したらしい
そのためかどうか……数多くとった写真の中から

私たちの写真を一枚 立派な額縁に入れて贈ってくれた
さすがに チャンスを捕らえた素晴らしいものである

泰子の笑い顔をジッと見つめて

一年八ヶ月前(入園時)の写真と比べてみる

体は太っており 表情はゆるんでいるが

痴相がある 「知」が病むと「痴」となる

体は健康であるが 司令部がこわれている

在宅介護ならばもっとも危険の多い時期である

豊寿園に入った頃 私は泰子の写真をあまり撮らなかつた

それがこの数か月前から 日付入りの写真をとり始めた

「これは！・・・もしかしたら？」と思つたからである

朝日の写真に「伊規須さんは会う度に妻の写真を撮る」と

添えられていたが 私の心を知る人は少ない？

同じ人を撮り続けると 微妙な表情の変化から 心の動きが

読み取れるという カゲが薄いとほこういう事だろうか？

(一九九九年一月三一日)

死別演習

(27-1094)

泰子はまったくものを言えないから

私をだれと思っているか 確かめようがない

広い食堂を見渡し 泰子のそばに行って座ると

ちよつと表情を動かすが ほかの人にすると変らない？

そばにいても 会話ができる訳ではない

電池カミソリで口の回りのヒゲをそると

うるさそうな態度で 時にはおしのけられる

チャンスを見計らって日付入りの写真を撮る

写真を残すことが良いかどうか　ちょっと考える？

彼女は私をまったく無視して　ツト立上がり

(エンドレス回廊の) 徘徊に出かける　歩き方は早い
なるべく同行するが　毎回はたまらないので

時にはガラス越しに(回廊を)見渡して目で追う

「いま私が姿を隠したらどんな態度をとるだろうか」と考え
サッと物陰に入って様子をうかがう……………
まったくそ知らぬ態度　いま夫がいた事も忘れている
一時はつらかった……………しかしこれで安心して死ぬる

(一九九九年二月六日)

命の座

(28-1138)

泰子は 昼間もベッドに入っている事が多いので
直接寝室に入ってベッドのそばに立つ

「ヤッコ」というと ちよっと表情が動くが声はない
聞こえないぐらい小さい声で「ドースル」と言っている
私も「ドースル」と応じながらポンポンと毛布をたたく
会話はなから お祈りしたり賛美したりしながら
彼女の頭をなでる 正面から見ると真っ白である

毛髪は太くゴワゴワしている それに触れながら思う

「この薄い頭皮の下で前頭葉や大脳に何が起こっているんだ
ろうか……。すこしばかり萎縮が起こっているのか？
変質しているのか？ 斑点ができているのか？

小さな小さな脳梗塞が多発しているのか？ それとも
遺伝因子によるものか？……。とにかく
それによって 人間がほとんど人間でなくなってしまうた
しかし命を残らしめている方のご意思とパワーがある

人間が何かを始めておきながら 投げ出すなら不真実である
造りぬしは真実そのものであるから
きちんと締めくくって下さるに違いない

(一九九九年二月一九日)

食事介助

(29-1176)

第四水曜日はお誕生会があり、それがすんだ頃には

オヤツが来る……いつもケーキらしい

泰子のそばに行ってみると、もうケーキが配られていて

手づかみで食べていた（もちろんスプーンは付いている）

当然、指はベタベタ、少しナメたが、あとどうしようか

と迷っている。膝にもこぼして指でつまんでコスッている

私はすぐポケットからティッシュを出して指をふく

あらかた始末しておいて、スプーンを取ってケーキを割り

泰子の口に運ぶ……アーンアグアグと食べる

もう一口もう一口 四十年このかた こんな事はなかった！
とうとうここまで来たか！……

食事のとき 中央の特別席では

寮母さんが総出で食事介助をされる 中には両手を使って
左右二人の介助をされる人もある！

泰子も遠からずその席に座るだろう 今でも一人では
まともに食べられない 口に運び噛む事はできるが
隣の皿が分からないから ゴハンだけ(ばかり)食べて
箸を置く 寮母さんが次の皿を押しつけないと食べない！

(一九九九年二月二五日)

レク日見字

(29-1190)

木曜日の午前 食堂（訓練室）には大きな円陣ができていた
まもなくグループホームの入所者も加わって総勢四十余名
職員・ボランティアは合計七・八人ぐらい？

中央かみ手の小机にMさんが立って 点呼が始まった

「出席をとりまゝす 呼ばれた人は手を上げてくださーい」

「○○さーん △△さーん □□さーん」……しかし

手を上げる人は少ない 「はーい」と言うのはよいほうで
顔をちよっと上げる人……全く無反応の人もある

「いぎすさーん」と呼ばれた「ア この人は知ってるな！」
私のふるさとに近い人は「規」を「ギ」と読む

泰子は無言・無反応・無表情……うしろから
腕を押し上げようとすると「ウッウーンッ！」と
振りほどく「誰だ！ 何をする！」という顔でニラム

やがてボール投げが始まった 各自一ケずつ持って
ワーワーと喚声を上げながら 前の箱に投げ入れる
赤と青に別れてヒトーツフターツと数え始めたが
泰子はニコニコしながら二つとも持ったままだった

(一九九九年三月四日)

濃霧

(32-1294)

金曜日は板櫃公民館を基地として

西南の丘を中心に 二〇個ほどのお弁当を配る

今日は春の霧が深かった

眼下に広がる上津・真鶴方面の町並みは乳海に沈み

旧電車どおりのビルはボンヤリしている

視程は三百メートル無かったのではないか？

かつてブリッジから百メートル離れた後部マストが

ほとんど見えないほどの濃霧に囲まれたことがある

当時はレーダーはまだ無かった 速度を落とし

時々汽笛を鳴らしては 他船の汽笛に耳をすませる

.....そんな有様だった

この白い世界を見て思うのは 泰子の認識世界である

そこはただ見えないというより 戸惑いの渦が巻いている

そんなことを考えながら都市高速を門司に向かってしていると

いっそう霧が深くなり ヘッドライトを点灯しなければ

危険を感じるようになった 車の流れは遅い

(一九九九年三月二六日)

摂食

(32-1296)

その日の夕食はカレー（＋福神漬）と海草サラダだった

「今日は御飯ばかり食べようだったって食べられない」と安心しているとはシで白い所をつついて御飯ばかり食べている

スプーンを持たせようと思うが聞かない

寮母さんがすっとハシを取ってスプーンを持たせると

やっと食べ始めた・・・・・・・・やはり白い部分ばかり選ぶ

彼女は昔から全量を均等に混ぜて食べる習慣だったが

それもすっかり忘れてしまった・・・・・・・・

次第にカレーとの境界線に近付き 一緒にすくったが

「アッこうして食べるとおいしいな!」とは感じない

無表情で黙々と口に運ぶ……いよいよ少なくなると
お皿の端に押し置いて 指でつまんで食べる

海草サラダには気付かないから皿を並べ替えて押しつける
私が食べさせた方が早いが なるべく自分でさせねばと
声は掛けるが手は出さない 全介助まであと一歩か?

やっと食事がすんで歯を磨いてもらう 一人では磨けない
歯に隙間がふえて食物がはさまるようになった

齒科（来園）検診を受けているという 外も内も濃霧!

（一九九九年三月二六日）

扉前の別れ

(33-1346)

「帰っていいかね また来るからね」と言う

小声で「ン」と言うが 分かって言っているのかどうか？

その証拠に 表情も変えなければ動こうともしない

時には ツト立って徘徊に出かけてしまったりする

一昨年まではペアの人と一緒に入り口まで送りに来て

そこで三人でお祈りをして別れていた

その日 寮母さんに挨拶をして扉の前まで行ったとき

ちょうど泰子が扉の近くに来た 徘徊中の偶然である

私が暗証番号を押して扉を開けたが 知らん顔

扉の外をチラッと見たが 出ようというふうでもない

私を見てアッと言うでもない 私は彼女をじっと見ていたが
扉が閉まる前に横を向いて行ってしまった

このごろ彼女を呼び止めるとき「オイ ヤッコ チョット」
などと言うより 寮母さんのように「伊規須さーん」と
言ったほうが反応するようだ 雰囲気を感じてらしい

最近扉の中ほどに半透明のフィルムが貼られた

彼女の世界は次第にかすんで行く

(一九九九年四月一九日)

いよいよ

(36-1494)

事故を起こしてからしばらく面会に行けなかった

私を夫と分らないから待っていることはない

例のごとくヘイの隙間から一階のグループホームを覗くと

アレッ電気が消えて真っ暗……誰もない？

事務所で一階の寮母さんが 出勤札を裏返して勤務に向う

追っかけてYさんが「Mさん！いま一階は消毒中です」

これで事情は分った 一階の人たちに会えるかも知れない

特養の大部屋に入るが泰子の姿はない あちこち覗きながら

一回りすると トイレの前で寮母さんから解放されたところ
だった 黙々と散歩に同行ソロソロと徘徊してやっと自分の
部屋に入った ヤレヤレと思っていると 何が気に入ったか
他人のベッドに潜り込む それも靴を履いたまま!

いくら言っても 引き戻してもウナリ声をあげて

反抗するから手に負えない とうとう根負けして寮母さんに
訴えると 廊下に引き出して部屋に鍵をかけられた

鳩がトウモロコシを貫いて来る 机のハシをポンと叩くと
ヒラリと飛びのって 人の目を見上げる

ネコと目が合うと サット寄って来てスリスリする

(一九九九年五月二七日)

ホームに着くと ちょうど配膳されるところだった

介助卓から一つ離れた席 寮母さんの目の届く所だ

お膳が前におかれたが 箸を取る事が分らない

そばに寄って「サ食前の感謝(の祈り)をしよう」と

頭を下げて目をつぶる・・・・・・・・が彼女の反応はない

少し離れて 斜めうしろから見守る・・・・・・・・

じっと膳を見て首をかしげたり ちよっと手を出したり

引っ込めたり・・・・・・・・チラッと前の人を見るが

「あんなふうにするばいいんだ」とは氣付かない
箸をとって押しつけければ食べ始めるだろうとは思うが
なるべく自分でやらせなければ……と氣持ちを抑える

隣の卓で介助しながらチラチラ目を配って下さる寮母さんに

「私が箸を取ってやっていいでしょうか」とお尋ねすると
「とってやれば食べ始めると思えますよ」という答え

それではと箸を押しつけるとやっと食べ始めた　しかし

ゴハンだけ食べ　皿から皿へ移る事はできない

味覚も幾分あるだろうが　どうすればよいか分らないのだ
とにかく全部腹におさめてくれればと思う

(一九九九年六月一五日)

新 展 開

(39-1580)

今日は(夕食)配膳の直前に園に着いた

私は泰子がゴハンばかり食べる事を もうあきらめていた
次々にお皿を替えて 結局全部お腹に収まればそれでよいと

K寮母さんがお膳を置いて 椀のフタを取られる

(ここまではいつもの通り)・・・そのあとむこうを向いて
何かされている様子・・・・・・泰子が食べ始めたので

近付いて見ると ゴハンを半分別の容器に移して

オカズ(卵焼きのアンかけ)を載せ ちよっと混ぜてあった

「なるほど！」と膝を打った……泰子は黙々と食べ
「こりゃウマイ」という顔はしない 目が湯飲みに移るが
お箸でお茶をつまもうとしている 手を添えてやると
やっとコップを口に持って行ってクーと飲んだ

あとで係長にその話をすると「それで謎が解けました！」と
ジュース(コップ)を持ったまま廊下を徘徊するのが

不思議だったが 液体を口に入れる方法が分らなかったのだ
看護婦さんは「辛い物に顔をしかめるなら味覚はありますね」
「食物を混ぜる事をご家族はどう感じられますか」と言う

百人の中の一人に こんなにも目を掛けて下さる！ 感謝！

(一九九九年六月二三日)

覚 悟

(41-1684)

ドアに近付くと もう歌声が聞こえていた

音楽クラブが始まっているらしい 中へ一步入ると

多数の視線が集中 こちらもそれらの人の心が見える

泰子は向って右 一番後列に座っていた

唇が僅かに動くが唱和している訳ではなくチグハグ!

渡されたカスタネットを 膝の上じっと持ったまま

指導寮母さんの説明を 理解出来ないから動けないのだ

右膝関節の内外にかなり大きな青痣ができていた

ゴルバチョフ痣のような不思議な形！ ウーンどうしたのか？
ベッドの枠（の隙間）に挟んでコネタらしい 彼女は
ベッドから降りる時ワザワザ高い部分を乗り越えようとする
「枠を外そうかと思いましたが他人のベッドにも登るから
それも出来ません しっかり見守ります」と言われた

畏にかかった獣が もがいて手や足を失う場面を思った
牛の足が狭い穴に落ちると必ず骨折する……なぜなら
まっすぐ引き上げる事をしないで 前進するからだ
今回泰子は幸い骨折しなかった よかった

「伊規須さんは進行が早い 覚悟が必要です」と言われた

（一九九九年七月一四日）

式と祭

(41-1712)

誰かが「爺ちゃんの葬式は孫のお祭り」と言った

三・四歳の幼児には 死の意味が分からず

いろんな人たちが集まることを むしろ喜ぶだろう

しかし そこで繰り広げられる人間関係を通して

経験を積み 成長してゆくパワーを持っている

しかし加齢による脳の老化・疾病は 人を三・四歳どころか

二歳以下?に変えてしまう そこには下降パワーがある?

老人力と言うべきか? 痴呆力と言うべきか?

私の葬式があつても 泰子は誰がどうなつたのか分からない
話しても 分かつたのか分からないのか確かめようもない
一言も一声も発することができないからだ

夫とか結婚生活とか 彼女の頭からは消えてしまった
世界はすっかり霞んで 霧の底にトマドイの渦が幾つも
巻いている……. それもこの頃はボンヤリしてきた
忘れるという事も分からない 時々だれか（寮母・寮父）が
来て引っ張ったり剥がしたり 洗ったり拭いたりされるまま
食べる事も忘れ お茶をお箸でつまもうとする

（一九九九年七月一九日）

ある午後

(42-1722)

訓練室（大食堂）に入ったのは 一五時五〇分ごろだった
泰子は見当たらない 寮父さんは「お部屋におられないです
か」と見上げるような顔をされた 私はアッと気付いた
「よその部屋に寝ているかも知れませんが探してきます」と
廊下を小走りに半周する……「アッ いたっ！」
「せんりょうの部屋」で寝ていた 勿論他人のベッドである
すぐ手招きしてベッドから引き出し 自分の部屋に誘導
自分のベッドにちよっと上がるが すぐ降りて他人のベッド
に上がる……ベッドの主に詫びながらしばらく付きそう

この時 寝室は冷房がきいていなかったたので蒸し暑い
しかし泰子は感じないらしく 手首は汗でベっとり
しているのに 毛布を引っ張ってかぶろうとする
彼女のベッド枠は 危険防止のため一つ外してある
見ていると片足はすっと降りるが 次の足は
ワザワザ高い枠を乗り越えようとして何度も試みる
ヨイショだめだもう一度フラフラユラリ・・・危ない！
あんな事してたら いつかベッドから落ちるだろう
「スカートはやめてなるべくズボンをはかせるように
しています」と寮父さんが言われた

(一九九九年七月二一日)

銀 髮友

(46-1904)

泰子と一緒にソロソロと散歩(徘徊)する

回廊には各所に長いソファがある

泰子は短時間そこに座っては 次々に移動してゆく
座る位置も大体決まっているようである

ある場所に並んで座り 背中をなでたり手を握ったり
肩を揉んだりしていると 午後の陽を一杯に浴びた

泰子の白髪がキラキラと輝き 見れば見るほど美しい

「茶目！」と言うと ちよつと表情が動いたような気がする
目を見つめながら 口を尖らせてヒョットコの顔をする

真似をして口を動かす……しかし終始無言

ごく稀に 聞き取れないような小声で「ソソソソ」と
言っているような音がする 脳のどこかがまだ覚めていて
ほんの少し動いたらしいが 意味は分からない

看護婦さんが通り掛かって 「伊規須さんいいねえ」

「ほらご主人のほうを向いて」と座り直させようとすると
ニヤツとするが動かない 私が誰であるか分からない
四十年間共に暮らしたことはキレイに消えている

明るいい日差しの中で 輝く銀髪と暗いカゲを見た午後だった

(一九九九年一月二〇日)

降 段 X

(46-1918)

遅い人が数人 まだオヤツを食べている頃だった
今日のオヤツは ふかし芋と牛乳だったらしい

泰子は真っ赤なスモックを着て テーブルから離れた所で
膝の上に小皿を置き お芋をつまんでいる・・・しかし
どうしてよいか分らない・・・戸惑っている

寮父さんが走ってきて 「こうしないとダメかな」と

お芋の皮をむいて下さる 「はい」と手を握って口の方に
持ってゆくと アフツと一口しかしイヤイヤという感じだ

表情は全くなく 芋を持つ手がブルブルと震えている
「指の震えが出てきました 徘徊も少なくなりました
食欲も落ちました しかし動かない割にはよく眠ります
夜間二回排尿誘導しますが成功する事もあります」・・・

「ご迷惑をかけます よろしくお願いします」と頭を下げる
手の震えを聞いたとき かなりのショックを受けた
コップを取り落とす程ではないが 徐々に進んでいる！
「初診の時 五・六年前からと言われたのを加えると
かれこれ十年になります」と言うとうなずかれた

(一九九九年一月三三日)

田舎 食

(48-1990)

寮母さんは全介助の入所者の口に食物を運びながら

日はチラッチラッと泰子を見守られる

泰子は食事が遅く、かつて盗食者に狙われた事があった

今でも相変わらず遅い (食物で) 遊ぶ訳ではないが

すべての判断が怪しく、戸惑いながらソロソロと動くからだ

片肘をついたまま食物を運ぶと、ポロポロとこぼれる

食べようという意欲はあまり感じられない

次々にお皿を変えながら、長い時間をかけて終りに近付いた

ウェットティッシュを一本引き抜いて

胸や腹の食べこぼしをぬぐい 指先を拭く

手を握ると奥のほうでピクピクと筋が震えている

ティッシュを丸めて お膳の隅に置いた・・・・・・・・と

泰子の手がスツと伸びてティッシュの固まりをつまんで

口に持って行ってアーン アッ!とやっとな奪い取った

食物であるかないか判断ができないらしい

実際に見たのは始めてだった これが異食これは紙食だ!

異食とは それが食物であるかないか分からないのだ

幼児が何でも口に入れようとするのと同じではないだろうか

(二〇〇〇年二月一〇日)

カナリヤ

(52-2162)

西条八十作詞 成田為三作曲

♪1 歌を忘れたカナリヤは 後ろの山に捨てましょか

いえいえそれは なりませぬ

♪2 歌を忘れたカナリヤは 背戸せどの小藪いに埋いけましょか

いえいえそれは なりませぬ

♪3 歌を忘れたカナリヤは 柳むぎの鞭むちでぶちましょか

いえいえそれは かわいそう

♪4 歌を忘れたカナリヤは 象牙の舟に銀かの櫂かい

月夜の海に浮かべれば 忘れた歌を思い出す

聞いているうちに

胸が熱くなり 涙がこみあげてくる

痴呆（失語）者がカナリヤだとしたら・・・？

捨ててはなりません

埋^いけてはなりません

ぶってはいかないそうです

象牙の舟は何ですか？

銀の權は何ですか？

月夜の海はどこですか？・・・ハァー フーッ！

(二〇〇〇年五月二三日)

降 段 Y

(53-2186)

お弁当配達が終わったあと 何か気になってホームへ向かう
夕食前だった 介助席に移動させ前掛けをかけて食事を待つ
お膳がきても泰子は どうしてよいか分からない

食前の感謝(祈祷)をして 「さあおあがり」と
お碗を持たせるが 一秒で置いてしまう

寮母さんが「しばらく介助しないと自分から上がりません」
と言われるので スプーンで一□一□ □まで運びながら
今か今かと待つうちチラッと視線が動く シメタ！と

お椀を持たせるが やはり二・三秒で置いてしまった

「病状が進んでいます（予測なども含めて）ナースから状況を聞いてください」と勧められたが 明日は婦長が休み
月曜日の朝 取材（注）前に聞くことにしよう

数日前から 右目の目尻に涙が溢れ 小さな傷もある
今日は目頭に黄色い膿のようなものがかかりたまっている
「取りあえず抗生物質を点眼し 来週眼科医の訪問診察を受けましょう」と言われた 絶えず異変が起っている

（注）市の広報課の企画によるテレビ取材がある

ケーブルテレビ

（二〇〇〇年六月二日）

降段 〇六八

(53-2188)

一五時前 入所者の人影はまばらで 泰子も見えない
キヨロキヨロしていると寮父さんが 「傾眠がひどく
あそこのソファで横になっておられたので枕を持ってきて
休んでもらっています」と言われた 見るとOさんの腿に
足をのせておかしな格好で寝ている 目はあいていた

呼び掛けても反応はないし 不思議そうな顔もしない
オヤツのカステラをちぎって食べさせていると
寮母さんが泰子を抱き起こし 靴を履かせながら……

「(特に右) 足がムクんでいます 年をとると鬱血するんでしょうかね 車椅子の人なんか多いですね・・・泰子さんはこの頃 徘徊してもすぐ腰掛けて 運動量が減りました 寝る時に足を高くすれば いくらか回復すると思います

(昼間も) 休よせまれたほうがいいかも知れませんね」と

こういう形でジワジワと寝たきりになって行くらしい

意識も感覚も衰え 傾眠は次第に深くなり永眠につながる?

ケーキも牛乳も 自分から飲食しようという気はない

安易に口まで運んではいけないと思いがから

結局最期まで介助してしまった いやいよ来る所まで来たか?

(二〇〇〇年六月四日)

覚悟 ②

(53-2190)

今日は一〇時から市の広報課とケーブルテレビによる取材が行われる予定だった その直前

婦長さんからお話を聞いた 最近の泰子の状況から厳しい宣告になるだろうことは予測していた

「①転倒と②栄養不全と③??に注意しています

①転倒して骨折すると 寝たきりになりやすいです

(食事) 口を開かなくなり 飲み込まなくなると②になり
鼻注とか胃ろうになります

しかし合併症で(外部の病院に)入院でもしない限り

最期まで当園で看ます　すでに若干名が胃ろうになっており
伊規須さんにも遠からず転機がおとずれる事と思えます
いずれ（囑託）医師から話をしてもらうことにしましょう」

広報課とディレクターには　いま聞いたばかりの話をした
最低限の面会力をつけたつもりだったが　取材を終わって
「ちょっと見たところ痴呆とは分かりませぬえ」と言った
健全世界の住人に痴呆世界の理解はなかなか難しい

「戸畑にはケーブルテレビが入っていないので
ビデオをお持ちしましょう」と言った

（二〇〇〇年六月五日）

近 況

(53-2200)

七月まで三か月分の介護記録（コピー）をお願いした感謝しながら 一〇ページ分を食い入るように読む文章は長くないが 妻の状況がよくわかる

今期は一段と進んだように思われた

- ◆しばしば打撲跡が発見されている 部位はみな違う
- ◆椅子から自力では立てない 立たせても歩行は危ない
- ◆夏祭りのとき 庭までの往復はすべて車椅子だった
- ◆転倒が何回か記録されている 最も恐れていた事だ
- ◆足（各部）の浮腫が顕著になると足を上げて就寝する

◆後半になると 食事はほとんど全介助になっている

◆右目にも白内障が認められたらしい（左は手術済み）

◆驚いたのは「浴槽内での溺れ^{おぼ}」である（職員が）

複数の利用者と共に浴槽に誘導し（泰子の）両手で手すりを握らせ 肩まで沈めておいて 次の利用者を介助していた

（その間・・・時間は不明？） フト泰子を見ると

両手を手すりから離し あお向けに浮き 顔が湯ぶねに

漬かっていた！ 急いで引き上げ婦長に報告

チェックしたが大事には至らなかった

◆そのためか 七月末からは機械浴となった

ありのままを記録して下さった寮母さんに感謝する

（二〇〇〇年八月一日）

無

(53-2222)

五感といえは 目・耳・鼻・舌・皮膚などによる感じだ
泰子は五年前 左目の白内障手術を受けている

専用眼鏡をどこかへやってしまった よく見えてはいない
最近右目にも白内障が認められた こちらも霞んでいる

全身的に感覚が鈍くなっているから

聴覚も嗅覚も低下していると思われる

食物をオイシイと感じる様子はほとんどない

皮膚の感覚も衰え 筋肉の感覚 骨格の感覚も弱った

ギョツと強く肩をもんでも 感じないし

脇の下をグリグリッとクスグツても 知らん顔

(厳冬に) 冷たい手を首筋にあてても

キヤーッと言うどころか 微動もしない

ひどく内出血するほど膝をこねても 痛がるふうはない

昔もなく 今もなく 将来もない

世界も国も社会もなく 家もなく家族もなく夫もない

痛いもカユイもなく苦も楽もない 悲しみも慰めもない

朝も夜もなく 生もなく死もない 無い無いづくし

(二〇〇〇年八月七日)

延 命

(53-2224)

医療技術の進歩は 人の寿命を著しく延ばした

その結果 肉体だけが生き延びて脳の寿命の尽きた人が

増加した これが痴呆者ではないかと思う 私は医療技術の

進歩が 大きな矛盾を孕んでいるように思えてならない

だから 私はいたずらな延命処置を断りたいと思っている

判断能力を失った妻についても 同様である

最近 泰子は病状が進み 覚悟を求められている

「今は（摂食が）全介助でも 口はあけます

しかし次の段階では（Yさんのように）

口を開けなくなるでしょう

無理に口を開いて食物を含ませても

こんどは飲み込まなくなります

そうすると必要なカロリーが体に入りませんから

鼻注とか胃ろうになります」・・・と婦長さん

どこから先を延命処置といふべきか？ 何を断るべきか？

彼女の身になって決断すべき時である

私が先なら話は違ってくる 早く弁護士に相談に行こう

（二〇〇〇年八月七日）

第三章

特養風景

お世に託すになります

(1-28)

ホームで会う人ごとに頭をさげる

どんな職種の人からも一つのメッセージが聞こえる

「介護はおまかせください」と

統計的に言えば……

彼女は私のおとに 十数年のこることになる

あの最年長のOさんのようになれば

三十年以上になるかも知れない

その間 寮(父) 母さんも 看護婦さんも 指導員さんも
次々にかわるだろう

お顔も お名前も 知らない方々にも

よろしく よろしく お願ひしたい

そういう気持ちで 頭を下げているのです

「お世話になります……ほんとに」

(注) 妻、泰子は九七年六月から北九州市門司区畑の

特別養護老人ホーム「豊寿園」に入園しています

(一九九七年一月一七日)

敵前の宴

(1-40)

食器を積んだ台車を押して 返却に向かっている
いつもの光景……………

ン?……………見なれない 背の高い食器?
近付いて見ると徳利だった 猪口も伏せてある

老人ホームでお酒? 「今日はなんごとですか?」と聞くと
「お誕生会でした」と寮母さん

それだけなら驚きも中くらいだが……
わたしは知っている　いま園は目に見えぬ伏兵（注）と
激戦中なのだ　その最中に悠然とお酒を配るとは！
すごい！　有り難うございます……

「何かお手伝いさせて下さい」と

口まで出かかっているのを　グッと飲み込む

ゴクリ！

（注）体長〇・四ミリの執拗な敵！

（一九九八年二月二八日）

執念

(1-50)

「自殺もされんしね……」と
お掃除のおばさん

「いや この人たちは自殺しません
自殺を考えられないし
する道も分からないから」と私

「でも すごいですよ

箱を積み上げて 塀を乗り越えたり

身をくねらせて とんでもない所をスリ抜けたり

いつの間にか 何十キロも移動したり

ぼんやりでも

思い込んだら やってしまふんです」

(一九九八年二月一九日)

おもと

(3-92)

グループホームに「おもと」を寄贈した

店の人が「暖房のきかない室内がよい」と言ったので

ホームは暖か過ぎて 伸び過ぎるのではないかと心配した

その日の写真をとって

あとで伸び方が分かるように準備した

水は 頻繁に面会に行く私が

調べて時々やるつもりだった

しかし甘かった

目の届かない夜間に 食べる人がいたのである

寮母さんは 毎晩 寮母室にかかえ込んでいるという

ああ申し訳ない 余計な心配をかけてしまつて……

それはそうと グループホームが閉鎖されているあいだ
どうなっているんだろう？

(注) 一九九八年二月・三月にわたつて

一・二階のグループホームはともに閉鎖された

(一九九八年一月)

春 は 廿 辛

(4-116)

きょうは三月二七日・・・土日のあとは

年度末まであと二日 と思っていると

Sさんが複雑なお顔で ツツーと近づいて来られた

「伊規須さんには 大変お世話になりましたが・・・」

(エッ 何のこと???)

「今年度末で退職することになりました」

「結婚が決まりましたので・・・」

「それはおめでとうございます（しかし困った困った）」

「ハイ長崎のほうに行きます」

「しばらくしたら また働きたいと思っていますが
再びお会いすることはないと思いますので……」

「ウーン ウーン ウーン」

何と言ってお別れしたか思い出せない

そう言えば さっき玄関の所で

看護婦さんが花束をかかえて挨拶をされていた

（一九九八年三月二七日）

グルーナホーム
G H 願 望

(5-144)

G H 願望を口にする家族は多い

「G Hがあるから入れたんだ」

「話が違うじゃないか」

「大部屋の人たちがカワイソー」などなど

しかし 入所者（痴呆者）の世界に立って考えるなら

どこにいるかは問題ではない

平穏と安定のあるところがパラダイス

「じっとして何もしないのはカワイソー」

と思うのは健全者　痴呆者は退屈することはない

(GHの) 小人数は　一つ間違えば

人間関係のトラブルが深刻になるかも知れない

いろいろ作業がやれるというが
かえって戸惑う人もいるだろう

私は痴呆者の世界に入りたい　交わりたい　立ちたい
家内がそこにいるから

(一九九八年四月二日)

ごはん時

(7-202)

ふつうなら 食事どきに訪問するのは失礼だが
泰子と生活を共にしたい と思って

時間を考えないで園に行く

ただ 食卓から少し離れたテレビの近くに座る

そうしないと

「あら あなたの分がない」

「これを少しどうぞ・・・」などと厄介な事になるからだ

グループホームではお釜からよそうので
すこし余裕があるらしい

ときどき 「伊規須さんのご主人にもこれを」となる
私はうれしい・・・食して交わるのは最高だ
隣に座った人の介助(注)もできる・・・

しかし 私は考える・・・
その時間帯を避けるべきだろうか？ それとも???

(注) できるだけ手を出さないようにしながら

(一九九八年四月二〇日)

すずらん

(9-314)

母の日の前日 不在配達票が入っていた
郵便局から電話があつて

カーネーションでしょう と言う

ところが中身は すずらんだった

いつも変わらず贈り続けて下さるA姉に感謝

宛名の泰子はもういない……

しばらく複雑な気持ちに浸っていたが

そうだ老人ホームに持って行こうと考えた

しかし 一つ心配があった……

前にオモトを寄贈したとき

夜 職員の目が届かないうちに

むしって口にした人がいた

すずらの花は ちょうど手頃の大きさ!?

あれから何日になるだろうか

心配する事はなかった まだ無事である

もしかしたら 職員にご迷惑をかけているかも知れない

(一九九八年五月三〇日)

選 挙

(10-346)

七月一二日に参議院議員選挙の投票が行われる

二・三年前に どころかの施設長が

入所者にメモを渡して責められたことがあった

痴呆者の選挙権をどう考えたらよいだろうか

- 一 選挙が行われる事を理解できるか 仕組み・意義など
- 二 選挙公報・政見放送などを理解できるか
- 三 それによって候補者を正しく比較判断できるか
- 四 介護者が説明・誘導して 多少でも判断が出来たとして

投票所まで保持できるか 五分や十分ではすむまい

五 もし保持出来ても 正しく表記できるか

少しでも疑問があれば無効票にされてしまうだろう

痴呆者はすでに夢社会に生きている

持っているものを奪えば 人権侵害だが

すでに失ったものを 問題にして

本人を戸惑わせるなら そのほうが

人権侵害・平穩侵害ではないだろうか

そのかわり 両社会の接点にいる私たちが

彼らの心の願いを 反映させなければならぬ

(一九九八年六月一三日)

けむり

(13-480)

駐車場を出るとき チョット迷って

左にウィンカーを上げた

新門司インターまで 裏道を行こうと

思ったからである・・・・・・・・・・すると

南風に乗って かなりの煙が左から右に流れていた

ハッとしたが すぐ治まった

「なーんだ・・・・・・・・老人ホームで火葬なんか

する筈はないじゃないか……………

あれは ゴミ焼却炉だろう……………

しかし 霊安室はどこかにあるかも知れないな」

さっき職員の方々と 「長い別れの日々」の

話をしたばかりだった

「彼女を残して死ねない」と 堅く考えていたが

この四・五日寝付いてみると 「これは分からない」と

思うようになった

K弁護士事務所に 後見について相談に行くつもり

……………私の後見も考えねばなるまい

(一九九八年八月二〇日)

面△力

(15-578)

見舞って下さる お気持ちは有り難いが

健常世界からのみ ものを見て

あれこれ言われると「もう結構です」と言いたくなる

まず第一に 痴呆は老化・退化現象であって

快方に向かうということは無したこと

健常？者とは違った世界に住んでいること

殊に 泰子の場合は……

失語のため 数語を発するに過ぎない

何か言ったようでも あれこれ推測してほしくない

「行かないよ」とは「ノー」というだけの意味で

行くとか帰るとかは 関係がない

頭で判断したのではなく 口から出まかせかも知れない

・・・・・・・・ 少なくとも それくらいは理解してほしい

ほとんどの人に 始めからそれは期待できないから

予め ある程度の説明をすることになっている

面会力をつけると言ったら おかしいだろうか？

(一九九八年九月二八日)

便 塊

(19-792)

トイレ・オシメ・オシリ・ウンチ・オシッコ

今まであまり口にしなかった単語が ナジミになった

泰子が 毎日毎晩 三時間おきに

お世話になっているからである

「わがクソは臭くなし」というコトワザがあるが

これは排泄物そのものことではなくて

「自分の欠点には気付かぬもの」という戒めのコトバである

しかし考えて見ると そのものもイトオシイものではある
つい先刻まで体内にあったもの 一メートルの結腸の中は
予備軍が続々と詰め掛け 末端では糞が出来上がって行く
落語か何かに「皮一枚の中は糞尿ばかり」とあった

わがものがイトオシクはあるが 匂いはする

だから 進んで好きにはなれない

これが他人のものだったら どう感じるだろうか？

寮母さんは毎日触れて どういうお気持ちだろうか？

それに耐える時 どれ程のストレスがかかるだろうか？

うちの裏庭には 近所のネコたちが 喜んで排泄に来る

(一九九八年一月一六日)

園 風

(20-836)

知人に 某老人ホームの寮母だった人がいる
話を聞いていると 大体どんな園かが分かる

よしあしは別にして 園の雰囲気というものがあるようだ

すこし想像力を働かせると 介護者のものの言い方から

その心まで見えて来る 入所者の様子も見える

介護は大変な仕事だが技術だけじゃないなあ と思う

どうして雰囲気が変わるんだろう？

ハード面の相違がそれほど大きいとは思えない

入所者の身体・痴呆レベルも大同小異だろう

職員数だって大枠は法律で決まっている

すると職員個々の人間性・倫理観・職業観によるのか？

園（社）のプライド・指導・教育・研修によるのか？

職員の方々を探ろうなんて決して考えませんが

「ああ この方は どこかの施設で長年勤められたな」と感じる 特有の雰囲気がある

豊寿園の素晴らしい園風が豊かに育つよう期待します

（一九九八年二月一日）

亡心 十六

(21-864)

いつかは忘れられる・・・と覚悟はしていた
しかし現実になってみると ツライ！

泰子は「あなたは誰ですか？」と言うことはできない
会ったときは「オッ」というような顔をする

私は彼女の隣に腰掛けるが 会話はできない
暫くすると立ち上がって 一人で散歩（徘徊？）に行く
グルッと回って帰ると 遠くに座って知らん顔

前には「テレ屋さん」と言われ 私もそう思っていた
しかし今は夫ということが分からなくなっている

彼女の内から一切が消え去っている 「忘夫」である

私は彼女とスローグッドバイしているつもりだが

彼女から見ると グッドバイはすんでしまったらしい

「忘夫」は「亡夫」である

それでも面会に行く 彼女にとって夫でなくなっても
私にとっては妻だから……聖書のコトバ

「神の合わせたまえるものは人これを離すべからず」

(一九九八年二月九日)

寝 せきり

(23-952)

「オヤツの時など 姿が見えないので探しに行くと
ベッドで寝ておられることがよくあります」と言われた
私も見た………夕食後 六時前に もう寝ている

カラダは健康で 運動能力もかなりある
疲れているとは思えない 徘徊しても知れている……しかし
心の戸惑いが心身を疲れさせる事は大いにあるだろう

よく「寝たきりは寝かせきりだ」と批判される

泰子の場合 自分から寝付いてゆく「(自)寝きり」である
もちろん職員は 起きているように指導される

在宅末期には適量という觀念が無くなって太り始めた
今はさらに肥満して 差し入れる衣類がない

脳の機能が低下すると 肉体も沈降して行くらしい
ある医師(外科・皮膚科)は「心身症が多い」と言った

「ポーツとしているとボケる」は一面の真理かも知れぬが
私は「ボケたから何もできなくなる」と思う

(一九九九年一月四日)

島の規則

(24-982)

古生物学でいう「島の規則」とは

大氷河時代に隔絶された島に 閉じ込められた

ゾウは小さくなり ネズミは大きくなって行く……

という話である

生物学者 本川達雄氏は

これが人類にもあてはまり

文明のサイズにも類比されるのではないかと考えた

すると 人類は巨象（進化の袋小路に入っているという）

のように絶滅しかかっている？かも知れないし

これからの世界では（地球全体が一島と考えられるから）

島の知恵が必要ではないか……と提案している

そこでは日本人の「島国の知恵」が貴重な財産となろうと

私は簡単に進化と言う事には反対であるが それはさておき

豊寿園の特養（大部屋）とグループホームの関係を考えた

両者は厳密に隔てられている訳ではないが

ここにもアナロジー（類比）がありそうな気がする

するとゾウは？ ネズミは？ 文明のサイズは？

ウーン 逆のような気もするが？

（一九九九年一月九日）

洗せん

尻こし

(24-986)

失禁の始末や排泄介護を見ても 事が事だし
異性の裸体に近づく訳にはいかない

それにしても 寮母さんのご苦労は大変だと思う
労働としても楽ではないが 精神的ストレスは大きいだろう
入所者自身にも 戸惑いと不快感があるろう

ある肛門科のドクターは言った

必要でない時は閉じているからシワが一杯あるんです

拭うことは シワにすりこむようなものです

洗うのが一番よい……当然介護も楽になるだろう

TOTOに提案したい 後部の広い便器を開発してほしい
前方後円墳ならぬ前円後方便器である

それにポータブルの温水（ハンド）ノズルを付けること
個々に仕切られていなくてもよい

中国あたりのトイレは一本棒（板）に並んで腰掛ける

「後架」とは便所の意味だが「架」はまたがる意味もある
カッター（短艇）で排泄する時はオールを二本突き出して
それに跨がる 揺れているし慣れないと尻がすくむ！

（一九九九年一月一〇日）

特別席

(29-1182)

「食事介助」(注)で特別席に座る日も遠くなからうと

書いたが 今日泰子が中央の席に招かれていた

オヤツと思つて見ると 檜田テーブルを二つ寄せて

拡大特別席が作つてある………今日からだろうか？

車椅子の人など十四・五人 半分は口まで運んでやらねば

ならない人 半分は泰子のように観察してないと満足に

食べられない人である あいだあいだの丸椅子に職員が座る

泰子はゴハンを持つとそれだけ食べ尽くして箸を置き

どこかへ行ってしまふ　すぐ隣の皿が分らないからだ

職員は呼び戻して　皿を目の前に置き「コレ」と言わなければ

食べない　口まで運んでもらう日も遠くないのではないか？

食事面から見てもレベルの低下は顕著である

「この人は御飯をポロポロこぼす」と隣同士で喧嘩する人

「私はお金を払っていないから食べない」と言う人

その人たちをなだめすかすのも仕事・・・大変である

中には口をモゴモゴさせながら眠ってしまう人もいる

(注) 二九集―一七六「食事介助」をご覧ください

(一九九九年二月二七日)

通園力

(29-1198)

「きょうは早く着せてもらったね」「これいいね」と
パジャマを引っ張ると「ウッウーンッ！」と手を払いのける

寮母さんの言われることもほとんど理解できないが

テレ笑いのようにニコニコしながら割合に従順である

ピンクの服を着たこの人たちは 自分たちのために

何かしてくれる人だと分かるらしい……一方私には

「何するんだ？ お前は誰だ？」というコワイ顔！

絶えず徘徊を繰り返すが 毎回付いて回る訳には行かない
彼女は私をまったく無視してツト出かけ 帰ってくるよ

三分前のことは忘れて 遠くに座って知らん顔

こちらを見向きもしない・・・・・・これぞ

いよいよはっきりした 私が誰であるか分かっていない！

しかしそれでも園に通う・・・・最後の命の火が消えるまで

呼び続け賛美しつづけ 祈りつづけるためだ

どれほど重度の痴呆となっても たとえ無反応の植物状態になっても なお微かな感性は残っていると信じるからだ

しかしこれには力がある 通園力というべきか？

(一九九九年三月五日)

出 来 い

(38-1578)

老人ホームに行くといろいろな人に出会う

施設の職員さん特に寮母(父)さん看護婦さんには

最も身近かにお世話になるし 全部で四十数名?のうちに

色々な職種があることを知った 去った方々も忘れられない

嘱託医の先生方や クラブ指導の講師方のお顔も覚えた

警備・保安の方々とも懇意にして頂いている・・・そのほか

日赤奉仕団の方々 各種ボランティア団体の方々

外部からの研修者 他施設・民間会社からの派遣もあれば

専門学校生徒の単位実習 寮母さんの事前勤務もあるようだ

時には業務上の関係者・工事人なども見掛けるし

視察者・見学者もひところは随分多かつたように思う

避難訓練のときには多数の消防職員も見た

幾つかの家族とはよく会う 当然話は合うから話し込む

人数は少ないが 園内の清掃を担当している女性たちがいる
入所者や家族の生の姿を見ておられるので

短時間でも心の触れ合う話ができる

私の拙い詩をよく読まれており

「今が本当のご夫婦じゃないでしょうか」と言われる

(一九九九年六月二三日)

ぶ
ち

(40-1626)

今日は八幡西区で 午後四時近くまで家族会の仕事 あと
急いで大里西部公民館に寄り その足で豊寿園に向った
もうすぐ夕食という時間になってしまった

大食堂(訓練室)に泰子の姿が見えないので

廊下を回って行くと 途中のソファアに腰掛け

寮母さんが前に立って 何かさされている??

珍しいこと・・・徘徊の途中で座ったことはないのに?

何事かと近付くと前髪にピン止めして貰っていたン?

「・・・・・・・・・・・・・・・・（中略）・・・・・・・・」

「アッそう言えば このへんが少し薄くてブチですね」

「アハハすぐ伸びますよ」「ね泰子 大丈夫だね」と言う
とニコツと笑った 前髪はほとんど真っ白である

私は昨日 車の左後部をブロック塀にこすって

その部分が ちよつとブチになった

泰子との夫婦関係もブチかも知れない

私の心もブチだし 健康もブチ 時間的にもブチである

しかし変化があるからこそ耐えられるし 癒される

今日は彼女の写真を撮らないことにしよう

（一九九九年六月三〇日）

入院

(41-1686)

ベッド枠に挟まって もがけばもがくほど深みにはまり
(体力はあるので) カ一杯コネ切っていたら

恐らく骨折していただろうと思う・・・幸運だった

もしそうならいたら？ と思うとゾツとした

痴呆に理解のない病院に 入院したらどうなるだろう

① 安静指示などが理解できず相当迷惑をかけるだろう

特に泰子は完全失語で意思の疎通が全くできない

② 一般病院は抑制を条件にしか入院を受け入れないので

泰子のレベルは大きく落ちるだろう

③現在手に負えないほどある体力（足腰）は急速に衰えるであろう……など

五年前白内障の手術をした眼科病院で 若い看護婦さんから
テキパキ言われ 叱るように扱われて痴呆が急速に進んだ

「抑制ってドラッグでしょうか？」と問うと 係長は

「物理的抑制でしょう」と言われた 素人の私でも

「物理的」フィジカル 「薬物的」ドラッグ 「言語的」スピーチ があることは知っている

とにかく病気をしないようにケガをしないように と願う
介護保険時代 私的にベッドを確保する事ができるだろうか

（一九九九年七月一四日）

外出士又援

(46-1920)

「泰子さんはクリスマスやお正月に外出されますか？」

「園からお尋ねがありましたか『ない』と返事しました

帰っても会う人がいる訳じゃないし クリスマスや

お正月は（教会の特別集会で）むしろ忙しいんです

できるだけ面会に通いますので 園でよろしく願います

だいたい私を見ても こんなふうで喜んでくれません」と私

するとX寮母さんは言った・・・・・・・・・・「イエ

泰子さんと私が外出する事は許されないだろうと思います

しかしご主人と泰子さんが外出される時に

私が（私的に）同行するなら問題はないと思います」

「エッ?????・・・ワーツ（涙！）有り難うございます

先日の衣服のことといい 外出のことといい

そんなにまでお心をかけて頂いて 有り難うございます

こんなことであるでしょうか 暮れやお正月には

ご自分のおうち（新婚家庭！）も忙しいのに

私どものために そんなに……………」

何度も何度も 心の中で頭を下げながら帰った

運転も軽やかだった 泰子の心にも灯がともってほしかった

（一九九九年二月一三日）

カラオケ

(47-1954)

泰子は最近動作が緩慢になり 徘徊していることは少ない
テーブルから離れたハグレ椅子で 片肘をついて

目はあらぬ方を見たまま動かない

私が視野に入っても 顔色一つ変えない

カラオケ・セットが次々に歌っているが全く無縁……

彼女は音も言葉もない世界に住んでいるからだ

唯一の接触法として 彼女の後ろに立って肩を揉む

ギユツと強く揉んだり 猫背をグイツと反らせたりしても

声も出さず避けもしない　私の手を払いのける訳でもない

歌詞を見ていると　カラオケ文化は大したものだと思うが
どれも救いのないものばかりで　希望は湧かない

小声で歌っていたが何度も涙声になっては　気を取り直す

三〇分も揉んでいると足腰や手が疲れてくるが

何よりもツライのは・・・・・・・・

歌や思い出の世界に登場する泰子と

この手の下に実存する肉体が同じではない　ということだ
夫も妻も体験するこの不思議な世界・不思議な関係！

(二〇〇〇年一月一六日)

西女介護四

(47-1956)

施設入所者の認定審査は一般に先立って行われた
審査請求書を書いたのは (昨年) 夏の終り頃だったか？
そのあと 結果を問い合わせる事もしなかった

朝日新聞の記念事業(注)に出演することになり
種々打ち合わせをするうち 「奥さんの要介護度は？」
と聞かれ 園に問い合わせて「四」と始めて知った

ウン「四」か・・・痴呆をそうとう見てくれたな
昨年秋ごろはかなり動きが活発で 徘徊を繰り返していた

ある人は「三ぐらい出るんじゃないかと思ひます」と言った
当時に比べ外見上もかなり進み　とうぜん脳も進んだ？

寝たきり全介助の人が「五」というのは分かりやすい
痴呆の人は体が動けば動くほど見守り度は高くなるのだが
それがなかなか見えにくい　泰子の四は精一杯だろう

職員のお手間を取る割に　介護度が低ければ

金銭的にもご迷惑をかける・・・・・・と案じていたが
四と聞いて少しホツとした　泰子は全く無表情・無関心

(注) 西部本社発行65周年記念シンポジウム／三月八日

(二〇〇〇年一月二六日)

茜 色

(49-2012)

近く 泰子のケアカンファレンスがあるそうで

家族としての要望・願望などがあれば・・・と言われた

それから数日 考えるがなかなか答えが出てこない

泰子は言葉という世界を失って 話すのはもちろん

読む・書く・聞く・・・も全くできない

もろもろの見当識は失われ 朝も夕も分からず

自分がどこの誰であるか 夫も顔も分からなくなっている

(たとえば痛いという) 感覚も鈍くなり動作は緩慢になり

手の振えが始まり トボトボとしたスリ足は危なっかしく
段差につまづかなくても (自分の) 足のもつれで

いまにも倒れそう 意識のレベルも下がり半ば眠っている

しかし良質の介護を受けて それなりに安定しているから

何も言うことはない それより泰子の身になってみよう

◆夕焼け空の茜色は消えかかり暗闇が迫っている

◆身の回りはすっかり日が落ちて物の形は無くなった

◆足下には戸惑いの渦がにぶい音を立てて巻いている

◆誰かこのかすかな意識の世界を理解してほしい

この最後の一行が「願い」と言えば言えるかも知れない

(二〇〇〇年二月一五日)

痴界の亦心？

(51-2120)

老人ホームの入居者どうしで恋が芽生え

まれには結婚に至る例もあると聞く

ある日ホームに行くとき泰子の姿が見えない 見渡すと

トボトボと回廊を歩いては 時々ソファアに座っている

同じソファアでYさん(男性)が座ってゴソゴソしている

見ると ジャッチのズボンを履こうとしているが

一本に両足を入れようとしているから うまく行く筈がない

通り掛かりの二人連れ（女性）が 文句を言いながら
手助けしたり 禿頭をピシヤピシヤ叩いたり……………
それに対してYさんはムニヤムニヤ言うばかり

見ていた泰子は 小刻みに座り直してはジリッジリッと
Yさんに近付いて行く……………
アレッ Yさんに好意を持っているらしい……………ウーム
ちょっと私の心は揺れたが すぐ思い直した

「私の妻だった人には違いないが 今は別世界の別人だ」
二つの世界にまたがる不思議な場面を体験した
これで（生裂きの）傷口が一段と乾いたように感じた

（二〇〇〇年四月一五日）

マジック・グラス

(51-2122)

鏡はガラスの裏面に銀メッキを施したものである

(光学器械など) 表面メッキもあるがいずれもメッキは厚い
薄く(銀や錫を)メッキして半透膜にすると

一方の(暗い)側からはふつうによく見えるが

他方の(明るい)側からは見えない

常界から痴界を望むと……よく見えるように思う

住人のしぐさから その心を推測することもできそうである

しかしあちらからこちらは見えない(認識できない)

つまり常界と痴界は広がりが違うのである

泰子はあちらの世界で 何らかの感情に従って行動している
彼女にとってこちらの世界はないし（かつての）夫もない
しかしこちらからは すべてが見えている

向こうがそうならこっちも・・・とは言えない
私から見える世界には 泰子が厳然と存在するからだ

常界と痴界は まったく別世界か 接点があるのか

健全者？が考えるように 痴界は常界に包含されるものか
交わっていても半透膜のように一方からしか見えないのか
まことに不思議な関係だと思う

（二〇〇〇年四月一六日）

夏 祭 り

(53-2194)

◆二〇〇〇年七月二十九日 土曜日夕刻

台風六号は足が遅く 奄美の西にあり雨はまだだった
舞台まわりに張った幔幕が吹きちぎられる事態の中で

屋外決行が決まったのは午後四時だったという

私が五時一五分ごろ着いたとき

何となくざわついていたのは その為だったらしい

◆午後六時 ドドーンパリパリッという花火の合図で

夏祭りが始まった 雲間の西日がちょうど吉志の山に沈んで
視界がスーッと暗くなる 見事な演出だった

M指導員の司会で　まず園長の挨拶　来賓の紹介

つづいて　強風にせかされるように　すぐ出し物が始まった

まず音楽クラブの実演　毎週水曜日に行われているクラブ

のメンバーが　N寮母さんの指揮のもと馴染みの「大楠公」

を歌う　「私を見て！　私のとおりに！」と言われても

いつもと違って　緊張のあまり間違っただけ

散々な出来栄えだったと思う

家族の賛助出演は私（太郎）一人だった

強風の為もあり　一部の人だけが舞台上上がり

私たち十数人は舞台の下に並んだ

妻はもともと　何も分からず　何も言えず　何も

行動（動作）できず　付き添っている私だけが

鈴を振り 手を上げて歌った

◆それがすんで 出演者が退場する段になっても

テキパキとは行かない あちらでもこちらでも

モタモタが続く 泰子を立たせようとしても

体が重くなっているので一苦労 居合わせたH看護婦さんが

後ろから車椅子を近付け やっと座らせて下さったが

芝生のデコボコでなかなか動かない 押したり引いたり

しているうちに時間が迫る Hさんはポケットからメモを

取り出し「エーッと伊規須（泰子）さんは あっA寮母さん」

と言っているうちにAさんがやって来られた

私は「園から『利用者にはボランティアなどを付けるので

家族会の方は模擬店に付いて下さい』と言われています」

とお断りして 「綿菓子や」に走った………

「泰子さんは 時間が長くなると疲れますので

寝室に戻って休んで頂きました」とは あとで聞いた話

◆綿菓子製造には ある程度の要領が要る

家族会のHさんはベテランである しかし今日は風が強く

フードがかかっているも 甘い綿が風下に洩れ散る

Hさんのご家族も手伝って 機械の周辺に付いた綿を

こさぎ取って中央のザラメ壺に押し込む 「回収品を再利用

雪印みたいだね!」「しかし砂糖だから」と言って笑う

店側が慣れるのに合わせたように客も増え やがて行列が

出来た あまり長くもなく 急げばさばける程度だから

ちようどよい チラッと舞台を見るとマジックをやっていた

金色の大きな輪を幾つも並べて 離したり近付けたり

裏にしたり表にしたり 次は新聞紙を重ねたりちぎったり

「ああ あれだな」と思うがジッと見つめる訳にはいかない

◆時間も過ぎ客足も減ってきた 泰子の動静も分かり

Aさんに感謝して一安心 そこで店に断って急いで園内を

一周 閉店間際の模擬店を回った

同僚（家族）会員の店もあれば 厨房職員手作り品の店も

ある タコヤキ アンミツ ヤキソバ オカシ ジュース

綿菓子 氷水など 食券は完売だが現品は残っていた

「現金でいいですよ」と言われるので 私は

一人暮らしの食料にタコヤキ ヤキソバを数個買った

「これだけの舞台がけ 片付けるのは大変だろうな」と

考えながら園をあとにした。8時をだいぶ過ぎていた

◆(老いを支える) 家族会のメンバー鈴木真理子さんは

当園家族会の副会長で 私は監事です 鈴木さんのお母さん「河野ミドリさん」と 私の妻「伊規須泰子」は(小倉南区)蒲生病院以来の病友で 入園もほとんど同時期でした。しばらくはペアを組んでいたこともあります

◆当園開設以来早くも三年余 最も早い時期に入園した

私たちは 利用者や家族の変遷をずっと見て来ました
妻は殊に進行が早く 大変ご迷惑をおかけしていますが
良い介護に全く安心です 当園では様々の行事が毎月計画されてお
り この夏祭りは地域をも巻き込んだ最大のものです

(二〇〇〇年七月二九日)

第四章

一 人暮らし

わかれ

(1-8)

私のために 掛けがえのない一人の魂が神様から遣わされ
そして帰って行った すべてを忘却のかなたに残して

六五年まえ 彼女が地上に迎えられたとき私は知らなかった
彼女の晩年 少しばかりの戸惑いがあったが

この世の一切の煩いから離れて ハッピーだった
暮れて行く光の中で ただ世の終りまで共におられる
主を頼みとして

残された者に ちょっぴり塩辛い思いがあるが

受けるより与える方が幸いだった と思う

知り合って四六年 結婚して三七年

貴重な体験をさせてもらってありがとう

さようならヤスコ!

こんど主の前で会うときは お互い天使のようだからね

夫婦よりも ずっと素晴らしい関係に違いない

君が強かったから この賜物を頂いたのか

私が弱かったから あわれまれたのか

それは 神様だけをご存じである

永遠より永遠に至るまで 主の御名はほむべきかな!

(一九九七年四月一九日)

ぬくもり

(1-32)

温かいフトンの中で目を覚ます

たしかに生きている

いや 生かされている

もし死んでいたら

電気毛布なんてとんでもない

おなかに

ドライアイスでも載せておかないと
すぐ腐敗してしまふ

命ってすごいな 温かいのに腐らない！

(一九九七年二月)

片付け

(1-54)

彼女が出て行ってから 一年がやってくる

ひたすら片付け・模様替え・改造に努める私
もともと工作はお手のものだ

着られなくなった衣類の山(注)！

見たこともない小物の数々！

靴箱の底には靴・靴・靴！

どこを見ても彼女の物ばかり

ホコリもヨゴレも……

バケツの濁り水も……

みんな涙腺を目掛けて攻めてくる

早く片付けたいが はかどらない

(注) 妻・泰子は在宅時代の終りごろ、「適量」という

観念がなくなったためか肥満した。机のカドにメジ

ヤーを貼ってスカートを選別する。どれもこれも大

幅アウトである。

(一九九八年二月二日)

列衣

く

(1-56)

生木なまきを裂くと

悲鳴が聞こえる

数日たつと

傷口は干からびてしまった

裂いた方も 裂かれた方も
死んでいる

しかし 木は満足している

(一九九八年三月三日)

パ
ワ
ー

(2-74)

別れの日々は

脆くはあるが 暗くない

暗くはないが 痛みは走る

すると コトバが溢れてくる

痛みは人の心を純粹にする

痛みは人をたくましくする

痛みは人を優しくする

痛みは人を詩人にする

痛みは人を神に近付ける

痛みは人に多くの事を学ばせる

古今の名曲と言われるものは

どういう状況で書かれたものだろうか？

(注) 伊規須太郎、詩集

「別れの日々／脆くはあるが暗くない」

(一九九八年三月二四日)

ユ キ エ

(4-110)

「スローグッバイ」が この映画のキーワード

介護経験者から見ると

少し違うようだが

一般向けにはやむを得まい

病識の無いのが特徴だし

殺してくれなんて言わないだろう

それにしても観客の少ないこと！

公開初日の土曜の午後

二十人の上はあまりいなかった

すぐ計算をする

二週間 毎日五回として

多く見積もっても三千人

五・六百万の人口圏に対して ○・○五パーセント

使命は重大だ！

(一九九八年三月二日)

哀 え

(5-146)

いつの間にか背中が曲がっている

少し歩くと腰が痛む

急に立ち上がると フラツク ヨロメク

足がよくシビレル

家じゅうアチコチに コブ付きロープを下げて

どこにいても グツとぶら下がって

立ち上がったたり 腰を伸ばしたり

先日はストープのそばで居眠りをして

ガードで禿頭にヤケドをした

体の衰えを感じざるを得ない

事故を起こさないように一生懸命

しかし 心は萎えていない

死ぬまでは生きている

頑張って自分の力で生きていく訳ではないから

この分なら ペンペンコロリ P P K かも知れない

そうでなくてもかまわない

(一九九八年四月二日)

カーテン

(5-162)

仕切りや目隠しのために

あちこちにカーテンを掛けていた

いまは 外見は二次

生活第一・機能第一と思って

全部取り払ってしまった

どこもどこもスッキリ サツパリ

金具をはずして

広い布を引きずりながら

たたんで・・・重ねて

巻いて・・・縛って

ああ片付いたと思ったとき

二人の生活も 巻き終わったような気がした

すべてが次第に遠のいてゆく・・・

(注) 妻泰子の入院(↓入園)から一年がたった

(一九九八年四月二二日)

雷 鳴

(5-166)

静かな日曜の午後だった

突然パリッと雷鳴 つづいて遠く近く二・三発
来るかな? と思っていると

やがて生温かい風と共に ザザーッと驟雨沛然

フト 胸騒ぎがした

何かあったんじゃないかなろうか?

お花見のあとの あの不穏・多動・・・・

今日はまだ行ってないが・・・と思つて壁を見ると

大きな彼女の写真は無言・・・・・・・・

笑っているような 穏やかなような？？

眼がウツロなような とまどっているような？？

「どうする？」 と言っているようなしないような？？

この人は太郎かな？ それとも・・・・・・・・

と考えているような いないような？？

大きな事故や事件にならなくても

アッ いま何かやったな と感じる事は間間ある

(注) 妻泰子は特別養護老人ホーム豊寿園に入園中

(一九九八年四月一二日)

物 音

(7-222)

何時間もここで仕事を続けていると
フッと昔に帰ったような気がする

そとの音か 隣家の物音か
カサツと小さな音がした

アツ 今この下に泰子がいるんじゃないだろうか？
ソファーに座って テレビを見ているかも知れない
と 思って 伝声管に耳を付けてみるが・・・

テレビの音は聞こえてこない

階下に降りてみると 真っ暗でシーンとしている

ソファも無いし 部屋もスツカリ模様替えされている
前の姿も思い出せなくなりつつある

薄暗い壁に大きな顔写真……ペラペラだが
フレームに入っていれば分らない……

「もうあなたが帰って来ても座る場所は無いんだよ」
と言いながら グッと来る……

でも最近はそれがいくらか遠のいた

(一九九八年四月二三日)

愛情アクセル

(8-232)

都市高速にもすっかり慣れた

紫川ジャンクションを過ぎて

門司に向かってアクセルを踏み込むとき

アッ この踏み込み度は

愛情に比例するかも知れないと思った

気持はすでに大里インターに飛んでいる

メーターは八十キロに近い

○時○分ごろには着くだろう

もう パジャマに着替えているかな

それとも………

○ノさんはどうしているかな？

彼女が「あなたはどなたですか？……」

と言うようになったら

どんな気持ちだろう………と考える

しかし思い煩う事はない

どっちが先か分からないではないか

ひたすら憐れみを祈るのみ

(一九九八年五月四日)

うなぎ

(8-282)

カバ焼きの長いパックが並んでいる

「特売」と書いてある

昔はよく買ったものだった

半分に切るとちょうどよかった

いま一人で食べるには多すぎるし

油のギラギラしているのも こまる

質の面からも量の面からも

食事は変わらざるを得ない

慣れて来たとも言えるし

偏って来たとも言える

しかし食事管理の基本は

(旧約聖書) 伝道の書一〇章にあると思っている

おいしいばかりが良い訳ではない

体にいいばかりが良い訳ではない

生きる目的が大切なのだ 味気無いと言うなかれ

(一九九八年五月五日)

車轡 立日

(8-284)

泰子が出て行ってから もう一年
早いものだ

「年々歳々花あい似たり年々歳々人同じからず」
と言うが

実は花も同じではない

同じ一人の人も日々に変わっている

変わるから介護も耐えられるし

変わるからこそ生きられる・・・とも言える

変らないものがあるから 変り得るのだ

万物は轟音と共に流れ去って行く

変らないのは 万物の創造者・統治者のみ

不変といっても静的な方ではない

活ける方 ダイナミックな方だ

私の心臓は 注油も分解掃除もした事がない

それなのに 二十億回以上も動き続けている

パワーの元はここにある

(一九九八年五月五日)

死亡通知

(9-320)

「旦那さんが亡くなったのに

奥さんに知らせん事があるか！」

と 常識人に頑張られると困るのです

家内は違った世界に生きています

私の死んだ事を知らせても

事の真相を理解できないで

戸惑うばかりでしょう

家に帰って 喪主が務まる訳じゃなし

みなさんに ご迷惑をかけるだけです

(隠そうというのじゃありません)

黙ってれば 自然に忘れるでしょう

「この頃 面会に来ないね」

と感ずるようであれば 上等ですが

それは無いと思います

これだけは みなさんに

よくよく お願いしておきます

いろいろお世話になりますが よろしくお願い致します

(一九九八年五月三〇日)

勝 負

(10-324)

ボケとイビキは 早いが勝ち という

彼女が元気なころ 私は身辺整理をしていた

六歳若い彼女が 多分残るだろうと思ったから

第一次(死亡)連絡先が二三箇所あった……

教会関係の書類 個人関係の書類 それぞれの保管場所

むつかしいものは 簡単な説明を付けた

定期購読物 継続している諸契約・援助など

やりかけの主な仕事・原稿など

OA機器・工具類・参考書籍などの処置案

末期医療に対する希望

遺体の処置について

特に祈るべきこと（人）……………などなど

ところが彼女が早かった 勝ったのかも知れない

私は負けてよかった……………もし逆だったら

彼女に大変な重荷を負わせるところだった

結婚式の誓約文に 愛・慰・敬・護・命がある

私はいま 第四・五を実行しつつある

（一九九八年六月一二日）

ゆめ

(12-442)

東の空はすっかり明るくなっていた

椅子に浅くかけて 頭を倒していると

スーッと 夢世界に落ちて行くのが分かった

アッ 泰子が家に帰っている！

どうしたの・・・と聞くと

何か答えた！ ものが言えるようになったのか？！

服装も 豊寿園で見るのとは違って

スッキリしているし 落ち着いている

前掛けをして 左を向いて何かしている

部屋の様子も いまとは違うが

昔のようでもない？ 全体に薄暗い……

うちのようにもあるし そうでないような気もする？

もう少し見ていたいな と目をこらしているうちに

フッと現実に帰った ごく短時間だったと思う

そうだ……ゆうべは重大な告知を受けたのだった

それが頭にこびり付いていたのかも知れない

何かやったのかな？ 行ってみよう 三日連続だが……

(一九九八年七月三〇日)

夏カゼ？

(13-468)

本当のところは何だったか分からない

倒れ込むようなダルサが二三日続いたあと

三日ばかり寝付いてしまった

ギシギシいう足・腰をふんばって

起き上がろうと うごめくように力を入れる

部分的に力を入れるのは 地雷原を歩くようだ

どこかでピクッとケイレンが始まると各所に伝播し

あい呼応して 全体のケイレン劇が始まる

通常のシビレ・ヒキツリとは違って

長い時は三十分も うならければならない
治まっても 筋肉痛がそうとう残っている
運転中に起こったら危ないな といつも思う

泣くと 冷気がからだに入ってくる

それだけでカゼを引きそうになる

いやカゼを引いているから入ってくるのかも知れない

低空飛行はゾツとするが……

機首を引き起こして上昇すると もう大丈夫

雲の晴れ間から 光が見えてくる

(一九九八年八月一七日)

工 作

(13-478)

あなたは弁理士ですか？ と聞かれたことがある
いや違います 何件か特許・実案を
書きはしましたが 昔のことです

しかし今でも名残はある アイディアノートである
閃いたアイディアは すべてこのノートに書く

元気なとき 工作は頭やすめだった
カラダもほぐれて スッキリした

どこにもないような物が　たくさんあった

一人暮らしのはじめころは

生活効率化のために　奮闘した

しかし　力が衰えてくると

仕事がザツになった

本質は変えられないが　見掛けを構わなくなった

ヒモ一本結ぶにも　もう一つ念入りにできなくなった

これでも何とかなるさ・・・と考えるようになった

体力よりも気力が問題だと思った

(一九九八年八月二〇日)

廃用性生人語

(13-482)

四・五日寝たり起きたりした・・・それもヤツトだった
這ってでも トイレに起きなければならぬし

ヨーグルトひと匙でも 口に入れなければならぬし

私の場合 一人暮らしは生存のための行動だ

極限状態になると それは一層厳しくなる

横井庄一さんや 小野田寛郎さんを思った事がある

四日目には 教会のつとめがあったが力が出なかった

五日目には 三ヶ所電話をしなければならなかった

はじめの二つは自分でも声がおかしかった
気のせいか舌がもつれたような感じがした
最後の電話をしているうちに 元に戻った

全く人と接触しなかった訳ではない

しかし たった三・四日でコトバがおかしくなるとは！

一週間寝ると 足が立たないと言うのもわかる

人間の体は 使い続けるように作られている！

もし出来なくなったら？ きっと道があるに違いない

(一九九八年八月二〇日)

おくれゼン

(14-516)

公園はすぐ目の前である……

あるドンヨリとした夕方

ツクツクボウシの声が聞こえて来た

オーシーツクツク オーシーツクツク

オイヨーシー オイヨーシー シー……

彼は 数年の地中生活を経て

短い命を生きるために

懸命に這い出して来た

配偶者を求めて 鳴き続けているが

もう九月六日・・・すこし遅かった

涼風が立って もう結婚の季節は終ろうとしている

彼は間に合わないかも知れない

ああ 彼も寂しいんだなあ と 同情する

しばらくすると すこし違った方向から

遠い鳴き声が聞こえて来た

彼は場所を変えたらしい

あと数日の命だ・・・ゆっくりしている暇はない

(一九九八年九月六日)

う た た ね

(15-616)

今朝は三時半に寝た

第一祈祷会は大変素晴らしいもので
Hさんを始め 大変喜んで帰られた
私も 疲れてはいたが嬉しかった

皆さんのお掃除に合わせて

車庫の掃除をした

車を有料のほうへ移したあと

花壇の蔦を刈り込んで集め

吹き溜まっている枯れ葉を掃き集めた

終わって扇風機に当たっていると

いつの間にか ウトウトした

ア・・・泰子が帰って来て 何かモノを言った

しかし はっきり聞き取れなかった

失語症のため声が出なかったのかも知れない

「今から門司に行こうと思っていたんだ」

と言おうとすると 彼女の姿はもう無かった

話そうと思っても 昨年四月以降の話は通じない

(一九九八年一〇月一日)

去來 子丁

(15-618)

泰子はもう帰って来ない

帰って来ても ここで生活できない

帰って来ても いる所がない

帰って来ても 元の彼女ではない

彼女は遠い遠い所にいる

新門司まで二五キロという意味ではない

住んでいる世界が 異なってしまった

ある人は異星人と言った 何光年さきか分からない

かつてユキエという映画があった

キーワードは Slow Good-bye だった

私の詩集の題は「別れの日々」といい

副題は〈脆くはあるが暗くない〉である

「別れの日々」がどこまで過ぎているかは分からない

介護専門家は 「若年性のガンが早く進行するように

若く始まった痴呆は 進行が早いかも知れない

伊規須さん（泰子）は急速にレベルが下がっている」と言う

私の知る限り 泰子より三歳下の人が一人いる

（一九九八年一〇月一日）

シャッター

(16-632)

シャッターはひとまず光線の侵入をさえぎっておいてある時間これを許すものである

「許可」の定義(六一〇「道路使用」参照)と同じだと思う
その瞬間 映像は固定される・・・・・・・・・・
となれば いずれは皆さんに見られるだろう

それなら・・・・・・・・・・

この散らかしようはどうだろう？

この炊事場まわりはどうだろう？

この冷蔵庫の中はどうだろうか？

この洗濯物の山はどうだろうか

この本の山はどうだろうか？

文章起こしフロッピーの山は？

オーディオテープの山は？

ハミリビデオの山は？

やり掛けの仕事は？

この詩草は？ この事務書類は？

この契約書は？ この預金通帳は？

事後処理の意思表示書は？・・・・・・果てしがない！

このままでもいいだろうか？？？？？？？？

(一九九八年一〇月六日)

し ぶ と さ

(16-646)

しぶとくなくては生きられない

絶えず 私の心にクサビを打ち込もうとする力が働く

立ち上がろうとすると 寄ってたかって

ブラ下がろうとするオモリがある

気力を燃え上がらせようとする

冷水をブツカケルものがある

「脆くはあるが暗くない」と言っていたが
ヒビは亀裂となり 割れ目が次第に開いて来た
それを揺すったりコネたりすると
パリリと欠けるかも知れない……しかし

聖徒パウロは言った……

四方から患難を受けても窮しない

途方に暮れても行き詰まらない

迫害に会っても見捨てられない

倒されても滅びない……

彼はモデルだ 彼以上になれるように備えられている

(一九九八年一〇月一二日)

盈 虚

(16-654)

盈は(月の)満ちること 虚は(月の)無いことである

月の満ち欠けは二九・五日ごとに繰り返されており

毎正午現在の月齡が日にち単位で現される

つまり 月齡は時々刻々変化しているものであり

月齡一五・〇(満月・望)は厳密に言えば

一瞬ということになる

今日の月齡は二三・五ぐらいだったと思う

私が月を見て思うことは……

泰子がいなくなった一九九七年四月一九日から

何回 月が満ち欠けしたか ということである

早いものです。に五四七日 月は一八回盈虚を繰り返した

大江千里は

「月見れば千々に物こそかなしけれ

わが身ひとつの秋にはあらねど」……と歌ったが

私には 泰子もたらした私だけの秋がある

この秋は 月の形と同じように夜ごとに細くなって行くが

すぐあと 逆向きに現れて太くなって行く???

(一九九八年一〇月一三日)

ひとり口

(16-662)

コトワザに「ひとり口は食えぬがふたり口は食える」
というのがある……逆の言い方もある

結婚を勧めるときなどに よく言われることである

私は長い間 ふたり口だったが

十八ヶ月前からひとり口になった

すると生活の質は低下しながら 経費は減らない

コトワザ通りになった

広い意味で言えば これも介護経費かと思う

ふたり口のおわり頃も

目に見えない介護費用が少なくなかった

心労という無形の費用も大きかった

それもこれも 次第に遠のきつつある

私は一息ついたが

その分 全部老人ホームで負って頂いている

ユメユメ忘れてはならないと思う

面会に行くとき いつも玄関で頭を下げる

(一九九八年一〇月一三日)

碇鏡 山口

(16-664)

一人暮らしになり 泰子は再び帰らないと分かってから
家の中を懸命に整理し 改造に努めた
少しでも労力を減らし 効率的に生活するためである

小作業もあつたが 凄い大作業もあつた

こんなに重く大きな物をどうやって一人で動かしたか
いま振り返って 不思議に思ったり

危険にゾツとするものもある

板張りのフロアの南東側に

大きなハンガーコーナーを作り 衣服を沢山吊したので

泰子の鏡台は 一番奥になってしまった

何かの整理のついでに 久し振りに隅々を掃除しようと

鏡台に近付くと 床に白い粉が降り積もっていた

引き出しの左下端が すっかり虫に食われて

皮ばかりになっている！

わずか十八ヶ月のあいだに

こんなにも廃墟になってと思うと・・・グッと来る

私の心も崩れて行くような気がしたが・・・持ち直した

(一九九八年一〇月一三日)

ワックス

(17-670)

教会には一部に母子室があつて、タタミが敷いてあるが、住宅部分には、タタミが一枚も無い。

はじめは月に一回、ワックスがけをしていた。

リンレイ勤めの教会員がいて、そこから液を買っていた。教会に合せて、住宅もワックスがけをする事が多かった。壁に、日付けを記入する表を貼っていた。

泰子が具合が悪くなつてからは

次第に間隔が遠くなって 床のツヤが落ちて来た
このところ少なくとも二年はかけていない

先日一メートル角の タタミマットを買った

二枚敷くと 横になれる

天井からはコブ付きロープが下がっていて

起き上がる時につかまると 大変好都合である

フト低い位置からフロアを見ると

キラキラと光って美しい!

泰子はいなくなったが まだ輝きが残っている!

しばらく見詰めて 泰子を思った

(一九九八年一〇月二三日)

静かな大海の響きのようだ……………

胎児が母の心音を聞きながら

羊水の中で暮らすように……………

深海魚が海底でゆるやかに動くように……………

暗いけれども 不安はない

フト機械的な音の中に 命の鼓動を感じた

動き始めたものは 止まる時が来る

しかし それも平穩のうちにあるだろう

始めの喜び 終わりの安心・平穩

何とフトコロの広い 大きな手だろうか！

(一九九八年一〇月一三日)

ペットロス

(17-682)

動物霊園が大繁盛だという

ペットロスとは ペットを失った悲しみのこと
家族同様のペットに対して 正常な反応とされる
通常は 数ヶ月から一年ほどで乗り越えられる
墓参の賑わいは 別れの確認を
積み重ねているのだという

「別れの確認の積み重ね」という言葉が

私の心にズキン！ と響いた

本当はみんなそうなのだが……

泰子はいま目に見える形で 緩慢死の道程にある

某映画監督がスローグッバイと言ったように

これをワイフロスと言ったら 不謹慎だろうか

私たちは死ぬ事を不幸とは思っていない

それは人の道であり むしろ死ななかつたら大変である

他人の前でこんな話は勿論慎むが

私たちの間で 死ぬ事は何でもない話題である

男女の寿命差は七年 私たち夫婦の年齢差は六年である

(一九九八年一〇月一三日)

すもう

(19-772)

すもう放送は痴呆者にとって よい番組だ

※スジを追う必要がない

※場面（取組み）が独立している

※短時間で決着がつく

※激しい動きがあり 山場がある

※意外性がある

※勝負がはっきり見える

※喚声上がる 上げたくなる

※ヒイキの力士なじみの顔で想起を促される e t c

夕方 家にいると ホームのソファァーが目に見えかぶ

一・二の人を除いて ほとんどスモウを見ている

これと同じ番組を この時間に！

あべのなかまろ
安倍仲麿は

あま「天の原ふりさけ見れば春日なる三笠の山に出でし月かも」
と歌った 「し」は時の助動詞で過去・想起を現すが

過去は五十年前とは限らない 二時間前に東方遙か奈良で
出た月と知っていたかも知れない

戸畑と豊寿園に時間差はない リアルタイムの全国放送だ

(一九九八年一月一四日)

麻痺？

(19-794)

アッ 左手の様子がおかしい！ 力を入れようとしても入らない！ 目的の場所へ手先を持って行けない！

数年前の橈骨神経麻痺（垂れ手）の経験がよみがえる

ある宇宙飛行士は 指を鼻に持って行こうとして

目の中に突っ込んでしまったが そんな感じである

「イヨイヨ来たな！」・・・と思った

服を脱ぐには ある種の準備と要領が要る

予めベルトを抜いたり ボタンを外したりする

列車が別の線路に移ろうとすれば ガタガタッと
音がしたり 揺れたりするのは仕方がない

生まれた時に着せられた肉体を脱ぐんだから

ふだんと違う事もなければなるまい・・・それにしても

肉体を宿とした期間はほんの短いものだった

誕生の時「おめでとう」と喜ばれたように

今度は「ご苦労さん」と喜び迎えられる

最高の時である・・・・・・パスポートを確認する

死に行く者自身による体験手記が出来ないものだろうか？

(一九九八年一月一六日)

セ イ

(22-884)

泰子にとって私が忘夫（亡夫）であることがハッキリした
それを知ったとき 体が崩れそうに力が抜けてしまった
家に帰っても こみあげる涙をこらえる事ができず
天井から下がっているロープに縋って しばらく泣いた

ラジオが何か歌っているが むなし

大里の給食弁当はそこにあるが 食べる気がしない

当面クリスマスの準備を急がなければならない

新年聖会の準備も継続中だし　その後の事もある

説教テープの文章化は　次々に入力が出来上がってくる

詩作は遊びや慰めではない

戦いの記録であり　発信のデータベースでもある

これに頭を絞るから　崩れやすい心が支えられる

しかし　今は何をやる気力も無くなってしまった

ある人は言った「家内が参ったのはまさにソレでした」

「何をいくらしてもセイが無い　と行っていました」と

しかし私がドン底にいたのは　しばらくだった

谷深ければ山高しである・・・深山幽谷は素晴らしい

(一九九八年一二月一六日)

限 界

(22-904)

いろんな所から連絡が入る 電話を受けたりかけたり

書類・郵便物が来る 礼状や手紙を書く

お金を払い込む あるいは受けとりに行く

予定を打ち合わせる カレンダーに書き込む

○○の準備をする そのあとの□□もある

荷物を受けとりに行く

△△ネットワークの窓口になって欲しいと依頼される

関係者と相談する あるいは勧誘する

集会の準備をする（ハード・ソフト） あと始末もある

集会記録（入力済みフロップピー）は山積している

校正・印刷・製本して公にしたいが時間も気力もない

最低限の家事をする 工夫をする・工作をする

誰よりも多く給食を受けているから一部配達もしたい

老人ホームに行くとき 大里西部公民館に寄って弁当を貰う

片付けで参るのは 泰子の遺品？を始末するときである

見るのがツライ見たくない触れたくない・動けなくなる

とってバツサリ捨てる訳にも行かない

そのつど立ち直りはするが 次第に限界に近付いている？

（一九九八年一二月二四日）

疲労破壊

(26-1072)

疲労破壊は重大事故を起こす

ジャンボ機の後部隔壁が疲労破壊して

尾翼や操縦装置を吹き飛ばし五百人が亡くなった事があった

原子力発電所の細管が破断した例は各所で聞く

それは 限界に達したとき突如として起こるから恐ろしい

私は元気だと言われるが 内部では疲労が進んでいるだろう

肉体よりも精神的疲労の方が大きく深刻かも知れない

限界に達したときは 一瞬にして破断するだろう

しかし恐れる事はない

この体はいずれ脱ぎ捨てなければならぬものだ

疲労試験は時間も金もかかる

一千万回にも及ぶテストをするからだ

それも本体を直接テストする訳ではない

あくまで類推である

人は材料ではない「細く長く太く短く」なんて言われるが
太くても長い事だってあるかも知れない
どうも その方が本当らしい??

(一九九九年一月三一日)

夜中にS寮母さんから電話があった

都市高速(道路)は二四時間開いていた 有り難い!

閑散とした道路を急ぐ 園(病院?)に着くと

泰子の息はもうなかった 心筋梗塞らしい

戸惑いの表情はなく 真っ直ぐ正面を向いて目を閉じていた

枕がなくて窮屈そうに首を曲げていた彼女を思い出す

真っ白い前髪をなでる 彼女の髪は堅い

左目は人工水晶体を入れていた

鼻の頭にポツポツと毛穴が見える

口の回りにはウツスラと髭が生えていた

彼女の顔は毛深かった

唇を少し開くと 色の変った義歯が見えた

ある歯科で材料を間違えたのだった

別れの言葉は ずっと前から考えていた

「ヤッコありがとうありがとう すまなかったね」

「長いことごくろうさん さようなら」と言った

園の方々が回りを囲んでいた Sさんのお顔が見えた

(一九九九年三月二三日)

片 思 い

(34-1382)

「磯のアワビの片思い・一方だけから恋い慕うこと」とある
片思いには第一期と第二期があるかも知れない

私達の第一期が片思いだったか思われなかったか分らないが
第二期の今は 私から言うのと片思いであり

彼女から言えば片忘れである・・・・・・思いはもう無い

私の片思いは彼女に通じず 彼女は夢世界を浮遊し

彼女の片忘れは 私を生殺しにして夢を見させる

最近でも不思議な夢を少なからず見るがメモの段階を出ない

空港で飛行機を見送るとき

次第に小さくなった機影がやがて雲間に隠れるように

私は彼女を仰いでいるが彼女は機上で私を見失ってしまった

最近の商用航空機は 秒速にして二六〇メートルくらい

私たちの別れは緩慢なようだが 文字通り飛ぶように早い！

もし双方が同じ速度で反対向きに飛んでいるとすれば

秒速約五〇〇メートル 期間は丸二年を過ぎたから

三千万キロは離れたことになる！

(一九九九年四月二〇日)

慎 重

(36-1480)

長い時間イスに座り続け

リクライニングでウトウトしたりすると

立ち上がったときに足がフラツク

階段の踊り場に立って下を見ると「危ないな」と思う

数年前にこの建物が建つとき 片側だけテスリを付けた

「まだまだつかまらんぞ」と言う

棟梁は「へへへ」と笑った

彼は私より若かったのに

間もなく直腸癌で死んでしまった

しばらくして私は 自力で反対側にもテスリを付けた

今はしっかり両方をつかまえて昇降する・・・なぜなら

滑り落ちても誰もいないからだ

外部（車庫の入り口）には安否発信盤があるから

死んだら翌日には分るようになってる

しかし中で倒れて呻いていても そこまでは分らない

慎重にならざるを得ない

適当な緊張は いいことかも知れない

豊寿園に思いをはせるが 先方からの電波は途絶えている

（一九九九年五月二四日）

空そら

耳みみ

(37-1514)

ドンヨリと曇った初夏の夕暮れ シーンとした中に突然
ピコピコピコッとチャイムが鳴った(ような気がした)
すぐ電光時計を見る午後七時二八分／一九九九年六月三日

「ン？」普通よりちょっと短いかな?と思ったが 同時に

「泰子だ!」と直感した・・・なぜか分らない

玄関を開けてみるが誰もいない うちの車庫もあいているが
隣の車庫も二・三台を残して出払いガランとしている

ズーッと見渡せる 広々とした光景・・・

遠くにシベリアンハスキー犬のラン嬢が散歩を待っている

「ウーン」何かあったに違いない

泰子が園で何かやらかしたのではないか？

こんど行ったら寮母さんに聞いてみよう

説明できないから「虫の知らせ」なんて言うが

予感させる何物かが確かにあるようである

人が目の前にいたとしても 曰く言いがたいものがあり
それがあっちに通じたり こっちにピッと分ったりする
人の思いとは不思議なものであり 強いものだと思う

(一九九九年六月三日)

淡　　夢

(37-1516)

泰子が着飾っている　どうやってスーツまで着たんだろう
私の目には　それほどおかしいように見えなかった
たしかグレーか暗青系の服だった

カツカツカツと靴音　しかし靴の色は黄いろっぽい
服と合わないのでは？と思った　でも十年は若返っている！

交際はどうしても保母（保育所長）や役所の仲間となる
私も人の名前をだいぶ覚えた　先輩の中にはボケて
老人ホームに入った人もあった　今になってよく分る

自分が引き上げられたように 後輩を育てて引き上げる
部下の考課表？を書きながら 自分も評価されていた

今日はどこかで食べたり飲んだりしているんだろう
話もできないでどんな顔をして座っているんだろう
隣りの人がおかしいと思わないんだろうか？

どうやって家まで帰ってくるんだろう？

私の顔を見て誰と思うんだろう？・・・・・・・・
フッと現実に帰る・・・・・・・・今日も園に行かなかった
ちょうど配膳車がゴロゴロと入ってくる時間である

ご迷惑をかけないで とにかく全部おなかに収めてほしい

(一九九九年六月五日)

復 活

(38-1552)

泰子の進行は早い ストンストンと階段を下るようだ
しかも踏み面が水平ではない・・・・・・・・・・・・・・・・
私の気力も 同じような形で落ちて行くような気がする

「女は強いね 男は三年だってよ」と誰かが言ったのを
初めは「そんなこと・・・」と強気で否定していたが
どうも当たっているのではないかと思う 時々気力が衰え
いろいろな不調が現れる 足腰の衰弱・痛み 視力の異常
起動抵抗の増大(なかなか動き出せない) などなど

一旦動きだすと持久力はまだまだある……それは
どうしても処理しなければならぬ事も多いし

すぐやるほうがむしろ負担が少ないからだ

それだけに 精も根も尽き果てるということになりやすい
しかしその時 新しい力が沸き上がる！

命の力とは何と素晴らしいものだろうか！

「自然良能」とか「自然治癒力」などと言うのが

小物一つ動かすにも意思と知恵と力（エネルギー）が要る

啄木は 手を見て貧を嘆いたが 私は手を見て歓喜する！

ダビデは月・星を見て「主の名は地に遍あまねし！」と歌った

（一九九九年六月一九日）

情報耐力

(38-1566)

わが家の郵便受けは 建物の壁を切って内部に作った特注幅五七センチ×奥行二五センチ×深さ五五センチという大箱車庫をちょっと入った所にあるから雨はかからないフェンスが閉まっても 手を伸ばせば届く位置にある箱が深いので底のほうは暗い そこで反射鏡が設置してある

連日たくさんさんの郵便物がそれに入る 開口部が大きいから 回覧板など かなり大きな物でも収まってしまう
この頃は(郵便ではない) 宅配の文書なども多い

封を切らないまま　ゴミ箱行きのものもあるし

大事にとっておいて一年後に使わねばならないもの
前年の記録と照合しなければならぬもの　色々である

こんな交通整理をしながら　フツと恐ろしくなった

この判断が出来なくなったらどうなるだろうか？

いまは八〇〇以上にも及ぶ袋ファイルを中心として
曲がりなりにも整理が出来ているが??????

考えても何も決められはしない　「明日の事は明日自身が
思い煩う」とある　これはケ・セラ・セラとは違う

(一九九九年六月二一日)

勿忽 然

(42-1752)

教会の準備をしながら 会堂内を見渡す

韓国から輸入した講壇の教卓がいい色に馴染んで来た

電子オルガンは「主」のいないまま隅に押しやられている

あの日 忽然と消えてしまった泰子！

この二七ヶ月は私たちにとって何だったんだろう？

いま私と彼女は互いに異界に住む身となってしまった

P (a, b) と Q (c, d) の間の距離は

$\sqrt{(c \sim a)^2 + (d \sim b)^2}$ で現されるが

私たちの間の距離は 何と現されるだろうか？

江頭慶子さんは昨年十一月七日に癌で亡くなった

その日 夫「江藤淳さん」も生きる力を失ったらしい

それ以後 江藤さんは病気を繰り返し……最後は

「自ら形骸を断ず」と遺書して 忽然と消えた

夫人が亡くなって 二六六日目だった

「忽」と言っても 私の場合はそれが甚だ長く

いまも継続中である すでに八四〇日ぐらいと思うが

いちいち数えようとも思わない 終点は分からないからだ

統計的に言えば 私が数えられるほうが自然である

(一九九九年八月二日)

処 分

(44-1822)

泰子は物持ちだった 恐らく私の数倍の衣類があっただろう
専用の洋服ダンスが三つ 和ダンス三つ（引き出し）にも
彼女の衣類が詰まっていた そのほかにキャスター付きの
大型衣装ケースが四・五個 古い茶箱などもあった

どう考えても 始めて見るような物が多かった

納戸の棚に巻き尺を貼り 次々ウエストを押し当ててみると
「こんなに細かったか」と驚くものばかり

在宅末期には適量という観念がなくなり どんどん肥満した

入院（その後↓入園）直前に作ったスーツでさえも
いま十センチぐらい開いている！ 昔々の夢のまた夢！

人は記憶を失う事によって 一切の所有を失う

それは火災や盗難よりも徹底的で 思い出す事もない

こうして彼女は 再び身に着ける事の出来ない物を

記憶の上でも 完全に失った・・・・・・そこで

私の責任において処分しなければならなくなった

気は焦るが 捨てる気力は日に日に衰えて行く

処分もツライが いつまでも見るのはなおツライ

縫合した傷が癒えたとき 抜糸は一気にやってほしい

（一九九九年八月三〇日）

寒 暖

(44-1830)

立秋とは名ばかり と思っているうちに

処暑を過ぎると流石に涼風を感じる

夜ふかしの私は 明け方近い夜風にゾクッとすることがある

明日はもう白露 暑いといっても窓を開ければ充分だ

泰子と別れてから三度目の秋を迎えようとしている

月の満ち欠けも もう数えなくなった 家の中でも

泰子の残像は次第に薄れてゆく 大部分の衣類も思い切って

処分した 虫に食われた鏡台は近いうちに解体するつもりだ

彼女の中に夫はもうないが 私の中では消えることはない
しかし動画が次第に静止画に変わって行く感じがする

勿論 豊寿園に行けば現実の動画を見ることはできるが
それが家に残された泰子像と同じかどうか分からない
あの暖気はどこへ行ってしまったのだろうか？

あちこちからの引く手あまた（講演依頼）は変わらないが
最近色々な筋から取材の依頼を受ける

理解ある大学教授もあれば 若い新聞記者もある
健全世界の住人に痴呆世界を説明するのは骨が折れる

（一九九九年八月三一日）

夢の国

(45-1854)

この世でもない あの世界でもない

よみ黄泉の国でもない 夢の国に行きたい

そこに泰子が住んでいるからだ

「生ける屍しかばね」という言葉があった・・・イヤ今でもある

生きているとは名ばかりで 実は死んでいるということ

あるドクターは 重度の痴呆者を「動く屍しかばね」と呼び

彼の小説の中で「生命終結行為」がクローズアップされた

はじめはショックで 吐き気がした

ある人は「ああいう人って人格あるのかね」と言った

そう言った人も それを聞いて憤慨した人も

みんなこの世に住んでいる………

しかし 夢の国に住んでいる人もいるのだ

頭の中が虚夢（虚無ではない）状態になると

夢世界がサッと入り込んで来て その人は

空々漠々たる夢世界に生きることになる

そのひろがり果てしなく広い

（一九九九年九月二七日）

三年というと 何となく一区切りついたような気がする

桃・栗三年 柿八年 梅は酸い酸い十八年

枇杷は九年でなりかねる・・・・・・・・・・などと言うが

これは実を結ぶまでの話・・・・・・・・・・

「女は強いが男は三年」なんていうのもあるらしい

こちらは 配偶者を失ったあとの余命を言ったもの

平均寿命には性差があるし 夫婦の年齢差が数歳あれば

妻が十数年残る計算になる これを当然のように「女は強い」

などと言っては申し訳ない

一方 男が残った場合は 極端に短いということらしい
全く根拠のない話でもなさそうな気がして来た

しかし一直線ということはない 常に支えられるからだ

泰子も動きが少なくなつて 一段とレベルが下がってきた

園も三年になり 事務室にもいろいろ変動があつた

寮母さん看護婦さんも入れ替わつた

入所者についても異動や死亡の情報が聞こえてくる

劉廷芝「年年歳歳花相似たり 歳歳年年人同じからず」

(一九九九年二月六日)

名 入 れ

(46-1910)

園内は空調完備で暖かいのに 泰子は寒がるらしい
ものは言わないが 身を縮めているので

さわってみると 手足が冷たい 寮母さんは心配して

「(私の) 母の着ないものを持ってきました

泰子さんに着せてもいいでしょうか？」と言われる

もちろん感謝してOKする

泰子の衣料は大部分処分したが ウワッパリのようなのが
いくつか残っていた 「あっこれもこれも使えます

これなんかよそ行きに着られます」と言われるので

私が（アイロンで加熱・圧着する）ネームテープを付け

そのフチを糸でカガル・・・回転乾燥機でグルグル回すと
圧着しただけでは剥がれるからだ

裁縫だって平気 女性のできる事ができない筈はない

これまでもずいぶん名入れをしてきたので慣れている

フト幼稚園児をかかえた母親のような気がした

泰子は幼稚園児以上（以下？）に幼くなっている

これを着ても自分の物だったとは分らない

（一九九九年二月六日）

たくまじさ

(46-1914)

物音一つしない 散らかった 暗い部屋で
たった一人 冷たい弁当を食べていても
「ああ わびしい」なんて言っていたら
生きられない・・・・・・・・

イヤ 決してそんなことは言わない
なぜなら 私は一人ではないし
自分が頑張って

生きている訳ではないから・・・・・・・・

泰子がいなくなつて この三年
ずいぶんたくましくなつたと思う

困難にあつたことは

私にとってよい事だつた

「痴呆も悪くないな」としみじみ思う

しかし・・・・・・・・しかし・・・・・・・・

限りある力は 波をうちながら尽きようとしている

一直線に低くなるばかりではないが・・・・・・・・

(一九九九年二月八日)

泣き踊り

(48-1972)

一月二七日の明け方 この地方では珍しいドカ雪が降った
庇からせり出している雪が ポタポタ・・・ポタ・・・
時にはドサツ・・・と落ちるのを聞いていると
ラジオから軽やかな音楽が流れ出した

曲に合わせて腰を上下させ 肘を振りながら踊りだす
散らかっているが 踊るぐらいの余地はある

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪ ウキウキして体も心も軽い

と突然ドッと涙が溢れ出した 泣きながら踊り続ける

上を向く間もなく ポタリポタリと床が濡れる
まるで 庇から落ちる雨垂れと合奏するように

いつの間にか美しい女性の声でドイツ語講座が始まる
ピッピッピッポーン 時報と共に中国語ニュース
そのあとはハングルニュースと続く……………

私の気持ちはすっかり立ち直って
いまこの詩を書いている……………
すっかり日が暮れたのに

北側の屋根からは 時々雪がドサツと落ちて笹を折る

(二〇〇〇年一月二七日)

やめて！

(48-1994)

(ラジオの歌声)

月いつのことだか思い出してごらん

月あんなことこんなことあったでしょう

月嬉しかったこと面白かったこと

月いつになっても忘れない……………

(わたし)

やめてくれ！　しかしスイッチは切らなかった
涙をこらえながら立ちつくす……奇妙なひとときだった

ちょっと落ち着いてから 過剰反応だったかなと思ひ直す

むかし吃音(言語障害)者のことを「どもり」と言った

公衆電話ボックスに「受話器をかけるとお金はもどります」
と書いてあるのを見て ある吃音者は

「ワァッ」と言つて逃げ帰った

「もどり」が「どもり」に見えたのである

老人ホームの音楽クラブで

「♪夢はいまもめぐりて 忘れられぬふるさと」

と歌うとき いつもシヨッパイ思ひに目が潤う

(二〇〇〇年二月一日)

視 力

(49-2034)

散歩中に星を仰ぐのは 随分久しぶりのような気がする
泰子と一緒にあった頃は よく星の話をした

定例コースをほぼ回りおえて フト南の空を仰ぐと
シリウスらしい星が見えた もしそうなら全天で最も明るい
マイナス一・五等星である おおいぬ座の南中はたしか
二月二十六日ごろ (於、東京) だった

北九州と東京の経度差一〇度を時間にすれば約四〇分
ラジオ (第二) はいま積分の講義をしているから

おそらく八時五〇分ごろだろう

この道路は一九二―三度（真南から西へ一二―三度）だからあの星は南中している！　するとシリウスに間違いない

それにしても　すぐ上にある善の三ツ星が見えない

左右のリゲルとベテルギウスはうっすらと見えるが

ずーっと上を向いてアルデバランの位置には何も見えない

交通事故のあと視力が落ちたのかも知れない

二・三時間後　こんどはアルデバランは見えたが

リゲルとベテルギウスは見えなかった　雲もかかっているが

視力も衰えたようだ　老化か事故の後遺症か？

（二〇〇〇年二月二四日）

片^{かた}惚^ほれ

(49-2046)

○○家族会の仲間には いろいろな人がいる

妻を介護する男性は少なく 娘が母を介護する例が

多いように思われる・・・そういう中で

姑を介護する某婦人と話す機会があった

いま特養で寝たきり状態 詳しい話はしたがらないが

随分悩んで来たらしい 「こんなに長くおばあちゃんが

生きるとは思わなかった」と言う

夫は列車で一時間ほどの所へ単身赴任しており

週末ごとに帰宅する 介護に協力しない訳ではないが

どうも夫婦の間がシックリしていない

私は例のごとく「夫婦仲良くしてストレスをためないように」と言うが 眉をひそめ首を振り「もう駄目です！」と

溜め息まじり 「イヤイヤ思っていると危ない 痴呆になるかも知れない」と言うが 首を振るばかり……

ひるがえってわが家は 泰子が痴呆になってから

夫婦の情はむしろ熱くなった 惚れ直したと言えるかも

知れない しかし泰子はもう感じないし 私を認識しない

「片惚れ」かも知れない 「おくれてきた片惚れ」である

(二〇〇〇年二月二四日)

減 速

(52-2152)

「としをとると一年が早い」と言う

たしかに 若い時は 未知の出来事に遭遇して

ドキドキハラハラしながらだから 長く感じる訳である

しかし年を重ねるにつれて 道はだいたい分かってくる

新しい事柄が次々に現れては消えてゆくようだが

「新しいと言われるものがあるか それは我々の前にあった

世々にすでにあったものである」と旧約の知者は言った

つまり 同じ事の繰り返しに過ぎないというのである

通ないなれた道を 一年また一年スーイスイと過ぎてゆく

私の年月も それまでは人並みに加速していたと思う

ところが一九九七年 そのカーブがガクンと折れ曲がった

泰子がいなくなつてからの この三(四)年

年月の経つのが急に遅くなつたのである

一年の内容が重く濃くなつたとも言える

すでに 人生十年ぐらい儲けたのではないか？

時間は決して同じ速度で流れているものではない

これは個々人の生き方にもよるから不思議である

(二〇〇〇年五月一八日)

いつまで？

(53-2192)

今月も施設利用料の請求が来た 措置時代の負担金に比べて三分の一以下になると思っていたら 契約(利用料)よりさらに十数パーセント安い! ほとんど四分の一に近い!

これから毎月繰り返すことなので 一覧表を作った

「支払月」「口座入金額」「請求・支払額」「残高」である
あらかじめ「支払月」を書いておこうと五月六月七月八月と
書いているうちに「どこまでこの欄が埋まるだろうか」と
考えた……つまり書くことがなくなるか?

書く人がいなくなるか？　こんな事を言っても

寂しがったり暗くなったりはしない　死ぬまでは生きている！

最近　私の気力・体力の衰えに反比例して

お呼びが掛かる事がむしろ増えている

予定が入ると「それまでは倒れられない」と励みになるが
気力には限界がある　先細りになるのが見えるように思う

「介護体験者は貴重な社会資源です大いに活用して下さい」
とお願ひしているが　「早くしないと使えなくなりそうですよ」
とも訴えたい

(二〇〇〇年六月一六日)

残 像

(53-2204)

泰子の姿が次第に薄れてゆく

【拡がりについて】

立体 ↓ 平面 ↓ 上下が縮まる ↓

左右が縮まる ↓ 点となる ↓

点が小さくなる ↓ やがて消滅！

【カラーについて】

総天然色 ↓ 全体がセピア色に ↓

薄茶色 ↓ 次第に薄くなる ↓

霞んでくる ↓ 色が消える ↓

次第に暗くなる ↓ 暗黒となる！

【動きについて】

活発な動き ↓ 緩慢となり ↓

時々止まる ↓ 時々動く ↓

動かなくなる ↓ 見る者を吸引する（ブラックホール）

最後に残るのはブラックホールのみ 宇宙と同じか？

【音について】

すでに完全な静寂となっている

（二〇〇〇年八月二日）

お風呂に入ろうとすると 揃えてある肌着が冬物だった
広げてよく見たが やっぱり袖が長い

目を上げると 泰子が座って衣類整理をしていた

分厚い毛糸のセーターを着て 首までボタンを掛けている

「あんた これ・・・」と言おうとして 息を飲んだ

暗く沈んで困ったような表情 少しやせて鼻の横にホクロ！

アレッ ホクロなんかあったかな？

ぐっと身を乗り出して何度も触ってみたが

しっかりした手応えがあった

室内にはなぜか衣類がいっばいに散らかっていた

ほかに二・三 人がいるようだったが誰かわからない

彼女は終始無言・・・・どうしようかと思っっているうちに
目が覚めた クーラーを止めたあと室温が少し上がっていた
時計は午前二時一五分・・・・夢を見たのは久し振りだった
この時間 泰子が何かやったような気がする

「ふじ」のお部屋の前の 暗い廊下を思い浮かべる

泰子は奥のベッドに寝ている 今夜の夜勤はどなただろうか？

(二〇〇〇年八月四日)

単独航海

(53-2210)

Kさん 七〇歳 ヨットマン

三五三日かけて 無寄港単独世界一周をやりとげた

最も気をつけたのは

①ケガ

②ギックリ腰

③転落事故

だったという

①②は何とかなっても

③は 一人で這い上がれないからオシマイだという

私は聞いていて思った

私も同じだ すでに三周半した

二階の踊り場に立つと いつも

「ああ危ないな」と思うが

これとは違った転落もある

①ケガをしようと思ってる人はいない

②私にはギックリ腰よりひどい？けいれん痙攣がある

用心の上にも用心しなければ

(二〇〇〇年八月七日)

差し入れ

(53-2212)

一人暮らしになって 色々な方から

(食物の) 差し入れをいただく

その物もちろん有り難いが 心がもっと嬉しい

「家族が多いので たくさん作りますから」と言われる

それは事実かも知れないが どんなにたくさん作っても

「伊規須さんに あげよう」という

強い意志がなければ できることではない

それは 私を家族の一員と考えてくださることだ 感謝!

容器のやりくりだって 相当に頭を使うに違いない

カロリーも コレステロールも 塩分濃度も考えられている
に違いない 堅いものが噛めないことは 皆さんご存じだ

外出の多い私のために izzごろ食べるか考えて
冷却剤を入れたり 温め直したりされるといふ

他の人の容器と混じらないようにと

ご自分の名前を書いて下さる方もある

それぞれの容器の置き場所を決めているが 混乱することもある
頂くにも頭が要る……嬉しい悩みである

(二〇〇〇年八月七日)

第五章

生き方

障害を持ったら

(1-4)

障害を持ったら……

「障害」という字が 私のがわに立つようになった

障害を持ったら……

創造のすばらしさを知った

障害を持ったら……

工夫することを覚えた

障害を持ったら・・・

人間のすごさを知った

障害を持ったら・・・

「これも悪くないな」と思った

(注) 一九九四年、左腕橈骨神経麻痺のため「垂れ手」と
なった

(一九九四年一二月)

すぐそこ

(5-148)

数代前の親戚から 電話がかかって来た

山の木を切らせてほしいと言う

話はたちまち一世紀さかのぼる

親戚一覽図をひろげて見る

父方の高祖父 (生没年不詳)

母方の高祖父 (生没年不詳)

同 曾祖父 (天保七年)

同 曾祖父 (文政四年)

同 祖父 (明治元年)

同 祖父 (安政三年)

同 父 (明治二三年)

同 母 (明治二八年)

とあった

高祖父はいずれも一八世紀の人であろう

過ぎ去った二百年は　すぐそこだったと思う
ならば五百年・千年前もそう遠くはない

このあと　百年・二百年もすぐそこであろう

歴史上の出来ごと　と思っていた事が

グッと身近かになった

と同時に　自分の存在が重くなった

(一九九八年四月一日)

分かり△ロウ

(7-204)

都心の回転寿司屋の店長

彼はネパール人だ

違った世界に入って

分かり合う秘訣を求めて悩む……

彼は従業員の心をつかみかねている

結局………

すなおな心で向き合うほかはない

と喝破した

私も同じだった

健常世界と痴呆世界のへだたりは
ネパールと日本のへだたりよりも
大きいかも知れない

ここは まじめに付き合うほかはない
時間をかけてもダメなら

自分の心を再点検すべきではなからうか？
非難を受け止めるような相手はそこにいないからだ

(一九九八年四月二三日)

恋の歌

(7-208)

ものすごい恋ぶみ!

結婚一三年目 津久見在住の婦人

秋田出のその人は岩手で働いていた

大分の男性が岩手支店勤務になった

出会った時に 私が生まれた目的はこれだろうと思った

結ばれた時に これに違いないと思った

子供が生まれた時に これだと思った・・・という

企画した伊豆の某町も凄いが

津久見の婦人も凄い！

手紙を出したいように思ったが やめた

こういう人は痴呆にならないかも知れない

しかし ある人の言うように

グータラボケと言いつられると抵抗がある

さかのぼって 感性豊かに生きる事はできないからだ

(一九九八年四月二三日)

ヤワじゃない

(7-212)

「クリスチャンはおとなしいから

お嫁さんに貫おう」という人がいた

しかし おとなしいばかりじゃありませんよ

「死」に勝った人ですから どんな事も恐れません

でも強いばかりじゃない 優しいですよ

やさしさの出どころが違ふんです

出来るからって やってしまえということはない

出来ないからって 簡単にあきらめない

持っても誇りません 物の意味を知っていますから
いま持たなくても 卑屈になりません

ほめられても 高ぶらず

失敗しても すぐ立ち直ります

高い人の前でも ペコペコしません

低い人の前でも 威張りません

不思議と思いませんか？ 生き方の基軸が違ふんです

(一九九八年四月二三日)

センサー

(11-368)

マントバーニ・オーケストラが

「美しき青きドナウ」を演奏していた

「ああ美しいな」と思ったとき

私の聴覚は二重底になっているように感じた

本当に美しいものとは何か……

と模索しながら聞いている もう一つの耳

見ること 触れること 味わうこと……

実存とは何だろうか？

火星探査機「のぞみ」が打ち上げられた

各国のセンサーが混載されており

二・三ヶ月加速してから 火星に向かい

来年後半から火星周辺で観測を始めるという

大気の調査から水の行方とメカニズムを探るらしい

これらはみな一次センサーである

真理を追求する（学ぶ）のは二次センサーの仕事

人間が頭を膨らませるだけでは むつかしい

（一九九八年七月七日）

ロープ

(11-396)

家じゅうに 何本もロープが下がっている
三十センチおきに コブが作ってある

起き上がるとき 足継ぎに乗るとき

背筋を伸ばすとき 腰が痛いとき

グッとぶら下がると 大変気持ちがい

杖をついたり 何かにつかまるより

ずっと楽である

散歩中は 電柱の側索にぶら下がる

電柱の無い所では ガードレールにのしかかって
腰を伸ばす

引っ張ると 引っ張られるし

挨拶すると してもらえる

話し掛けると 話してくれるし

好きになると 好いてくれる

心を開くと 開いてくれるし

信頼すれば 信頼してくれる

求めなければ 決して得られない

(一九九八年七月二〇日)

航海ハンドブック

(11-400)

門司の書店には 海事関係のコーナーがある
分厚い航海ハンドブックを開くと
航海計器と航海法規の項が目を引く
新しいものが多いようだ

海軍軍人は いくさびとである前に
船乗りであれ と言われた
Seamanshipは

「潮気(しおけ)」などと訳されていた

介護者は 技術者である前に

一人の人間でなければならぬし

泰子の夫である私は

その前に 一人の男性でなければならぬ

結婚式の中で誓約したのは

この事であった その上でいくつかの約束をした

この約束に時効はなく 条件もない

(一九九八年七月一〇日)

トナカイ

(13-486)

タイガの中で 老トナカイがよろめいている
死に場所を探しているのか
ヨロヨロと立ち止まっては 首を伸ばして
あちこちを嗅ぎ回っている

突然 力なく倒れこむと

ウームと言うように 首を伸ばして
そのまま息が絶えてしまった

野性の死はスゴイ!

〈老牝猫〉一六歳といえば 人間なら百歳ぐらいか

死の三日前 トイレへ向かう途中

彼女はバタッと倒れてしまった

主人はその晩から添い寝をして

彼女がゴソゴソすると

トイレにつれて行った

四日目の朝 冷たくなっていた

これもスゴイ!

死の演出をする訳ではないが トナカイの真似はむつかしい

(一九九八年八月二〇日)

目見 当三 識

(13-498)

辞書を引くと・・・・・・

見 当…めあて、みあて、大体の方向

見当識…指南力に同じ

指南力…時間と場所 およびこれに関連して 周囲を

正しく認識する機能 見当識 見当感・・・とある

痴呆の症状の一つに 見当識障害がある

スクリーニングテストに きょうは何日ですか？

ここはどこですか・・・何曜日ですか・・・

などとというのがあ

初診の日 泰子はだいぶ考えて ここは教会ですと答えた

ああ これはいかん と感じたものである

しかし よく考えてみると

我々は周囲を 本当に正しく認識しているだろうか？

彼らを正常でない と診断する事はできても

自分たちは正しい と言えるだろうか？

病気の診断なんて相対的なものだ と思う

絶対的な判断には別のモノサシが要るのではないか？

(一九九八年八月二二日)

相撲解説

(15-584)

相撲解説に登場する元力士はかなり多い

多くは十代の半ばで角界に入り

格闘技一筋に励んだ人たちである

コトバの修行を積んだ人が多いとは思えない

それなのに あの名解な解説 適確なコトバづかい

精神状態まで読み解く 素晴らしい眼力

何が彼らをそうさせたのか？

それは 相撲道という確かなものが存在し

青春のありったけを尽くして稽古をした

彼らなりの体験があったからだと思ふ

だから応用問題でも解ける訳だ

話しているうちに

自分の思索が磨かれる訳だ

私たちは介護体験記を発信しようとしている

ある人々は もう体験記は十分に出ていると言う

しかし 読むべき人は次々に変わるし 書く人も変わる

書く事によって自分が深められる 発信は自分のためだ

(一九九八年九月二八日)

土夫

(16-642)

一階グループホームにいるMKさんは

家族を認識出来ないという………

そこで写真を見せて 記憶を呼び覚まそうとした

両親はすぐに分かった

友だちもすぐに分かった

しかし夫はどうしても思い出せなかった

指さして「誰だったかなあ??」と言うばかり!

親元には二十年・・・・・・・・・・
学友とは長くても 十数年・・・・・・・・・・
しかし夫とは五十年も一緒に暮らしたのに！

個人差はあるだろう

しかし 夫とはそれほど軽いものなのか！

泰子はまだ私を認識しているのではないか・・・・しかし

「夫」「妻」がどんなものかは分からなくなっている？

そのうち「あなたは誰？」という（顔をする）かも知れない
多分そうなるだろう・・・・・・・・・・ 覚悟はできている

モノが言えないのはむしろ幸いかも知れない

（一九九八年一〇月二二日）

安樂死

(18-722)

「一番人気だったサイレンススズカはレース中に左足の骨を粉砕骨折しレース後 安樂死の処置がとられた」と新聞記事
私は競馬の事は何も知らない・・・・・・しかし

この馬は 回復の見込み無しとして殺されたに違いない
痛みに耐えられなかったのか 見るに忍びなかったのか

しかし 人間の楽しみみの為にのみ作られ

役に立たなくなれば 即刻廃棄！

動物の命ってそんなに軽いものだろうか？

犬ズキという人がいる

しかし聞いてみると 賞をとる事だけが目的で

個々の犬を愛する気持ちはないようだ

いい仔犬が生まれれば 親犬は保健所に渡して知らん顔

ある家には二十数匹の猫がおり 毎年仔猫が生まれる

しかし総数が一向に増えない?????

可愛い仔猫が生まれると 古い猫は捨てられるからだ

最後まで家族として面倒を見る人が多い事は知っている

(一九九八年一月二日)

知 痛 力

(20-834)

「記者のち医者」というある人が言った

「医療者に一定のハンディキャップがあることが

望ましい資質の一つだと思います」と

「ぼけ老人をかかえる家族の会」は京都に本部がある

九八年夏？に熊本県支部が発足するとき

その承認に一つの条件が付けられた

「なるべく早く支部長に介護体験者をあてる事」である

痛みを体験することは 素晴らしいことである
人の痛みを知ることができる

痛みには巨大なパワーが潜んでいる

私は自ら体験(注)し 多くの体験者を現に見ている

私の居住する区の年長者相談コーナー・

コーディネータ(主査)の一人は障害者である

私は「知痛力」という言葉を提案したい

(注) ①自らの橈骨神経麻痺体験

②妻の痴呆体験、その介護体験

(一九九八年二月一日)

絶　　筆

(21-846)

「をとゝひのへちまの水も取らざりき」

一九〇二(明治三五)年九月一八日　三五歳で死去した

正岡子規の絶筆である

大俳人(歌人)でなくても

生きている人は必ず死ぬから　我々もいつか絶筆をしるし
遺言を語るに違いない・・・それは明日かも知れない

「自分の事は自分が一番よく知っている」などと言うのが
こればかりは誰も知らない

どこへ行くのか どうなるのか 何があるのか知らない

死ぬ事そのものは知っており 見たくない聞きたくない

避けたい引き伸ばしたい……………しかし必ず直面する

だから恐れる……………

ある人は飲み込まれると言い 敗北すると言う

果たしてそうだろうか？ そんな人生なら

生まれて来ないほうがよい！

動物は「死」を知らないから その恐れはない

痴呆者も「死」を知らない 死ぬ方法も分からない？

(一九九八年一二月七日)

水

(21-856)

温帯多雨気候型の日本は 年間降水量が二千ミリに近い
降水量が多くて インフラが整備されているから

水に不自由する事はまずない・・・それが災いして
「水と安全はタダ」と思ってきた

ある外国人は「飲める水で車を洗う日本人の感覚を
不思議に思う」と言った トイレもそうに違いない

数年前 教会堂の改築中 銭湯に行った

ある所のシャワーが出っぱなしになっていたので

コックをしめると 湯ぶねに入っていた人が変な顔をした
その人が 上がってすぐ熱い湯が出るようにしていたのだ
私は心の中で言った

「この水は我々のものだ 無駄使いしては困る！」と

痴呆者は因果関係が分からなくなる

「(水道は) 何もしなくても出ているからいいじゃないの」
という感じになる 若者の中にもそういう人がいるそうだ

ブッシュメンの母親は 瓜を潰して子供の洗髪をしていた
水は貴重な資源であり 安全はタダではない

(一九九八年二月七日)

偏見

(21-862)

痴呆問題の鍵は 偏見ではないだろうか？

病気？に対する偏見があるから

他人は変な目で見る恐れる しかし人ごとと思いたい

一方家族は恥じる隠す ひとりで頑張って共倒れになる

お手上げになった時は もう処置なし

小さな恥を隠して 大きな恥をかく

地域も困り 行政も病院も施設も困る

手間も暇も費用もかかる トータルで大損となる

氏名を公表できる雰囲気を作りたいが

どこに突破口があるだろうかと みんな考えている

私は 露出し過ぎると言われるほど

何もかも公開してきた 話もしたし書きもした

どこにでも出掛けた パソコン通信にも発表した

そうしているうちに 崩れやすい心が支えられた

我々は貴重な社会資源ではないだろうか？

それにしても しみじみ思うのは

「死」教育・「老」教育が必要だということである

(一九九八年二月八日)

芽

(21-880)

大きなコンクリート製の下水マスに 土が入っており

サンゴ樹が植えてあった いくつか挿し木でもしたのだろう

大した木ではないし 物陰にあったので放置していた

今秋の日照り続きで 完全に枯れて葉を落としてしまった

ずいぶん日が経ってから 抜き捨てて片付けようとする

小さな小さな葉が出ている！

枯れ切ったと思われた枝に 命の火が残っていたのだ！

痴呆者の脳にも 命の火が残っているに違いない

サンゴ樹のように

新しい葉を芽吹かせることはできないかも知れないが

最後の最後まで 小さな火を守ってやりたい

聖書に「見よ我は世の終りまで常に汝らと共にあるなり」とある 私が保証されているように 彼女も保証されている
神が保証されているものを 私が切り捨てる事はできない
そうすることにより 私も切り捨てられる事はない
結婚式のときに互いに誓い合ったことである

(一九九八年二月一日)

花盛り

(22-920)

ある人が「どの道も歩いてみれば花ざかり」と歌った

痴呆介護の道も花盛りだった 沢山の実を収穫した

いま歩いている一人暮らしの道も よく見ると花盛り！

障害を持つ道も 長い別れの道も 会う道も別れる道も

痛みに泣く道も 疲れ果てた道も花盛りとなる

女性の会やお弁当配りの道も花盛りだった

彼女の遺物を見るのがツライ道も やっぱり花盛り

地域活動・ボランティアの道はことに花盛り

死の陰の道も花盛り 命を支える花の花盛り

健やかな道も病む道も 魁の道も従う道も花盛り

しかし偶然迷い込んだら花盛り ということはない

私の人生の礎石に刻まれた預言……

「荒野とかわいた地とは楽しみ 砂漠は喜びて花咲き

サフランのように盛んに花咲きかつ喜び楽しみかつ歌う」

「見よ冬は過ぎ雨もやんで去り もろもろの花は

地にあらわれ鳥のさえずる時がきた 山ばとの声が

われわれの地に聞こえる いちじくの木はその実を結び

ぶどうの木は花咲いてかんばしいにおいを放つ」

(一九九八年二月二六日)

どうする？

(24-964)

泰子はいつも小声で「どーする」と言っている

これは日本語とは言えない 生きているという反応であり
トマドイのしるしである

朝日 (新聞記者) が同じことを言った

「伊規須さんこれからどうされますか？」と

※夫人は厳かな状態になりつつある

※伊規須さんは教会のお仕事を現役で続けられる

※お弁当は配る (ボランティア活動全般をさす)

※その他いろいろ事情はあるでしょう・・・という訳

わたしし「別に・・・今のままですよ」

「使命っていうのは どこかへ行ってするものじゃない」

「何かを考えてするもんじゃない・・・と思いますよ」

「今ここでやっている事が そのまま使命だと思いますよ」

「毎日ギリギリの状態の中で戦っては立ち直る・・・」

その点の連続が一本の線になって行くと思います」

「今日の一足が明日の歴史になると思います」

「時代の魁として用いられるかどうか・・・」

考えない事はないが 私が決める事じゃありません」

(一九九九年一月九日)

プ ロ

(24-970)

ある盲目の幼稚園教師は

「わたしは障害者のプロです」と言った

未熟児網膜症で 生来の視覚障害を持つ

誇り高き専門家という訳である

「よし私は介護夫のプロになろう」と考えた

介護夫と言ってもいろいろある

子供のある人ない人

兄弟のある人ない人

現役の仕事を持っている人いない人
健康な人よわい人……と条件をしぼって行くと
結局わたしの条件に該当する人はわたし一人？

私が私のプロになる……これは意識の問題である

人は神様のような生活もできれば

動物（以下）のような生活もできる

動物といっても 蔑んではいけない彼らは野生のプロである
人間はもっと二極分化しなければならぬ と思う
もっと野性的に もっと神性的に

（一九九九年一月九日）

生存競争

(24-980)

猿の母親は 子供が死ぬとすぐ手放すのが普通だという
死なないうちに 手放すこともあるらしい
そうしないと 厳しい生存競争に勝てないからだ

体力のない母猿は 子猿に授乳するのを惜しむという
ある母猿は 子供を踏み付けて自分のエサをむさぼる
子猿は仕方なしに 懸命に食物をあさり
奪われないように頬袋に詰め込む
それが出来ない子猿は自然淘汰される

猿社会はそれほど厳しいという

人間社会では、それほど露骨な例は少ないだろう

しかし限界に近くなると、ないとは言えない

石川五右衛門の釜茹刑の例もある

しかし聖書には「たとひ父母が捨てても主は迎えたもう」

「女が乳飲み子を忘れ、その腹の子を憐れまないような

事があっても、私はあなたを忘れることない」とある

生きようとするだけで、生きられるものではない

生かそうとすることが意思がベースにあつてこそ、生きられる

(一九九九年一月九日)

下 目

(26-1076)

幾つも違わない上の子は 下の子が甘えるのを

羨ましく思っている？ 子供心に我慢している？

青少年の社会問題の解決策はこんな所にあるのではという

これは子供ばかりではあるまい

「上見れば及ばぬ事の多かりき笠着て暮らせおのが心に」

………という歌がある

封建時代の支配者は 人為的に被差別階層を作って

民の不満を封じたという

上だ下だ高い低いという論議は果てしが無い
厳密に言えば 二人として同じものはいない
互いに 優れた所もあれば劣った所もあるだろう

上を見ても羨ましがらず 卑屈にならず
下を見ても自己満足せず 高慢にならず
持っているからといって 無駄遣いせず
持たないからといって ケチケチせず
出来るからといって 何でもやるのではなく
出来なくても 必要な事には大胆に挑戦する
上も下もしっかり見て 動かない人になりたい

(一九九九年二月一日)

悔い改め

(27-1092)

私の新聞記事（注1）が出た直後 ファックスが入った
奥様の入院当初 先生の詩（注2）などを読んで

「これはやり過ぎではないか」と思っていました（注3）

当時 私は悲壮な気持ちでお祈りしていました

（私のうちに）まだ偏見があったからだと思います

（私のこと）艱難を遠ざけ 「永遠の重い栄光」だけを

夢見るのは むしが良すぎると分かりました

先生は世の偏見に立ち向かわれ

世の不幸と不安を取り除いておられます

神様のご使命を見事に果たしておられます

先生のご著書で慰められ　じかにお話を承りたいと思います

先生のご不自由・痛みについて切に祈らせていただきます

深く深く感謝いたします・・・・・・・・と

(注1) 朝日新聞朝刊、一九九九年一月二六日、二六面

「介護保健・痴呆シリーズの最終回」

(注2) 「別れの日々」①のうち「わかれ」など

(注3) 「生きているうちからかわいそうだ」という感想が

かなり聞こえた。身内からも反発があった

(一九九九年二月四日)

メッセージ

(27-1106)

人間誰でも一編は名作を書ける　という
それは自分史のことだろうか

人生は　つづめれば一言になるかも知れない？

また人を生かすのは　一つのメッセージではなからうか？

つまり人は　一つのメッセージによって生き

・・・・・・・・一つのメッセージを残す　ということだ

旧約聖書には一言人生が多数書かれている　アダムの系図・

②セツ・・③エノス・・④カイナン・・⑤マハラレル

⑥ヤレド・⑦エノク・・⑧メトセラ・・⑨レメク・・・

七代目のエノクを除き 彼らの記録は判で押したようである

「○○は○○歳になって○○を生んだ。○○を生んだのち

○○年生きて男子と女子を生んだ。○○の年は合せて○○年
であった。そして彼は死んだ」・・・・・それだけ

ただしエノクには死の記録が無い 「エノクは神と共に歩み
神が彼を取られたので いなくなつた」とある

人間が死に勝つ 勝利の約束 および救の預言である

我々はどのように生き どのような一言を残すだろうか？

(一九九九年二月一日)

オーラ

(28-1144)

辞書に「物体や人体から周囲に発するという靈氣」とある人から好かれる人は「相手を好きになろうとするオーラ」を発しているのではないのでしょうか？

ということとは相手にそれだけの魅力があること……つまり好きになろうとする人が好きな人から好かれる？

おぎなりの付き合いか 会いたくてたまらないのか
誰だってピンと感じますよ

同じ目的地に行くときでも 一つ先の角を曲がってあの人の家の近くを通りたい・・・そんな気持ちの人は分かりますよ

痴呆老人は五分前の事も忘れますが 感情は残っています
意地悪くされた事も 気分よく接したことも忘れません！

ネコだって「ネコ好きの人」をよく知っています

初対面の人を瞬時に見分けます すごい判断力です

ある人は「人間関係をうまくやる秘訣は 相手を好きになる（理解する）ことだ」と言いました

まず こちらから手を伸べ心を伸べたいと思います

（一九九九年二月二〇日）

圧迫

(28-1148)

手足(そのほか)のシビレることが ときどきある
原因は 自分の体の重みによる圧迫であると思う

- ①机に突っ伏して居眠りをしたら 頭の重さで
クチビルを歯に押しつけ 目が覚めると
クチビルが完全に麻痺! 壊死したかと青くなった
- ②かつて左手橈骨神経麻痺で苦しんだのは
就寝中 腋窩静脈を長時間圧迫した為ではないかと思った
- ③ほかの部位でも同様な事を経験したことがある

④現在わたしにある訳ではないが梅毒も同じだと思う

人間の体は モジモジ動いているから死なない？

止まったらたちまち死んでしまうのではないか？

死んだら動かなくなるというより 動かないから死ぬ？

日本列島はたえずユラユラと揺すられているから生きている？

眼球はたえず振動を繰返しているから 視力が保たれている

いろいろあるからこそ 人間は生きてゆける？

介護も「ワー大変」とか「進行が早い」とか言いながら

痴呆者も介護者も生きて行ける・・・勿論ご苦勞ではあるが

(一九九九年二月二〇日)

愛 触

(34-1380)

ラビング・タッチである かつて米国でベストセラーに
なった Love & Survival で
愛触の少ない人の大脳皮質が一五%も減少していた
と知ってショックを受けたものである

今から泰子に触れても遅いとは思うが

触れないよりは 触れた方がよいだろう

手先の接触だけではなく 声で呼び掛けよう

歌おう 祈ろう 待ち望もう……………

最近は 呼び掛けても「誰だ？」という顔をする
夫からの呼び掛けよりも 寮母さんらしく「伊規須さーん」
と呼んだほうが反応するような感じがする

ちよっと触ると「ウッウーン」とか「ドースル」と

払いのけられる事が多い

私はいつも電池カミソリを持っているので

機嫌のよい時を見計らってヒゲをそってやっていた

しかし最近は うるさそうに顔を背けられることが多い

接触するにも工夫が必要だ

(一九九九年四月二〇日)

連れれ△口い

(34-1388)

この二・三週間 「夫を語る」という番組をいくつか聞いた。
ラジオ・ライブラリーだったから 再放送に違いない
有名作家などの妻たちが 語っていた

ある妻は 夫の作品を見て……………

自分が地を這うように金策に奔走しているときに

彼は全く違う別世界に遊んでいた……………と驚いていた

ある人は……………身勝手だが思いやってくれる優しさもあった
私を許し応援はしたが 結局理解はできなかったと言った

誰よりも近くで見えていたから 一番よく知っていた筈だが
それでも本当の事はわからなかったと言う

箴言に「心は万物よりも偽るものにして甚だ悪し」とある
自分が自分の心を知り得ないのであれば

異なった個体である配偶者を知り得ないのは当然と言える
人間（関係）とは何と深いものだろうか！

夫婦は固定契約関係ではなく 成長・熟成する関係だと思う
真の証人は双方をよく知っている・・・命の源までも！
泰子も私も知られている しかしお互いは知らなかった

（一九九九年四月二九日）

縋　泣

(34-1416)

「お父^とさーん　なぜ私一人をおいて行っちゃったのよー！」

夫の遺体に取り縋って泣く妻の姿は痛々しい

逆の場合も少なくないだろう

それが現実私のもとなった

妻たちのように大声をあげて泣く訳には行かない

しかし　心の中では泣きたい・・・泣いている！

反面　グッと私を支えるものがある

夫婦関係が一層ひとかさねの人間関係ではないからだ
一層下に もう一つの人間関係があり土台がある
これには上にも下にも根が生えており 簡単には動かない

稲が成熟間近になると ヒエ抜きという作業がある
稲株に食い込むように繁茂しているヒエを抜くと
稲にシヨックを与える しかし根をよく張った稲株は大丈夫
自身の刈り取りも近いから 結実には響かない
いま泣き笑いの複雑な思いの底に

使命の終り（結実）と 永遠の休み（収穫）の望みがある

（一九九九年四月三〇日）

ついの住みか

(38-1574)

夕方のラジオで「ついの住みかをどこに求めるか……」
という話題を取り上げていた

夫にしてみれば 会社人間で過ごした土地に未練はない
しかし 妻はその土地に根を張っている
なかなか歩調を合わせるのが難しいという

どこそこに住もう 何なにをやろう と考えても
うまくいくとは限らない………ひところ
スペインに団地を開いて 三〇戸ばかり移住したが

いまはほとんど残っていないらしい

カナダも同じような事情ではないか？

農業をしたい陶芸をやりたいと言っても

思うようにはいかない

旅行・登山といってもいつまでも出来る訳じゃない

シルバー（人材センター）に行ってもメニユーが少ない

ある人は海外に住んでいたが 四国八十八ヶ所の夢を見て

日本に飛んで帰った そこを巡りながら死にたいと考えた

ある朝 朝食に声を掛けられてそのまま終るのもよいという

（カゲの声）本当のついの住みかは その先ですよ！

（一九九九年六月二一日）

反 省

(40-1634)

【回顧・点検・反省】

- ◆ 献身が無理だったのだろうか？
 - ◆ 人間関係（保育・福祉）を失った事が致命的だったか？
 - ◆ 肉親（殊に、親しい姉）の死亡が重大なキッカケ？
 - ◆ 夫婦の対面が不十分だったか？
 - ◆ ある線までは互いに持っている事を前提として付き合おうとした 二人で創造する努力が欠けていたかも知れない？
 - ◆ 役割が不足していたのだろうか？
- （役割が不足したから痴呆になったのか 痴呆になったから

出来なくなったのか？ おそらく後者ではないか)

◆無意識のうちに孤独を避け 感じない状態に逃避した？

(児童・生徒が登校拒否するとき 本来に腹が痛くなる)

◆ある種の甘え？つまり逃げられるから逃げた 何もかも

投げ掛けても大丈夫と信頼した？ 勿論 無意識にである

◆遺伝子レベルの要因も大いに疑われる

【ある程度進んでから】

◆白内障手術で入院の際 病院の無理解により急速に悪化？

◆一九九七年春までは在宅介護を続けたが 夫が仕事を続け

ながらであるため 十分に届かなかった？

◆夫の無理解により強く叱責した事も悪化の引き金に？

(一九九九年七月二日)

青 春

(42-1738)

新聞歌壇を眺めていて フト一首に目が止まった

「逝^ゆきし夫^{つま}を大塚さんと呼び合いて友と語りぬ青春戻り来」
語り合っている友人とは どんな関係だったのだろうか？

泰子は旧姓を「東」といった

教会の一時期を画した女性だったかも知れない

両親は教職にあった人である

実姉は薬局チェーンの会長夫人だった 実兄は牧師だった
四人兄弟の場合両親の愛情は四二〇、四の比率になるそうで

愛情○の次女が一番たくましく育つと言われていた
その泰子のことを語り合える人も少なくなってしまうた
これもあれも 巻き取られたロールフィルムのようだ

私は青春に戻りたい訳ではない 昔が懐かしい訳ではない
体が少々弱っても今が青春 前途洋々いよいよ意気盛ん！
晴れ舞台は まだまだ先かも知れない？……………

イヤ先と言うより 現在の毎日がロングランの真剣勝負
楽ではないが これほどやり甲斐のある人生はない

もし許されるならばその日まで全力疾走……………すると
自動的にPPKジャンクロー となる ならなくても一向構いません

(一九九九年七月二五日)

散 乱

(45-1878)

活発に動いている仕事場（書斎）は必ず散らかっている

その人がダラシナイ訳ではないと思う

ときどき片付けはするが、すぐ散らかるのである

こういう所を、事情を知らない他人が片付けると大変である

あるお手伝いさんは散らかった本をすべて片付け、文字の

書かれた紙キレはすべて捨て、白紙だけを揃えておいた

それを見た先生は頭を抱えたという

F 大学医学部を訪問したとき 教授は恥ずかしそうに私を招じ入れた「狭い所を散らかしていますので」と

確かに広くはない しかしゆっくり歩ける通路があった!

「うちなんかこの倍も散らかっていますよ」と言いたかった

わが書齋では 本を床に積み上げるために通路がなくなる
しかし体力・気力が衰えてくると それを片付けられない
元気なら書棚を増設するところだが 工作の意欲は湧かず
ついに浴室(シャワー室)の中まで ウズ高く積み上がり
本にお湯がかかりそうになった この部屋はトイレと一体で
照明は明るく 壁からは机が飛出し周囲は書棚が一杯!

(一九九九年一月三日)

悲しみボケ

(49-2024)

最近 中原中也（一九〇七—一九三七）の日記が発見された最愛の長男文也を失い精神に変調を来した彼は

自らの病気を「私のは悲しみボケだと思うのでございます」と言っている 彼は「欲ボケ」という言葉を引いているがこれはすこし意味が違う 我を忘れて熱中することである

森鷗外の「舞姫」の中で 豊太郎の裏切りを知ったエリスが発狂して癪狂院（精神病院）に入れられる場面があったこれは極めて強度の悲しみボケであろう

「逃避（不感）ボケ」と言えるかも知れない

登校拒否する子供は 本当に腹が痛くなるし

嫌いな学科では黒板の文字だけが見えなくなる

人間とはまことに弱い者であるが その弱さについても

なんと素晴らしく造られていることか！

弱さは神の賜物ではないだろうか？

ある聖徒は「私は自分の弱さを誇ろう 私の弱い時にこそ

私は強いからである」と言った・・・これは逃避ではない

負け惜しみでもない すでに強い者は強められる事はなく

健康な者は癒される事はない 生きている者は甦る事はない

(二〇〇〇年二月二二日)

奉 仕

(49-2042)

聖書は一見男性優位の世界である

人間創造の場面では 男が先に造られその肋骨から

女性が造られた 目的は男性の助け人とするためであった

多くの女性はその名前さえ記されていないし

民数記では 女性は数にも入っていない

婦人の理想像は貞淑に主人に仕えるものと描かれている

ある所には「女が教えたり男の上に立ったりすることを

許さない むしろ静かにしているべきである」

「女が慎み深く信仰と愛と清さを持ち続けるなら子を産むことによって救われるであろう」とある

今日 教会ではどこも圧倒的に女性信者が多い

聖書で女性には信者一般を代表し 「男は助けられねば生きられない弱い存在」であると思う

全ての男性は女性から生まれキリストも女性から誕生された

そしてキリストは「私は仕えるために来た」と言われ

私たちの為にご自分の命を捧げられた

私は妻を失って初めて「結婚は仕える為だった」と分かった
しかし・・・・・・・・・・もう遅かった

(二〇〇〇年二月二四日)

振り子

(52-2172)

ある老女が 子供の頃の思い出を語っていた

深夜に 眠られぬまま左右に揺れる振り子を見てみると
なんとなく恐ろしくなってきた 覚めているのは自分だけ
このまま 父母を離れてどこかへ連れて行かれるのでは
ないか? 死んだらどこへ行くのだろうか?

みんなと別れて一人で死ぬなんていやだ と

振り子を見なくても よく考えたらみな孤独ではないか

胸に手を当てれば この命はまさしく私に委ねられたもの

兄弟と一緒に生まれることはできないし

誰かと一緒に死ぬ訳にはいかない

手をつないで飛び込んでも 同時に息絶えることはあるまい

人はみな孤独・・・一人で来て一人で行ってゆく

それだったら一人で生きる道を見つけないといけない

これこそ 最も重い自己責任！

命とはそういうものだ・・・

わびしいと言ふなかれ・・・

それがあるから・・・人はたくましくなる

(二〇〇〇年五月二四日)

お 勧 め

(53-2202)

宮崎医科大学の医学展事務局で 「患者さんの気持ち・看護婦さんの気持ち・お医者さんの気持ち」という短文の募集をした どういう訳か私には別に手紙が来て応募依頼があった そこで左記の短文八件を投稿した

- ① 【外出支援／やさしい寮母さん】 一四五字
- ② 【痴呆はお勧め】 一〇〇字
- ③ 【知が病むと痴となる】 三五字
- ④ 【人は逃避する】 三六字
- ⑤ 【家族の祈り】 一〇一字

⑥【目前の不倫？】

九五字

⑦【素晴らしい寮母さん】

一七字

⑧【泣きながら聞くカナリヤ】

九九字

すると②について 「受け入れる側の気持ち次第で
こんなにも見方が変わる！」とコメントが返って来ました
そこで一〇〇字をそのまま紹介します

◆「痴呆は悪くないむしろお勧めです 本人は

人間が人間でなくなっていくのを ボンヤリとしか
感じられませんし 介護者は 優しくなり遅しくなります
身近に痴呆が増えれば 偏見もなくなるでしょう
偏見が諸悪の根源です」

以上

(二〇〇〇年八月二日)

夫 婦

(53-2208)

◇ある婦人「伊規須さんは『女は目利きになってダメな男はパスして』と言われましたが 私は一人の男をパスしましたうちの旦那です フフフ」

◆伊規須「エッ！ そんな……………」

◇裁縫店で別の婦人「お一人暮らしと言われるけど身なりもキチンとして……………ねえ」

◆伊規須「『男やもめにウジが湧く』って言うでしょうだからそうならないように心掛けています……………」
『女やもめに花が咲く』とも言いますよねえ」

◇その婦人「ああ早くうちの旦那 死なんかなあ」

◆伊規須「そりゃイカン」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

一方わが家では……………

物言えない妻に 語りかけながら夕食介助をしていると

視線を感じた すぐ前の若い寮母さんはチラッチラツと目を

走らせる 別の若い看護婦さんもジツと私たちに注目する

何とも言えない いくくしみのまなざしで

「泰子さん いいわねえ」と聞こえてくるようだ

痴呆にならなかつたら こんな夫婦の情は体験できなかった

だろうと思う 痴呆万歳！

(二〇〇〇年八月七日)

視 点

(53-2214)

ある若いお母さんが 厚底の靴を履こうとしていた

見たところ七・八センチぐらいはありそうだった

もともと背の高い婦人だったから 私はきいた

「ずいぶん底の高い靴ですね」 すると彼女は

「目の位置がほんの少し高くなっただけで こんなにも

世界が変わるとは驚きでした」と答えた

カメラを構えるとき その位置(たとえば高さ)によって

世界が大きく変えることはよく知られている

高い位置からの鳥瞰 (㊦) 低い位置からの虫瞰 (㊦) など

むかし安全標語に

「見る角度 変えたらここにも危険箇所」

というのがあった

物理的視点ではない さまざまな視点があると思う

物事は 多面的に考えたい

私たちの (知的生産の技術) 研究会に図解の専門家がいる
近く 後見問題で弁護士に相談に行くつもりだが
現状の総合図解を持って行こうと考えている

(二〇〇〇年八月七日)

第三者評価委員会に出で

評価の仕組み・評価基準の策定論議に加わった

厚生省の準則のもと 市の独自基準を作ろうという訳である

七大項目の下に 九十数項目の(最小) 評価基準があり

それに基づいて 各施設・支援センターに自己評価を求め

委員会としても(一部) 試行し それらを合わせて

最終的に結果を公表し いずれは民間の評価機関に移行する

.....というものである

私は考えた サービスっていうものがあるんだろうか
利用者に届いた時に はじめてサービスになる すると
授受される環境次第で 満足度は大きく異なるのではないか
尊敬と信頼の環境下では 同じ事が大きな感謝になり
不信とあざけりの下では「またあいつがこんなことを！」
となるかも知れない

聖書に「我を尊ぶ者は我もこれを尊ぶ 我を卑しめる者は
軽んぜらるべし」とある 人間関係も同じだと思ふ
尊敬は（自他ともに）人を育てる！

（二〇〇〇年八月七日）

G N P

(53-2220)

GNPといえは ぶじう

Gross National Product

つまり 「国民総生産」であると思つていた

ところが保険業界では

GIRI

NINJOU

PURENENTO

G義理 N人情 Pプレゼント をさし

これが生保レディーの契約の武器であるという

こうして結ばれた保険契約を悪用して

保険金殺人事件が 異常に多く発生する

死後の保障を得ようとして 生前の危険を背負うことになる

だいいち 生命保険会社も倒産する

人が人に保障を求めようとすれば

万全という訳にはいかない

G 義認／キリストによる神の

N 肉体をとって来られた神の子キリスト

P プロミス／永遠不変の真実な契約

このGNPなら 万全である

この会社が倒産することはない

(二〇〇〇年八月七日)

第六章

積極発信

介護の歩み

(1-60)

01 ◆はじめに

私は七十二歳、キリスト教会の牧師です。家内（六六歳）は牧師夫人ということになります。家内は永年、保母・保育所長を勤め有能な公務員でした。

一方、教会にあっては牧師補助者として働き、オルガン奏者であり、頼りになるワープロオペレーターでした。足で操作する特殊な録音・再生装置を駆使して、手は機関銃のようにキーを打ち続ける・・・コンクールでもあれば出したいと思うほどでした。彼女の働きを元に、大小あわせて三十冊

ほどの本が出ています。

私たちに子供はありません。家内には男兄弟が遠方にいますが、介護のあてにはできません。

02◆前兆？キツカケ？無関係？

はじめて受診した痴呆疾患センターの医師は、九一〜二年ごろから出ていただろうと言いました。そう言えば、時々大声を出したり、妙に粗暴になったり、急に物分かりが悪くなったり、友人宅に行くとき迷ったりしていました。

家内はかねてから左の目が悪かったのですが、右目で補っていたためか生活にそれほど支障はありませんでした。しかし、九五年春ごろ？から左眼の視力が急速に衰え、H眼科の

レントゲン写真でも濃い白濁層が認められ、数ヶ月順番待ちして九月に左目の白内障手術を受けました。

この白内障と痴呆症状が同時期でしたから、私たちは、白内障が痴呆の引きがねになったと思っていました。

医師の問診を受けても答えられず、視力検査では「ひだり」「みぎ」と言えないので、懸命に体をよじって手旗信号のように激しく手先を振っていました。

手術の前後八日間入院しましたが、お見舞いに来てくれた人を全く覚え、あわててノートに署名して貰うようにした事もありました。

年間数百例？も（白内障）手術が行われる病院ですから、当然、痴呆の人も少なくないと思われるのに、看護婦たちは

マゴマゴする老人を叱るように扱いました。「そう叱らないで下さい」とお願いすると激しく反撃されました。

隣接している薬局では幾種類もの点眼薬の作り方、保管方法、さし方を早口で説明し、付き添っている私でも分からないほどでした。

同じ医院ビルの一角にある眼鏡屋は、処方箋を持って一人で注文に行った家内を「ダメッ！」と言って追い返しました。まともな対話が出来なかったためでしょうが、ひど過ぎます。私は終始これらの現場に付き添っていた訳ではありませんが、彼女は相当にとまどい、大きなストレスを感じたように思います。痴呆だったから、そういう取扱いを受けたのでしょうか、ストレスで痴呆が悪化したのかも知れないと思いま

した。私はそのH眼科集団に大いに不満を感じたものです。

03 ◆ ついにお手上げとなる

同じころ、家でもハッキリおかしいと気づき始めました。

記憶障害、見当識障害、こだわり、物集め、買い物物の失敗などが続きました。教会の仕事で言えば、賛美歌の番号を指定しても、ページを開くことができなくなりました。つまり数字と桁の意味が分からなくなっていたのです。たとえば、四七一番と言うと、彼女の頭の中で四と七と一がグルグル回っているだけ?なので、「七四番」や「一七番」を開く。たといページを開けたとしても、演奏がおぼつかないなど、もはや通常の対応では手に負えなくなりました。

知人が社会福祉協議会の幹部でした。その方の紹介で小倉南区の蒲生病院老人性痴呆疾患センターに受診したのが一九九六年六月はじめでした。西島院長じきじきの診察を受けました。

長谷川式テスト(三〇点満点)が二〇点以下なら痴呆が疑われるそうですが、家内は六点でした。すでに日にちも曜日も場所も分からず、「ここは教会です」と答えました。「百から七を引くと幾つですか」というテストには全く歯が立ちませんでした。

04 ◆絶頂期の困惑

私の仕事は生涯現役です。当時、一週間に十回ほど集会が

あり、それぞれ一時間ほどのお話をしますが準備にはそれ以上の時間がかかります。どうしても家内に目が届きません。困ったのは、

①小物を紛失すること＝しまい忘れるとほとんど出て来ません、サイズが小さく薄いものは要注意です。再発行もしばしばでした。

②買い物に出ること＝計画を忘れます、品物が偏り重複します。お金が目茶苦茶になります。小銭が一杯になります。(札ばかり使うから)。使った筈のお金が増えたりします。「私が行くから行かなくてよい」と言っても、来客と話をしているうちに出て行きます。新しい店には行けません。

③私の留守中に電話に出ること＝「とらなくてよい」と言

っても忘れてとります。相手の名前や内容は勿論、電話のあったこと自体を忘れるので重大な行き違いが起ります。

④留守中訪問者の応対をすることⅡ前記と同じで、二こと三こと話しても異常は感じられませんから、「ご主人にお伝えください」と言って帰ってしまいます。しかし人が来た事そのものを忘れます。品物を頂いても、どなたにお礼を言っていないか分かりません。そこで、電話器や玄関に全録音装置を付けましたが、洩れるものがあり、全部を再生するのも大変でした。

⑤同じ事を繰返そうとするコダワリⅡ状況に応じて考えるような仕事は混乱して目茶苦茶になりました。教会の仕事は別にしても、たとえば夏のあいだ私のベッド近くの窓を開け

て寝るようにしていましたが、寒風が吹き込む季節になっても必ず開けます、私がソット閉めておくと、いつの間にか開けてあります。また、寝るまでに時間があるからと、電気毛布のダイアルを下げておくと、いつ行っても一杯に上げてあります。彼女は夢の中でもチェックしていた訳で、私と根くらべになりました。（その他、実例は無数にありますが省略）

⑥家事が全くできなくなつた。最後にはマナイトも火も全く使わなくなりました。考える事ができず、使えなかつたからです。しかし、食事時間が近づくと「どうする」「どうする」と私を責めます。「僕がやるから安心して」と言つて宥め、事実炊事もやりましたが、のちには出来合いの弁当やお寿司ばかりを買う状況になりました。

05 ◆決定的な出来ごと

その間、一―二週間ごとに蒲生病院に通い、主治医とよく連絡をとり、なんとか在宅で踏ん張っていた私でしたが、ふとしたカゼをキッカケとして（繰り返し）倒れ込み、最後は二人とも絶食状態となりました。

かねて、院長から「ここ蒲生病院に慣れて下さい。場所や建物もそうですが職員にもそうしてください」と言われていました。そして「緊急事態が起こった時は言ってください。そのために一床は必ず確保しておきますから」と言われていたので、すぐに電話をして、緊急入院をお願いしました。もちろんOKでした。

それより前、いよいよ事態が切迫しつつあるのを感じて、（北九州市の）「施設（の短期）利用証」も入手していましたが、やはり行きつけの病院を信頼したいと思いました。それが正解でした。

06 ◆緊急入院五十日

その朝のことです。「さあ病院に行こう」と言うと「エッ？」と不審な顔をしますが、説明しても分かって貰えません。かまわずタクシーを呼びました。彼女はふだん着のまま、いつもの靴を履いて、何一つ持たず、スッと立ち上がり、それがわが家との別れでした。彼女が再びこの家の敷居をまたぐ事はないだろうと思えます。

それから七ヶ月たちましたが、いま面会に行っても、家の事は一言も話しません。私も触れません。彼女の頭の中では、家も持ち物も過去も完全に消え去っています。物を失うのは火事や盗難ばかりではない、としみじみ思います。

彼女に、悲しいとか寂しいとかいう思いは全く見えません。私も過去の一切を忘れるようにしています。忘れなければ耐えられません。

さて、センターに緊急入院したその日、当面の手続きをすませて帰ろうとすると、彼女はパッとドアの外に飛び出して私の腕にすがりつきました。「アッ」と看護婦さんや寮母さんが走り寄って引き離そうとしましたが、必死の力にはかなわず、私と彼女は腕を組んだまま再び室内に戻りました。看

護婦さんは必要でもない？検査器具を持ってきて、「さあ、○○を測りましょう」とやっているうちに、私は逃げるようにドアの外に出ました。「なんとか馴染んでほしい」と祈りながらも複雑な心境でした。しかし他にどうする事も出来ませんでした。

彼女はおぼろ気な判断力で、一種異様な雰囲気を感じて、「ここに置いていかれたら大変だ！」と感じたのでしよう。その時は私も弱り果てていたので、それ以上深く考えませんでした。あとで聞くと、その夜から翌日にかけて、食事もせずに徘徊を繰り返し、入浴も拒否して職員を困らせたそうです。

緊急入院のときは着のみ着のままでしたから、間もなく差し入れに行きましたが、その時はかなり落ち着きを取り戻し

ており、別れぎわにすがり付く事ありませんでした。

私は、「短期入院（福祉で言えばショートステイ、一〜二週間がメド?）」ということを厳密に考えていたので、「二週間以上になったらどうしよう」とヒヤヒヤしているうちに、とうとう五十日がたってしまいました。

07 ◆余裕がなければ介護はできない

一度は、私が退職して病院の近くに家を探し、在宅でもっぱら家内の介護に当たろうと考えましたが、結局思いとどまりました。それは、病院で繰り返し諭された院長のお言葉があったからです。

【西島院長談】・・・・・・・・

「介護に専心するのは勿論悪い事ではありませんが、十分の十ではなく十分の七の力で介護し、十分の三の余力を確保する事をお勧めします。介護者に余裕が無くなれば、介護は出来なくなります・・・介護が荒っぽくなります」「その意味で、地域の役職などもやめられないほうがよいと思います」

これが私の心に残っていました。蒲生病院では、医療はもちろん家族指導について一方ならぬお世話になりました。その中でも最大の収穫はこのお言葉だったと思います。大袈裟に言えばこの一言で私たちの現在があるとさえ思うのです。

08 ◆日赤「豊寿園」へ

早くから、特別養護老人ホームについて調べ、「年長者相

談コーナー」に申請していました。家内を施設に入れる事については迷いがありませんでした。なぜなら、私は仕事を続けなければならぬし、年と共に体力は衰えて行く、これは実感でした。ですから、（ヘルパーさんなど）相当の公的援助を受けても、私が主たる介護者として彼女を支えることは不可能で、無理をしてたびたび倒れてはたまらない、と思っただからです。私たちには子供も無く、頼れる親戚もありません。

一九九七年六月はじめ、北九州市門司区畑（新門司と言われ、北九州市最東部の瀬戸内海勾配地域）に日本赤十字社／福岡県支部の設置・運営による、痴呆専門特別養護老人ホーム「豊寿園」が開設されました。定員は百名（その他にグル

ープホーム二十名、さらにシヨートステイ、デイサービスもある」と聞きました。北九州市の定めでは、既設の老人ホームの待ち行列に加わり、新施設の開設される段階で並びかえることになっていました。私たちは最初から豊寿園に目標を定めて、微動もありませんでした。こうして、「豊寿園」開設の三日目、六番目に入園できました。

09 ◆グループホームへ

さすがは日赤です。入園者を早く増やそうなどとは考えなかつたようです。一日あたり一〜二名ずつ入園していたように思います。その間、職員の介護態勢を整えて行ったのでしよう。

私たちが入園した日は広い一階食堂（訓練室）の片隅に数名がヒソソリいる状態でした。やがてそれが三十名ぐらいになったとき、半分が二階に分れ、家内も二階に移りました。

九月にはほぼ定員が満ちましたが、しばらく安定を待って、十一月から一階に、ついで十二月からは二階にもグループホームが編成されました。家内は二階の大部屋からグループホームに引っ越しました。入園してからほぼ半年がたっていました。

10 ◆痴呆介護の基本を学ぶ

その間、私は頻繁に面会に通いました。家内が（戸畑区から門司区に住民票を持って）転出したとき、私の住所の半分

は門司区になったと思っただけです。ある時期は毎日通いました。日が暮れてからということもありましたが、このための車を準備しましたから足の心配はありませんでした。

私は永年のペーパードライバーから現役に復帰しました。戸畑から都市高速道路を経由して（ゆっくりで）約四十分かかります。

頻繁に通っているうちに、ほとんどの入園者の名前を覚え、多くの人と仲好くなりました。他の家族とも交流しました。私は積極的にその人たちと接触し、痴呆の世界にも入って交わることに努めました。

清掃会社の人がお掃除にやってきました。「ああ恐ろしい。あんなになっただらどうしよう」と、大きなマスクをかぶり、

怯えながらソクサと帰って行きます。健常人の世界から見ればそうかも知れませんが、痴呆の人自身は、平穩を保っているかぎり、少しも不幸ではありません。

同じ話を繰り返す人には、こちらでも繰り返し感動し、笑い、握手します。時には一緒に歌い、会話を楽しみます。彼らの表情は平穩そのものであり、脳内の毛細血管がサラサラと音を立てているような気がします。

決して説明や説得はしません。危険の無いかぎり制止もしません。一旦ありのままを受容することが原則だと思いません。

時おり、理解のない家族が来られます。「なんね、あんた。昔はあんなにシャンシャンしとったのに・・・ああ情けない。

がんばりなさい」と言う、これは最悪です。ストレスで毛細血管に梗塞が出来て行くのが見えるような気がします。

11 ◆「いけないよ！」

家内は現在、日にちも時間も場所も分らず、数語を発するに過ぎません。それも、否定のニュアンスのものが多いのです。何か気に入らないことはすべて「いけない」と表現します。たとえば、同室の人（ペアの仲良し）がなかなかパジャマに着替えません。すると、その人のパジャマを持ち出して来て渡し、それを指差しながら「いけないよ」「いけない！ よッ！」と叫びます。「早く着替えなければダメよ」という訳です。

一年ぐらい前までは、動詞をすべて「かく」と言っていた。した。「猫が来た」というのを「猫がかいた」という具合です。「書いた」か「欠いた」か「掻いた」か「描いた」かは分かりませんが、どれでも構わないことでした。とにかく「何か言おうとしている！なんだろう？？」と察してやらねばなりませんでした。

12 ◆グループホームの日常

実験的に様々な試みがなされています。七〜八人（最大十名）の人たちがあたかも一軒の家のように、一人の介護職員（ベテラン四人が交替）と共に生活します。そのほかに、介護係長が長い時間一緒にいてくれますし、看護婦や作業療法

士、生活指導員も巡回してくれます。施設長も頻繁に回られます。

食事について。大部屋では完全に整えられたお膳が各自に配られていました。しかし、ここグループホームでは入園者が厨房から台車に載せて鍋のまま食事を運び、各自の食器に盛り付け、食卓を準備します。時には包丁で漬物を切ったり、豆腐を切ったりもします。大部屋で刃物などは全く見る事が出来ませんでした。食事がすめば、食器を洗い、拭きあげて返却に行きます。

その間、職員は全体に目を配りながら一人一人に仕事を頼み（指示し）、間違えばそれを補いながら、各自の能力を引き出す。時間を見て個人ごとの記録を残し、あとでミーティ

ングがあります。なかなか大変です。

植木を育てる人がいれば（同じ階の）屋上に出て、鉢の世話も出来るようになっていきます。室内には鉢置き台（コーナ―）もあります。

カラオケ／ビデオ付きの大きなテレビもありますが、ドラマなど筋を追って見る人はありません。作業療法士の指導を受けていろいろな作業も行われます。クリスマス前には、有志（出来る人）が協力してデコレーションを作りました。

お昼前には、やはり有志がデイサービスの部屋に行ってお茶会練習に参加します。ただの楽しみではなく、リハビリです。部屋から部屋に移動するのも作業なのです。

13 ◆「日赤」のプライド

詳しい内情はもちろん分かりませんが、ここ「豊寿園」の発足に当たって、それほど多くの経験者が既設の施設（日赤／志免、日赤／今津）から移って来られたとは考えられませんか。新採用の人が多かった筈です。中には、すでに他の施設で経験を積んだ人もあったでしょう。しかし、この園が始まっていくらも経たないのに、どんな職種の人からも「介護はおまかせください」というメッセージが聞こえますし、一人一人（の言動・表情）からは心が読み取れます！

夜遅く守衛さん？一人のとき、立ち話をしても、しっかりした見識を持っておられる、「いったいこれはどうしてだろう」と考えました。私の得た結論は「日赤というプライド」

でした。お金もかけているでしょうが、そればかりではない
と思います。素人の目にも、建物の構造、部屋の作り、廊下
のちよっとした曲り具合、部屋から部屋の見通し、避難通路、
表示や配色などなど、設計の妙が見えますが、その他に介護
システムや保安システムなど、目に見えないものがどれほど
多く隠されているか分かりません。それらはこれまでのノウ
ハウの蓄積によるものでしょうが、ここで更に新しいものが
生み出され、広まって行く（事実そうした地域センターの役
割を負っているそうです）に違いないと思います。私たちは
ここに入れて頂いて本当によかった、と感謝しています。

私がいま考えながら試行錯誤している事は、「介護はおまかせください」と言われる園（ホーム）に対して、どう答えるべきか、です。グループホームの研究書などを見ると、家族のかかわり方には「よい加減」というものがあるように思っています。

では、具体的にどうするか。

・面会頻度はどれぐらいが適当か？入園者本人の為には？園の為には？

・適当な時間帯はいつごろか？

・生活スケジュールにどうかかわるのがよいか？

・衣類の消耗や補給にどう注意するか？寝室内をどう整える

か？整理家具の話もある

・寮母さんとの接し方、どんな情報を提供しどんな事を聞き取るべきか？

・寮母さんにちょっと加勢すればよい時もあるがそのケジメは？

・他の同室者との関係はどの程度に？

・またその家族とはどうか？

・直接かかわりの無いように見える職員（と言っても、知らない所でどんなお世話になっているか分からない）に日常どう接したらよいだろう？

などいろいろ考えながら面会に通っています。

この施設がさらに安定し、年を重ねて行くにつれて、家族のあり方や周辺地域とのかかわり方にも一定の形が出来て行

くでしょう。しかしどんな場合も、心を開いてありのままを話し、すなおに聞くことから始まると思います。

15 ◆私の願い

私の最大の願いは、痴呆について一般の方々の理解が深まることです。これは多くの人たち自身のためでもあります。痴呆者の急増する時代はそこまで迫っていますから。それなのに、多くの人々は「明日はわが身」という緊迫感を持っていないし、持ちたくないように見えます。弱い人間にとって無理からぬ事かも知れません。

しかし、身近かな人が痴呆になれば「あの人がーする」と私も？」とギョッとするのはないでしょうか。そう思っ

て、私は家内の痴呆を隠さず、遠い人にも近い人にも機会あるごとに公表するようにしています。

人類は医療の進歩によって自らの寿命を延ばしました。そして最後の壁にぶつかっていると思います。ある人が言いました、「絶対痴呆にならない秘訣がたった一つある。それはそうなる前に亡くなることです」と言いました。

私たちはありのままを受容する以外にはないのではないでしょう。私は、痴呆は神様の与えられた賜物ではないかと思っています。地上の一切の思い煩いや苦痛から解放され、幼な子のようになって帰って行く、生まれるときに「おめでとう」と喜び迎えられたように、「ご苦労さん、さあ、帰って来てお休みなさい」と天に迎えられる。それはむしろ感謝すべき

事かも知れません。

賜物の、もう一つの意味は、痴呆者を取り巻く人々に「やさしさ」を与える、ということでした。痴呆者は神様から派遣された天使かも知れません。久山療育園で「障害者は天使です」と言われた言葉が忘れられません。

16 ◆体験記の発信

わが家の体験一つをとっても、決して軽いものではありませんが、身近かな（豊寿園）家族集団の中に百ヶ以上のドラマがある事を思うと胸がワクワクします。

一つ一つのご家族が、時代の魁という自覚をもって、これを公開されるならば、後に続く人たちにどんなに大きな力に

なる事でしょうか。

時間と共に流れ去って行くものを繋ぎとめ、発掘して、更にこれを纏めることは並大抵の努力では出来ませんが、一歩でも進めるべく足元から努力したいと思います。この文章はその第一歩のつもりです。

以上

アララギ

(6-184)

そういえば 父がそれらしい事をやっていた
アララギは 思いを持って 一つをつかめと言う

散文詩も同じだと思う

深い所にある 私の思いは一つ

この別れの日々を生きる現実と 取り組むこと

すると いろんなものが見えて来る

あまりたくさんで 参ってしまうぐらい

しかし　いま感じた事は　今しか書けない

私には今があるだけで

家内も私も　すべての人もスポットライト生涯だ

私は　大きな流れの中に立っている

過ぎて行ったものは　再び捕らえる事はできない

人生とは　何と勿体ないものだろう

脳の細胞は生涯に五%も働かないという

(一九九八年四月一四日)

海 峽

(7-210)

海峡は………

つながりを断ち切る存在

という島びと

良い環境から

良いものが生まれるとは限らない

断絶の悲哀から

心の歌があふれる事が多い

もう一歩・・・・・・・・

悲哀が無かったら 歌は生まれまいとさえ思う

喜びは 心の動く場所が違うのではないか？

心にひらめく詩趣も

一瞬にして消え去り 再び帰らない

家じゅうにメモ用紙を置いて

「閃」というノートに貼り付ける

最近 類語辞典を手取る事が多くなった

(一九九八年四月二三日)

夢ゆめ

現うつ

(15-590)

仕事ですんだから 早く寝ようという事は殆どない

残った仕事を やり遂げようとするから夜更かしが多い

しかし起きていられなくなって 倒れこむ事は時々ある

疲れ切った時は 寝返りも打てず

毛布も引き上げられないが

少しでも力が残っている時は 枕に頭をつけたまま

顔だけ横に向ける・・・こんな時

天井から下がっているコブ付きロープが役に立つ

腕力だけは残っているからだ

枕元にノート・鉛筆・ボールペン・眼鏡が常備してあり
触れると点灯するランプもあるが

ほとんどノートを見ないで・・・時には半分眠ったまま

大きな字で メクラ滅法に書きなぐる

かつての発光信号の受信と同じだ

こうしていくつかの夢を書きとめた

ある夜など 夢うつつのうちに 十数篇の詩が出来た

自分が書いていながら どうしても分からない字があった

(一九九八年九月二九日)

「老い」 富田 富家

(15-608)

年とった お金持ちではない

「老い」に富む人である

ある人は「老いに恵まれた」と言い

またある人は「老人力」と言った

私は「痴呆」の富豪になった

振り返ると 数年前から大変な勉強を強制された

楽ではなかったが 今では多くの単位に恵まれ

家内にとっても 私にとっても

悪くない事であったと思っっている

痴呆は神様の賜物ではないだろうか？

本人はこの世の一切の煩いから解放された

わたしは老いの勉強をし 優しさを学んだ

それをなんとか発信しようと思掛

話もしたし書くこともした

すると 多くの所からお声がかかった

発信することで 崩れやすい自分の心も支えられた

(一九九八年一〇月一日)

希少価値

(17-676)

夫が妻を介護している例は二〇%あると 誰かが言った

妻を介護する夫という条件に さらに

◆子供が無い場合

◆兄弟がいない場合

◆夫が現役の仕事を持っている場合

◆近所に身内がいない場合

◆(妻が)失語症の場合

などを加えると 比率はずいぶん小さくなるに違いない

大まかな想像だが 二%にもならないのではないか？

自分ばかりがなぜこんな目に会うのか……

と考えている訳ではない……逆

特別な使命を感じるのである

私と同じ事を 誰でもがやれる訳ではない

折角 この貴重な体験をしているのだから

大いに発信したい これは貴重な情報だ……

ぜひ書き残したいし 機会があれば話もしたい

幸い 熊本県富合町から月末にお呼びがかかっている

(一九九八年一〇月一三日)

不 用 心 ？

(21-866)

「財布の底と心の底は人に見せるな」という諺がある
自分の経済状態・本心・真実を
メツタな人に見せてはならないという警告である

これからすると 私ははなはだ不用心な人間かも知れない
私の願いは全ての人に痴呆を理解して貰う事であり
明日は誰が痴呆になるか分からない となれば
誰に対してもすべてを発信しなければならない
この人にはここまで・・・などと考えていたら

面倒でたまらないし 收拾がつかなくなる

もつとも 中には痴呆をまったく理解できず

人間関係がこわれる例も無いことはない

これは身内の場合などに多く 家庭騒動の原因となる

(痴呆を) 隠すことは諸悪・諸災の根源である

老化も死も自然現象で 人が死ななかつたら大変である

病気が恥ではないように 老化も恥すべき事ではない

分岐レールを経なければ 隣の線路には移れない

ちょっと揺れたり ガタゴトと音がするのはやむを得ない

わが家の門口が近い事を知ると 胸が躍るではないか!

(一九九八年二月一〇日)

感 受 力

(45-1860)

コインランドリーから持ち帰った洗濯物の大籠が二つ

冷めないうちに 蜂の巣(注)に納めようと

取り掛かったのはよいが 百数十点の分別・巻取り・収納に
疲れ果て 途中でいつの間にか倒れ込んでしまった

フト気が付くと ラジオが「二三時五五分名曲の小箱です」
と言っている

天井からぶら下がったコブ付きロープに縋るが

立ち上がる力がない・・・・・・・・・・キレイな音楽は

聴覚の最深部に届いているが 一つ手前の感受層の力が
すっかり弱って キレイなものをキレイと感じることが
できない!

「ああだいぶ弱ったな」と思うが ここは何としても
立ち上がって 動けるうちに仕事をしなければならぬ

かつて「死に行く者(自分)が最後まで体験を書き残したら
どんなものができるだろうか」と考えたが

この段階を過ぎると 書く気力がなくなり文字にはなるまい
誰かが口述筆記してくれるとありがたい

(注) 多数の牛乳パックを接着した下着収納装置

(一九九九年一月三日)

第七章

その他

猫

(5-150)

私が猫好きというより 猫が私を好きなのだ

ななめ裏の家には 何匹いるか分からない

ウンチ騒動で 近所と争いがおこり

とうとう 裏庭全体を網でかこってしまった

しかし どうしても中に納まらない連中が二／三いて

うちに来ては お土産を置いてゆく

コンクリートの上 勝手口のすぐ下にである

「ああサッパリした　ここは落ち着くなあー

おじさん元氣？　また来るね」（ネコ語）

彼らはイヤガラセをしようなんて思っていない

「ああいいのをしてるな　ヨシヨシ」と私は嬉しくなる

ある猫は　保健所に連れて行かれる前日

最後の挨拶に来た　私はお花料を持っていった

消化管の終点を忌み嫌うなら　全体を嫌うようになるだろう
老人と自然に付き合っしてほしい

（一九九八年四月一日）

聖 餐 式

(5-160)

今年は何もかも一人で準備した

去年はイースターが三月三〇日だったから

泰子が増勢した筈だ

困惑・絶頂期だったが　あまり印象に残っていない

過去には教会の隣家で　病臥している人のために

出張礼典が行われたこともある

豊寿園でも　自室（寝室）に呼んで

形だけ行えない事もあるまい

しかしキリストの死と復活（体）をわきまえないでみだりに聖礼典にあずかることは罪である

聖書にしばしば 耳のある者は聞くがよい とある

耳（霊の言葉を理解する機能）を失った者は

聞く事ができない

文字も読めない 読んでも認識できない

文字も書けない 発語もできない

（注）妻泰子は特別養護老人ホーム「豊寿園」に入園中

（一九九八年四月一二日）

夢 世 界

(7-206)

後部マストがやっと見える・・・

ミルクのような濃霧！

目を見開いても 何も見えない

視野狭窄のようでもあるし 違うようでもある

覚めそうで覚めないもどかしさ・・・

シビレがなかなか解けない コソバユイのような感覚

見えるようで見えない すりガラスごしの風景

消えかかっているようで 消えない

分かってはいても動けない

すべてものが一皮かぶっているように感じる

臨死体験ってこんなものだろうか？

遠い呼び声に答えようとしても 声が出ない

自分はいま天井から室内を見下ろしている

ベッドには自分が横たわっている

あの人もこの人も右往左往している

行こうか戻ろかと迷う？

泰子の世界に もうそういう迷いはあるまい

(一九九八年四月二三日)

あなたはどこにいますか？

(8-246)

進化論は進化する と言われるほど定まらない

それはその筈 あくまでも人間の「論」だからだ

人間は動物と直線的・漸進的に繋がってはいない

人間は創造の末 万物の上に

別ものとして造られた・・・・・・・・

と聖書は語っている

人間は 神の形(靈的)に造られ

語り掛けられるものとして造られた
神に向かつて（答えを）語り得る存在だった

彼らは罪を犯し 責任を転嫁し

果ては神をも非難しようとして

ついに追放された……

しかし なお言葉を持っていた

ではいま（発受ともに）言葉を失った「失語者」は
どこに置かれているのだろうか？

（一九九八年五月四日）

聖書の生人五証症例

(8-260)

エルサレム神殿に務める老祭司ザカリヤは

その日当番に当たっていた

香壇に近付いたとき 天使が現れて命じられた

「あなたの老妻エリサベツは男子を生むであろう

その名をヨハネと付けなさい」と

ザカリヤは信じられず

「そんなこと・・・」と言うと

「必ず成就するお言葉を信じないならば

その日までオシになる」と言われ

その通りになった

翌年 老女は男子を生んだ

命名の日 父親が黒板に

「その名はヨハネ」と書いた時

たちまち口が解けて 神を賛美した

聖書は事実であると同時に

今日の応用問題を解く方程式である

では???.?

(一九九八年五月四日)

コトバ

(8-288)

耳を失った人は 見る (目で読む) 事ができる

目を失った人は 聞くことができる

目も耳も失った人は 触れる事ができる

体がほとんど動かないでも

マバタキでワープロを打つ人もある

しかし脳を失った人は コトバを失う

視覚・聴覚・触覚が完全でも

体はピンピンしていても

発声器官には 何の欠陥が無くても

コミュニケーションは失われる

コトバを造ることができない

コトバを理解することができない

文盲とは違う

かつては立派な言語生活を送った人だ

コトバを失った人間とは何だろうか？

(注) 失語症にはB型W型の二種類があると言われます

(一九九八年五月五日)

磁気共鳴

(9-290)

米国のベストセラー

“Love and Survival”

磁気共鳴で大脳皮質の大きさを調べるといふ話

愛情接触の少ない人は一五%も萎縮していた

動物実験ではストレス・ホルモンが脳細胞を障害した

愛情は脳の成長・健康に不可欠という

老人は偽りの愛情を鋭く見抜く……そして

人は孤独の自覚より苦痛を感じない状態を選ぶ という

これが痴呆の誘因だとしたら

恐るべき警告だ

泰子に対して申し訳が立たない

しかし もう取り返しはつかない

みなさん 一日でも早く気付いて 理解して

いたわってあげてください

(一九九八年五月二三日)

矛 盾

(10-328)

痴呆家族になって 色々な集まりに出ていると

家族会活動に類するものが 数多くある事を知った

全国レベルのものから その支部レベルのもの

市町村レベル地域レベルや 施設ごとのものもある

主要なネライも違うし 名称も違う

結成の経緯も違うから人(脈)も違う・・・という具合

それぞれの接点をはっきりし

問題の緊急性は明らかであっても

現実の協力はなかなかむつかしい

高齢弱者のため という一点はだれも疑わないのに！

それはさておき・・・この活動には

本質的矛盾が内包されていると思った

つまり 真に痛みを体験している世代は

(おおむね高齢で) もう動けないし

動ける者は 本当の痛みを感じられないということ

勿論みなさんは 大変なご苦勞をされていますが

配偶者を介護するのと 親を介護するのは違います

(一九九八年六月二二日)

A L S (注)

(11-402)

A L S 患者は自分で文字を書けないが
脳は侵されておらず 意識も感覚も正常である

文字盤や特殊ワープロを用い

介護者が 眼球やマブタあるいは指の

微かな動きを とらえる事により

意思の伝達は可能であるという

英国のホーキンス博士はA L S 患者である

しかし公選法では自筆を規定しており

選挙の公正を担保するには譲れないという

すると患者は棄権するほかはない・・・と救済を求めている

痴呆者は逆で 書字行為はできる場合が多いが

判断すべき脳が侵されており

定められた投票行動はできない

投票所の入場券は来るし 棄権防止を

呼び掛けられるが 棄権するほかはない

(注) 筋萎縮性側索硬化症

(一九九八年七月一〇日)

名 三行

(12-416)

自動車学校の先生のコトバ……

「むつかしい事はユックリと」

「やさしい事はスムーズに」

「終わった事(もの)は切る」

お互いに 思い当たるところがあると思います

痴呆理解は じゅうぶん時間をかけて丁寧に

もし自分が体験すれば急速に進みます

痴呆(介護) 体験をそのまま話す事は容易です

それが自分の心の支えになります

痴呆者との交際では 五分前も切り捨てる

彼我ともにスポットライト人生を生きる

いつまで続くヌカルミぞと

気落ちしないでください

状況は遠からず変わります

もうしばらくの辛抱です

もうしばらく耐えてください

必ずしも 悪化する意味ではありませんが

逃れる道がキットあります 私の体験です

(一九九八年七月二七日)

電 気 料

(12-434)

電気料金の領収書に 前年同月比という欄がある

	一九九七年	一九九八年
一月	一一二五KW	五八〇KW
二月	九七四KW	四七二KW
三月	八〇六KW	四四一KW

(電灯・深夜電力・動力の合計)

九七年は一人ぐらし・・・九八年は一人ぐらしである

教会の定期集會が減ったこともある

しかし二人で二倍にならないものも多い

一人暮らしになって 夜更かしはむしろ増えた

すると在宅末期には 目に見えない介護費用が

掛かっていた ということらしい

そのほかに 買い物のもぐりも多かった

お金の紛失もあった 迷子の捜索費もかかった

お鍋の買い替えなどもあった

痴呆の場合は・・・・・・・・

通院費とか薬代のほかに 隠れた必要経費がかかる

介護家族を見たら そういう点を理解してあげたい

(一九九八年七月二七日)

要領

(14-540)

成長にともない 知らず知らずのうちに体得し

無意識に実行している行動は少なくない

たとえば……

物を見るといふ行為は 器質的に欠陥が無いだけでなく

見ようとする意欲と 反復訓練が必須という

そうした様々な行為は 生存に対する必要度に応じて

優先順序が設定されているように思う

たとえば 「排泄」は優先順序が低く

「摂食」は高いのではないだろうか？

なぜなら 排泄はオーバーフローでも生きられるが
摂食は 食欲を感じて むさぼらなければならない

もう一つ 高いものは「生殖」であろう

旧約聖書に「生めよふえよ地に満ちよ（後略）」とある

神様を信じない人も これには忠実に従う

しかし（後略）の部分には ほとんど無関心である

「地を従わせよ 海の魚・空の鳥・地に動くすべての
生き物とを治めよ」（殺戮・収奪の意味ではない）

（一九九八年九月一五日）

余 松

(16-648)

「心の余裕が無くなれば介護はできなくなる」

これは私の座右の銘です・・・と言っても

これを掲げて在宅介護に励んだとは言えませんでした

(在宅) 末期に困り果ててアタフタとしている時

通院ごとにこの言葉を聞かされましたが

それどころではなかった というのが実情でした

しかし今は分かります・・・

耳に入らないような状態のときも

言い続けて下さったNドクターに感謝します

そのお陰で今日があると書いても過言ではありません

大きな分かれ道を幾つも選んで来ました

いつもそれがあったから　ここまで来る事が出来ました

最初にそこへ誘導して下さいましたS氏に感謝します

寮母（父）さんたちの働きを見て　さぞキツかろうと思う

ストレスを和らげ　心の余裕を増してあげるために

私に出来る事は何だろうか？

（一九九八年一〇月一二日）

知 源

(17-694)

〔電源〕

電気で動くものは電源・回路がこわれると
全部ストップする……たとえば

〈音〉 ラジオは沈黙する

〈回転〉 扇風機は止まる

〈熱〉 ヒーターは冷たくなる

〈記憶〉 コンピュータの記憶は一瞬で消滅する

〔知源〕

知能の源と回路がこわれると痴呆となり たたとえば

〈認識・見当識〉できなくなる 怪しくなる

〈記憶〉 認識しないから脳中に入る事はない

〈想起〉 入っていないものが出てくる事はない

〈判断〉 情報を組み合わせる事ができない

〈感覚〉 鈍れてくる 遅くなる

尿・便意を感じた時は間に合わない

お尻が汚れても不快と感じない

これらが障害されて 日常生活を営む事ができなくなる

脳機能の壊れた人は 体が元気なほど危険（厄介）である！

介護認定に当っては この点を正しく判定してほしい

（一九九八年一〇月一五日）

汎 用

(19-800)

コンピュータは汎用機である・・・たとえば

日本語文章処理のプログラムを組み込めばワープロになる

軍艦の後部甲板は汎用広場である

厳粛な儀式にも使えば 祭りの会場にもなる

デッキゴルフの会場にも 水葬の式場にもなる

狭い家で 一つの部屋にチャブダイを置いて食事をし

フトンを敷いて寝室にする・・・というようなものである

しかし痴呆者にとって　こういう事は最も苦手である

「○○○○のときには　□□□□のように準備する」のだが

その「○○○○のとき」が分からないので支離滅裂になる

泰子は在宅末期に目茶苦茶になった

当時　教会の定期集会は週に十回以上あり

それぞれ部屋が違い　席も違った　歌集も違った

今思えば　彼女はずいぶん苦しんでいたと思う

早く理解して　ストレスを軽くしてやればよかった

うちは悔いてももう間に合いませんが・・・みなさん

ご家族の痴呆者について理解してやってください

(一九九八年一月一六日)

奥山放獣

(20-816)

はじめて聞く おかしなコトバだと思った
人間に慣れた熊を 自然に帰すために
奥山でおこなう お仕置だという

※檻をガンガンたたく

※唐辛子スプレーを浴びせる

※爆竹を四発お見舞いする・・・など

一時はビクツとするが 記憶はすぐ消えるだろう
その熊の 人懐っこい性格は変わるまい

食物が乏しくなれば また出てくるだろう

やさしい熊もいるんだから すぐ射ち殺さないでほしい

しかし実害を受ける人たちには難しかろう

何か工夫は無いものだろうか？

「倫理」の話を知っていると

いわゆる有害鳥獣であっても絶滅させてはならないと説く

カナリヤ動物という意義もある

痴呆者を叱っても学習効果は期待できない

(一九九八年一月三〇日)

幽 明

(22-894)

「あの世」と「この世」という意味である

「幽明 境を異にする」と言えば「死んであの世に行く」ということである………

「幽冥」と書けば どちらの字も「あの世」である

私はいま「幽」と「明」の境に立っている

はっきり境界線ができてしまえば お別れである

線は伸びているが まだ締め切られていない

ここに立ってみて いろんな事を学んだ

※「幽」(冥)のこと

※「明」のこと

※「幽」(冥)から見た「明」のこと

泰子はどういう自覚を持っているだろうか？

初診の段階で 日にちも時間も場所も分からなかった

しかし戸惑いのオリ(沈殿)のその底では

かすかな感覚が動いているかも知れない

もはや語るすべも無く 聞くすべも無い

しかし生きているとは 言えるだろう

(一九九八年二月二三日)

通 潤 橋

(23-922)

肥後の石工たちは 四百のリブアーチ橋を架けた
九州以外には皆無と言ってもよいという

特にこの橋には 試行錯誤が繰り返された

難題を次々にクリアした 技術問題はさておき

石橋が九州に限られている理由・・・その一つは
中世以降戦乱に無縁だったローカルの利もあるという

かなり粗暴な国が「経済発展のためには平和が必要」と
言っておとなしくなる事がある

私が平和を望むのは 泰子の介護環境が変わらない為である

戦乱や天変地異のような大環境も

制度や仕組みなどの小環境も

穏やかに保たれるよう期待したい

痴呆者は 身の回りの環境が変わると戸惑ってしまう

通潤橋は 惣村における超世代的投資であったという

つまり後世に多くの利益を残す先行投資である

いま我々がやっている事は 後世にツケを回す先行消費！

若干の物は残るにしても 心は大変な違い！

(一九九八年二月二六日)

臨 終

(23-934)

ある人の最後に立ち会いながら 重大な失敗をした

ずいぶん昔の事だった 教会の長老たちと共に三人で

老婦人の枕元にいた 家族は看護に疲れ果て別室で寝ていた

患者は最後が近い事が明らかで 大きな寝息を立てていた

明け方近くなって 小鼻でヒクヒクと息をしはじめた

話に聞いていたが 実際に見るのは始めてだった

いよいよ最後だと思って……息をのんだ

事情は忘れたが 我々は家族にあとを託して帰り

間もなく息を引き取られたとのこと

私たちは夜中じゅう ずっと話し続けていた

気心を知った間柄だから 話し合う事は多かった

勿論病人を気遣う内容で それも小声でしんみりと話した

しかしあとから聞いた 意識が無いようでも聞こえている
自分から発信出来なくても 感情は最後まで動いていると

あるとき雑談しないで 替美を歌い聖書を読み

祈ってやればよかった しかしもう取り返しは付かない

泰子の枕元で替美歌三二二・四六一と主の祈りをしよう

その段階になった 二人並んで写真をとったら影が薄い？

(一九九八年一二月二八日)

天 使

(23-944)

不妊治療の末 生まれた娘がダウン症だった

ショックを受け心が迷ったという

しかし障害児の親の会に入って 心が温かくなった

この子のお陰で 多くの心ある人と知り合う事ができた

当たり前のことを有り難いと感じるようになった

この子は私を成長させる為選ばれた天使に違いないという

私にとって泰子は天使かも知れない

一時は ショックを感じる事すら出来なかった

心が迷ったこともあった 悲しんだ事もあった
痛みに耐えかねて コトバが詩となって溢れた

体験談が次第に多くの人に受け入れられた

話したり書いたりする事が私の心の支えになった

家族の会に入って 多くの人と知り合った

弁当を貰うようになって 配ることを学んだ

女性の会に 地域に 人の輪がどんどん広がった

その前からボランティアをしていたから 出来た事だが
助ける事は助けられる事 助けられるから自然に助ける
改めてボランティアの心を知った みな天使のおかげ！

(一九九八年一月二八日)

い い よ

(30-1250)

泰子は初診のとき すでに言葉が極端に少なかつた

「いいよ」は大体肯定の意味で 単に応答でもあつた

「いけないよ」は否定の意思表示であつた

ベテラン医師が問診していた

いろいろの質問を繰り返しているうちに泰子が

「ウーン もういいよ」と言った

健常者が言ったのなら 「もうそんな質問はやめて」だ

医師は「じゃ やめましょう」と言いながら

一瞬ムツとした表情が現れ　すぐ消えた

失語症患者の言葉は日本語ではないのだが　健常者には

どうしても日本語に聞こえてしまう

超ベテランでさえもこうなら　不慣れな人に痴呆を理解して
貰うのは大変だなと思った

現在　泰子のレベルはさらに低下しており　僅かに一語

小声で「ドースル」と言うだけである

これにはほとんど意思は含まれておらず

戸惑いのもとにある生体反応と考えるとよいと思う

(一九九九年三月二〇日)

悔　い

(33-1342)

父を送ってから　もう四〇年になる

胃癌・肝臓癌が手遅れで手術後いくらかも持たなかった
母は三二年前　気が付かない間に息を引き取っていた
形は違ったが　いずれも大いに悔いが残った

今また妻を送ろうとしている

この別れは長い時間をかけて進行中である

もちろん私が先になるかも知れない・・・その時でも
最後まで悔いが残らないようにしたい

いま彼女は私に会ってもほとんど無視（分からない）である

「分からないんだったら（面会に）行っても無駄だ」

と思いたくなる事もある………実際に！

しかし百分の一でも千分の一でも認識力が残っていると

信じて園がよいを続け 呼び掛けをし 接触に努めている

ニコツとすると「分かったのかな？」と嬉しくなる

ある人は「分かっていますよ！」と慰めて下さる

女性の会のある仲間は

「行かないなんて言ったら私が怒ります」と言う

………本当のことは神様にしか分からない

（一九九九年四月一九日）

でたらめ

(33-134)

でたらめが出来ない・・・どうしても整然としてしまう

というのは 精神障害の一つの症状だそうである

そう言えば 泰子は妙に何でもキチンとしたがる

(食堂の) 椅子が曲がっていれば チョツと直す

トイレのカーテンが片寄っていれば チョツと引っ張る

(グループホームのとき) 箸をキレイに揃えないと

気がすまない ベッドの毛布はちゃんと引っ張って両ふちを

キレイに折り曲げる・・・これらは几帳面とは違うようだ

ある人は ユーゴの大統領もNATOも精神障害ではないか
という・・・勿論いろいろ絡み合って簡単には言えないが
人間の正常と異常はまことに分かりにくい・・・もちろん
でたらめ（ランダム）であればよいというものでもない
ヒュマニテアリアン（人道的）とは何を基準にすべきか？

このワープロはしばらくキーを押さないと自動的に

スクリーンセーバーが動きだす・・・見ていると

十数種のキレイな画面がランダムに現れる

これは 乱数コマンドに従ってコンピュータがサイコロを
振っている訳である

（一九九九年四月一九日）

いのり

(37-1500)

かつて「障害新生児の生命倫理」という本を読んで
問題の重さに身が震えたことを覚えている

ある人は 老母の痴呆が進みいよいよ極限状態になったとき
「ああ………神様もういいです」と呻くように祈った
それから間もなく老母は神様のみもとに召された

どれほど生命科学が進んだとしても命は作り出せない
生死は厳かに神様の手にある！………しかし神様は

家族に一応問われるのではないだろうか？

「もういいです」と答えれば「そうか」と言われるだろう

だからと言って　すぐ召されるかどうかは分らない

泰子を見ていると「もうカワイソウだ神様あわれんで下さい」と心に思う　しかし「もういいです」と祈るには迷いがある

脳死になった人も　体は温かく心肺は動いている

汗も出れば排泄もする　磨かなければ口中は汚れるし

褥瘡を防ぐために体位変換もしなければならぬ・・しかし

移植のためには早く新鮮な臓器を摘出したいと言われる

本人が移植に同意していても　家族は大いに迷う！

(一九九九年五月二九日)

女癡呆病棟

(37-1518)

新聞は下半分の広告(書評)欄から見ると

「痴呆老人病棟云々」と解説してあったので早速読んでみた
著者紹介は一切なし!前書き後書きなし 不思議な本だった

しかし老人ホームの描写には真実味があり

言葉遣いからすると どこか北部九州のような気もした

著者の提起する問題は「痴呆者の生命終結」である

しかし医が「(犯すべからざる)生命システム」に対して

手を加える事はプラス・マイナスともに問題ではないか

人間は寿命以上に生きてはならず 縮めてもならない

プラスすれば幸福なようだが マゴマゴするうちに

たちまち体(脳)が寿命について行けなくなる(＝痴呆)

マイナスする事は「慈悲」ではなくて 重大な罪である

そもそも人間が学問・知識・技術を積み上げて来たことが
ほんとうに幸福だったろうか？

(痴呆者の生命終結が) いかにあるべきかと言うこと自体
高慢だと思ふ……ただ命がいかにあるのか

その事実恐れののくのみ

(一九九九年六月五日)

ニュージック

(38-1568)

牧場の牛たちに クラシック・バロックなどを聞かせると
乳がよく出るのではないかと言われて来たが
効果は確認できないという

人間が気分よくなり 落ち着くと

それが牛たちに好影響を与えて

乳量が増えるのではないか……と考えられている

司会のアナウンサーは 「鶏が卵をよく生むとか

ネコが踊りだすとかないですか　ファックス下さい」
と言っていたが　そのあとは聞かなかった

ある醸造業者が言っていた・・・・・・・・

「酵母（菌）に音楽を聞かせると効果があるようです」

「仕込み歌と小鳥の声を合成した音楽を作りました」

「アルファ―波は人間にもよいのです」と

サブリミナル音楽を聞いた事があるが　よく分らなかった

視覚に訴えるサブリミナルは効果があると　某社のPR

「焼いてしまう」と言われたサボテンは翌年見事に咲いた！

痴呆者は　反応が無いようでも聞こえているのではないか

（一九九九年六月二一日）

受信力

(39-1616)

「事業所・企業統計調査」兼「商業統計調査」が来た

記入用紙はA4一枚であるが 説明書（記入の仕方）は

A4版 こまかい字で一二ページもあった・・・でも

いろいろ工夫してあるようで 気遣いには感謝したい

懇切に説明すれば分かりやすいと思うのは当然だが

こまごまと書いてあればあるほど 読むのが大儀になる

役所の人は 「これだけ工夫して 分りやすく 何度も

通達したんだから あとは市民の責任」と思うでしょうが

誠意はあっても 受信力が衰えた人もあるのです

それではどうすべきか？ 衰えた人に強くなれと

言うのは無理です 個別に 忍耐強く対応する以外に
ないでしょう これには大変な努力が必要ですが

今からの時代は やむを得ないんじゃないでしょうか

介護認定のとき調査員たちは 痴呆者に質問の意味が
通じない事を知っているでしょうか？ もし「ハイ」と
答えても 判断して脳から出てきたものではありません
悪意はなくても 結果としてウソなんです

(一九九九年六月二九日)

将 来

(40-1656)

TVで重度心身障害児施設の有様が放映されていましたが誰も話しませんが「この子供たちの将来をどう描けるか」という思いが感じられました

手厚い看護（介護）を受けて 精一杯生きる……
まずはそれが必要ですが それだけでしょうか？

私は 持てる才能（の一部でも）を伸ばして
いわゆる健常者？（と思っている人）のために
ボランティア活動ができないだろうかと考えました

常識からすると 逆と思われるかも知れませんが

彼らから学ぶべきことは、たくさんあると思いますから

あなたがたが生きているだけで

社会に十分貢献していると思えますよ

久山療育園に行ったとき「障害者は優しさを教える天使です」と言われて 目が覚めました

私たちは本当に健常者でしょうか？ 生きているだけで

人として使命を果たしたと言えるでしょうか？

本当の人生の価値とは何でしょうか？

(一九九九年七月三日)

恋 歌

(49-2040)

二月はネコの恋の季節である

アウーン ウヤーオ ウグルルワーオ

とあちこちで声が聞こえる ネコ嫌いの婦人に激しく

批判されて 網の中に囲われたりしているが

自由にかっ歩するものも少なくない

ウグルウと低い声を出しながら 窓の外を通り過ぎる影に

「おい」と呼び掛けると 一瞬声が止むがすぐ再開する

「おじさん それどころじゃないよ」という気配

しばらくすると どこかの家の戸がガラッと開いて

「ヤカマシイ！」という声と共にパシッと石を投げる音

私はネコの声に慰められているから「ウフッ」と笑う

「いくら叱ったって無理ですよ 彼らは何千年来やって来た
ことですから」と心の中で思う

先日の介護相談では 老男性の性的な問題について

お嫁さんからコッソリと相談があった

なかなか表に出にくい問題であり

特に痴呆老人の場合 説得や叱責は無駄である

対応（言葉、態度等）について事例を研究することにした

（二〇〇〇年二月二四日）

反論

(53-2184)

「伊規須さんが『よくなった』と言われるだけではおかしい
みんながよくなって欲しい・・・そう思いませんか？」

介護保険発足一ヶ月 私(妻)は施設入所者として
負担が三分の一以下になり サービスはむしろ向上した
ことなどを書いた それに対する某氏の意見である

私は「介護保険万歳！」と書いたが 万々歳の人もいる
不平・不満・悲鳴が上がる事は当然予測された・・・
一方 良くなった人は黙っているに違いない

そこで全体を偏りなく検証するには

敢えて書かなければならない…….と思った訳である

某氏に反論…….「みんながよいようにはできません」

「大部分が納得する線…….が落としどころでしょう」
調整機能としての政治がある所以だと思います

困難を来した人には 保険料にしても負担金にしても

支援策が考えられておりますし 負担が増えてむしろ安心

という人もあるでしょう また自己負担でサービスを大いに
利用しようと考えている人も少なくないと思います

大津波が来ています参画して作り上げようではありませんか

(二〇〇〇年五月二八日)

親方

(53-2216)

名古屋場所の一四日目 魁皇は一〇勝した

豪快な相撲で 横綱武蔵丸を土俵に這わせた

千秋楽の結果を見なくても 大関だという声が上がった

その日 魁皇の親方「友綱」は勝負審判として土俵際に座っていた 魁皇が勝った瞬間 カメラは友綱を写した
その表情はまことに複雑だった

◆自分の弟子だから嬉しいのは当然

◆何回も挑戦してやっとという感慨

◆あいつはまだまだだという戒め

◆次は横綱を狙わなければならぬ

◆これからが大変 という責任感

◆横綱は引き際が大事 どう指導するか

◆不足とは思わないが自分は大関を経験していない

◆今は全体の審判だ 嬉しそうな顔はできない

◆一生懸命にこらえるのも辛いという顔

◆彼の表情がムズムズと動いたような気がした

親方とはむつかしいものだ

自分の立場に 引き比べてみる

◇支えられてはいるが いずれ引退しなければならぬ

(二〇〇〇年八月七日)

課 税 課

(53-2226)

泰子は門司区民だから 市・県民税の納付通知書は
門司区役所から豊寿園に送られて来る
自動振替手続きをしていなかったから
私が代行納付しなければならぬ

ところが書類の洪水で 通知書を見失ってしまった
おそろおそろ門司区役所に電話して 再発行をお願いすると
こちらが恐縮するほど丁寧な物言い！「わざわざすみません」
と平身低頭するようなありさま

不思議に思つて「なぜだろう」と考えた

「無くしたから そのままにした（納税しなかった）」
という人が多いのではないだろうか

中には 悪意でそうする人もあるかも知れない

そう言えば 「役所の中で最も感じのよいのが税務署だ」と
聞いたことがある 課税課も同類かも知れない

それが 良いことかどうか分からない

こういう処理も 私が死んだらどなたにお願いすべきか

西日本銀行の指定口座から自動振替にして置くべきだろうか

(二〇〇〇年八月七日)

私は、「痴呆は神様の賜物である」と思っています。なぜなら、痴呆者本人は「人間が崩壊してゆく厳しい現実」を鋭敏に感じる事ができなくなるからです。もし、それを感じるならば、狂うか自殺するはかはないでしょう。

末期医療で、モルヒネを上手に使用して痛みをコントロールされることにより、患者は豊かな終末を過ごすことができるように、痴呆者は（若干の戸惑いはあっても）この世の一切から解放され、ハッピーな終末期を過ごします。

一方で、家族（介護者）は否応なしに優しくなります。中でも、私のように、一人暮らしで、現役の仕事も続けようということになれば、遅しかなければ生きられません。そうしなければならぬとすれば、必ずそうなります。

すると、痴呆者にとっても、介護者にとっても、良いことばかり、ですから私は「痴呆は悪くない、いや、むしろお勧めです」と言っています。

痴呆に対する偏見は、諸悪の根源であると思います。本人（家族）が恥じる・隠すから、回りの人は助けることをためらいます。そうこうしているうちに

痴呆者と家族は共倒れになります。

そういう事態を避けるためには、痴呆を恥じないで公表することではないでしょうか。恐る恐る覗き込むからプライバシーが問題になります。しかし、自分から「私は（私の家族は）痴呆です」と言ってしまうえば、回りはどんなに楽になるでしょう。援助が有効適切に届くことでしょう。

ですから私は、意地悪ではなく「皆さん痴呆になったらいいですよ。お勧めですよ」と言いながら発信を続けています。痴呆にならないこと、いやすことよりも、なっても乗り越える、そうすれば、むしろ収穫が大きいと思います。

日本は、すでに世界一の長寿国になりましたから、好むと好まざるとにかかわらず世界一の痴呆国になりつつあります。いずれ、どこもかしこも痴呆だらけになれば、偏見も無くなるでしょう。そうなれば、隠してなんかいられますから。痴呆は、カゼやハライタと同じ普通の病気です。（純粹の老化とは言えませんが）老化であるならば、病気とも言えません。

人間とは脳そのものであると思います。脳は身の程を知っています。死ぬべきときは死んでゆきます。それであるのに、肉体の寿命をいたずらに引き伸ばせば、生きながら死んでいる人、死にながら動いている人ができます。それが痴呆ではないでしょうか。

二〇〇〇年九月

伊規須 太郎

伊規須 太郎 (いきす・たろう)

- 1926年 福岡県に生まれる
レイテ沖海戦の生き残り、3発の銃弾を受け
うち1発は今も体内に残る
- 2000年 10年来の痴呆妻（特養入所中）をかかえて
家族会活動、ボランティア活動に励む
基督伝道隊・戸畑教会 牧師
「聖書に見る高齢社会」をテーマに研究中
詩集「別れの日々」（脆くはあるが暗くない）
①-⑤3集を発刊し、詩の総数は千編を超える
弾雨戦の半世紀後、高齢戦争を戦っている訳である

別れの日々 00. 9

——脆くはあるが暗くない——

2000年9月30日発行

著 者 伊規須 太郎
〒804-0092北九州市戸畑区小芝2-1-13
Tel 093-882-9266 Fax 093-873-1539

印刷所 博プリント社
〒815-0035福岡市南区向野1-11-22
Tel 092-541-6870 Fax 092-541-8185